また「嬉遊笑覽」の記載に由れば、若衆女郎の始まりは、大阪新町富士屋の抱へ千之助といふのが、最初慶原町の局にゐて、自ら髪を短く切り、寛文九年本宅の局へ歸つて月代を剃り髪を卷上げに結ひ、衣服の裾を短かく切り、後ろ帶をかりえ結びとし、懷中に鼻紙を高く入れ、局に坐つてゐるのを、見る人が好奇心にかられて門前市をなしたのが、その嚆矢であつたといつてゐる。

若衆女郎が斯くして世人の一般的嗜好に投じたと見るや、若衆女郎の先覺者たる千之助の抱へ主たる新町富士屋はいち早く取締木村又次郎の許可を得て、若衆女郎のゐることを看板にするために、局暖簾を他と區別して紺地としそれに定紋の鹿の角を柿色に染め出して目印とした。そしてそれが當つて以來、他の店でも凡てこれに倣つて、若衆女郎のゐるところは必らずこの種の暖簾を掲げるに至つたことが傳はつてゐる。その變態的流行が斯く時と所を得て、益々隆盛に赴いたであらうことは容易に想像し得るところである。

都會人の獵奇心と變態心理

何時の時代でも、世人の獵奇心の對照となつて衆目を惹くことが、自家廣告の要諦であるに變りはない。普通にあるまじき姿態風體を以て自ら異端者となることが、衆目を集める最も賢明な捷徑である。賣淫が凡ゆる場合經濟觀念を基礎にした一個の營業であるにしか過ぎなかつた點から考へて、當時の傾城の多くがこの點に留意して自己の商賣繁昌を希つたのは寧ろ當然なことであつたであらう。元來若衆女郎が一般的になつたのは、寛文九年三ヶ條の法度に由つて若衆を禁じたことがその主要の由因であるが、たまたま嫖客心理を巧みに摑んだ怜悧にして勇敢なる千之助の如きが、若衆に對する時流の好尙が殘つてゐるのに乘じて、男裝して嫖客の獵奇心を摑んだのが當つたので、客の獵奇心

に對して鮮かに立廻らんとする潜在心理は、何時の時代にも賣淫婦の持つてゐるものであることが考へられるのである。傾城が女歌舞伎の亞流であり、又能太夫であつた關係から男性の源氏名を冠したことが必らずしも直接の原因ではない。女歌舞伎が男裝して喝采を博した過去の歴史、また現に男娼たる美少年の若衆が嬌態をとゝのへて濶歩してゐるのを見て、これを巧みに模倣して彼等の上に一歩抜んずるの快を思つた結果が、彼女等をしてかゝる變態的傾向をとるに至らしめたのであると觀察し得るのである。

しかし、これと共に彼女等の變態性慾的素質に就いて見ることが同時に忘れられてはならない。若衆女郎の發生は一面に於て、賣淫婦の素質の一部としての變態性慾的傾向の結果であることは否定出來ない事實である。

若衆女郎が太夫や天神の如き高級な遊女に現はれず、下級な端傾城に多くそれを見たのはこのことを明かにしてゐるものである。現代に於ても下級な賣淫婦の間には屢々斯樣な變態性慾的現象を見ることが尠なくないのである。所謂トーハーと稱されるこの種のトリバーデの女は寧ろ一般的にさへなつてゐるのである。たゞに日本に於てのみならず、巴里の賣淫婦間のこの惡弊は、一八二二年法令を以て、同寢臺中に二人の×××を××せしむることを禁じせしむるに至つた程甚だしいことが實證されてゐる。そして賣淫婦でトリバーデの女は、常に男性的に振舞ひ、これを放任すれば遂には男裝をなすに至ることは普通知れ渡つた事實である。しかも當時にあつては男の變態性慾が公然として若衆の存在を要求してゐた時代であつたから、ひいてその間に男の需要と女の供給が心理的に結合して、男裝妓の出現を非常に鮮明にしてゐたと見ることが出來るのである。

この若衆女郎の變態性慾的流行現象が、現代のモボ・モガの變態的流行に似てゐるところが多いのは一奇である。一體に斯うした變態現象が一般化され

脚か腰か……

るには時代の環境が大いに與つて力あることが看過されてはならない。モボのラッパズボンが裾廣り二尺に近くなり、モガの斷髪が男の理髪店を繁昌せしめてゐる事實は、一面にモボが女性化し、モガが男性化してゐる傾向を暗示するものであると見ることが出來る。彼等の變態的流行現象は一方奇を好む廢頽氣分が露骨に現はれた結果でもあるが、同時にそれは無意識のうちに釀された彼等の變態性慾的表現であるにしか過ぎないのである。

男性と女性との顚倒性格は現代の趨勢であつて、廢頽的神經衰弱時代の齎らす必然的な異常心理の發現するところがそれである。奇を好む心は健全なる時代には健全な方向をとつて健全に發露するが、世紀末的な時代には異常な變態的流行現象となつて現はれるのが、歴史の示す事實である。

若衆女郎がたまたまそれであつた。現代のモボ・モガがそれである。時の經過はそれ等の流行を必然的に清算するであらうが、數世紀をへだてゝ、斯うした類似の傾向を見るのは、歴史は繰返すとは言ひながら、興味あることでなくてはならないであらう。（昭和四年四月）

抱擁と接吻

力強い抱擁……歌謡の接吻……目をつぶらぬ接吻……抱擁の遊戯……抱擁の次ぎに識別するもの……手の接吻……淫蕩の奥底……髪毛……アロチスクな髪化粧……動的な抱擁……女からの抱擁……接吻と歯……歯咬（バイティング）は愛撫の極致

力強い抱擁

抱擁と接吻は印度の性經『カマ・ストラ』でも特殊な××技巧としての六十四のなかで第一に擧げられてゐる。

抱擁は接吻よりももつと××的だ。接吻には、手の接吻があり、額への接吻があり、頬への接吻があり、髪毛への接吻がある。まづいろいろの接吻で、その接吻するところによつていろいろの意味をもつてゐる。接吻するところによつては氣狂扱ひにされるところもある。手、額、頬、口、眼、掌、腕と頭髪をのぞいて「その他にこそは狂氣なれ」とは詩人グリル・パルツルが接吻を謳つた詩の結句だ。だが、これは××なぞへ接唇すべからざる情慾的な××の慎しむべきを訓へたのだ。

抱擁は××××が××への行動である。接吻のいろいろに對して抱擁はあくまで愛慾の象徴だ。愛撫する抱擁。背に手かけて、女の頸に××しながら、なだめすかすが如き抱擁。××への抱擁。腰に××に××する抱擁。×××の抱擁。それがタッチングとかラビングとか×××。×××××などの抱擁が『カマ・ストラ』に示されてゐる。

抱擁の×感は、その顔の表情に求めてはいけない。抱擁するものも抱擁されるものも、××の感覺を手に腕に腰に脚によく表現されてゐるのだ。ともすれば、抱擁の瞬間に女はまづ眼を閉じてくる。閉じられた眼にはたゞ××に耐えられぬ表情を語らせる。巴里のルーブル博物館にあるハインリッヒ・アルデグレヴェル（1502——1555年）の「夫婦」は、接吻と抱擁との瞬間的表現。だが、この繪畫からは偽りの性愛技巧に富んだ貴族の男女の抱擁の匂ひは微塵も現れてはゐない。十六世紀の中頃から勃興してきた市民階級（ブルジョアジー）の結婚直

後の力強い抱擁と接吻の感覚が湧いてゐる。

このやうな力強い抱擁と接吻を味ひ得る男女こそが、××××××××××××の味ひをもつのだ。正しい××の抱擁は、あくまで力強く技巧なくして×××いいのだ。……(挿絵「夫婦」アルテガレヴェル作)……

歌麿の接吻

「……それならば日本に接吻(せつぶん)といふものがなかつたか、といふと、昔の日本人だつて接吻は大いにしてゐたのである……徳川時代の草双紙讀物小説を見ても、至る處に「口吸ふ音」といふものを聞かせられる。今日、日本が西洋に誇ると稱せられる唯一の藝術品の浮世繪を見ると、歌麿、春信等の畫家が描いてゐる接吻の繪は無數にある……」

と丸木砂土君は「接吻(キヅス)」のことで大にわが日本の接吻について氣焔を擧げてくれた。

全く丸木砂土君のいふ通りに、接吻について何も日本をいやに衞生的にいやに特殊的に扱ふ必要もない。また、そんな必要もないことだ。

だが、接吻が口吸ふ音といふ異稱であつたことは、すくなくも玆に挿入した歌麿の繪がよく物語つてくれる。

若い燕の口を吸ふ女。男を知つた女。女の情を、××に知つた若い男は身を烈しい女臭と××××の××××××に沒した。いかに徹底した刹那的な艶笑藝術の繪畫的表現であることよ。

惜しいかな。この歌麿の口吸ふ音の繪は上部しか玆には現すことが許されるのみだ。

何故、この繪の下半部をかくしたか。やはり、丸木砂土君の同書のなかに

力強き抱擁

口吸ふ女

歌麿筆

「……接吻とは第七天國です。下を見れば目がくらむ。だから」の一句で、口吸ふ音を味つてほしい。

肩にかけた女の馴々しさ。嘆賞すべき××の瞬間！　……(挿繪「口吸ふ女」歌麿作)……

目をつぶらぬ接吻

東洋人は接吻(キツス)を知らない、とバール・ダンジーイはいつた。

彼の所說によれば、われわれのいふ接吻は吸ふたり吸はせたりする接吻で、これは白皙人種の祕戲だといふ。唇を吸つたり吸はせたりするのが接吻で、支那人蒙古人の接吻は嗅いだり嗅がせたりする接吻だ、と說いてゐる。

この嗅いだり嗅がせたりする接吻は、接吻でないならこれをなんといふ。嗅唇とでもいふか。

だが、バール・ダンジーイは、異性はお互にその異性臭を嫌惡するどころか、むしろそれを好んで、その異性臭の發散に性愛技巧の極致があることを知らなかつたのだ。

吸つたり吸はせたりする接吻以上に、嗅ぐ嗅がせるの接唇こそエロチックな味覺と嗅覺とが與へられてゐる。風でもひいて、鼻がつまつた時に、念のために接吻をしてみたまい。そこに何がのこるか。

こゝにみせた繪はその筆者の名も知らない。たゞ印度の古代密畫としてかなりに有名なものらしい。

印度の女の接吻は、接吻そのものにすでに歐米の女の接吻技巧を蹴飛した妙味をもつてゐる。接吻だけで××の昂進どころかそれによつて××の××することさへも、唇と鼻尖(はな)の微動から感覺させてしまふのだ。

嗅ぐ接吻の瞬間、男が香たかき酒盃をもつ。腕の姿勢。眼と眼。しかも、男女ともに兩眼はつきりと睨み合ふが如し。眼をつぶらない××は、たゞ吸つたり吸はせりの單純味に滿足しないのだ。

戀愛の焔眼を射らざるためどころか、××の焔すでに眼を射つて剌すところがない。

この印度の密畫こそ、接吻の起原が嫉妬說によつても說明される。夫が妻の口を、妻が夫の口を味覺と嗅覺とによつて檢査し合ふの光景でもあらう。

おそるべき端正な接吻ぶり。印度の接吻については『カマストラ』の「愛撫篇」をよんで、大に學ぶべきである。……(挿繪印度密畫「接吻」作者不詳)……

抱擁の戯

薄情ものゝ唇は薄い、とは東西ともにいはれてゐる。それが、女であらうと男であらうとも。盃の薄でのもの、唇にきれるやうに感じるものに酒の味が淋々とわかる。だが、唇の分の薄いのはもの寂しい。

××された女の肉體美。肥えてゐるが、贅肉の清算された健康美。ふくよかな乳房。太腿あたりから流れてゐる×××××××。その厚い唇。すでに許した××を語る兩眼。

抱擁する男の男性美が語る精力の充滿は、何よりも嫵媚めいた女の乳房への觸感に生々としてゐる。

骨逞しい男の抱擁は、やがて唇厚い女への接吻へといそぐ。

男の强さを語る太い指先に、すでに乳房からの情熱が渦卷てゆく。庭はいさ情熱の嵐だ。……(挿繪「園庭情景」ウェルフ作)……

目をつぶらぬ接吻

印度密畫

抱擁の次ぎに豫期するもの

接吻は、××技巧とか艶笑藝術の花だ。だが、その接吻も、たゞあまりに羞恥的であつて、接吻そのものに囚れたんでは、決して××技巧の極致だとはいへない。

もしも、接吻のあとで、そこに衝動的にくる××が湧くなら、その接吻こそ艶笑藝術の果實だ。勿論、接吻は男がより以上により技巧的にしかも熱情的なやうに女に與へねばならない。

その抱擁は、男は女に、女は男に、觸感と嗅感とからして、あともうすこしの飽滿點までのこしておくほどの柔さがほしい。ツアシンゲル（Zasinger）の「室内の抱擁」は、いかにも女だけの顔の表情を描いてゐるのみだ。だけれど、男の表情は繪にこそ描かれてないが、想像してもわかる。

抱擁されてゐる女だが、その女の瞳、ほてりきつた女の眼ざし。これは性的早熟者の眼ざしではない。性的不感症の女の瞳ではない。

これこそ女が接吻のあとにくる××。××のあとにくる××の味ひを遠くにしかも短く描く瞳。

××される女の秘な快樂。この繪が示してゐるのだ。……（挿繪「抱擁」ツアシンゲル作）……

手の接吻

アメリカの停車場のプラットホームなぞでよくみうけたのに、頬と頬へチュウと接吻をする。伯母さんと姪といつたかたちの女達。ほんの形式一點張り。

しかし、遺に接吻技巧に馴らされてゐるだけに、その妙な音はたしかに接吻らしい氣がする。稱してサニタリ・キッスといふ奴だ。頰と頰へ接吻でも、それが情熱に燃える男と女ならば、サニタリ・キッスも、いゝ加減のエロ味をもつてゐる。

だが、餘りに形式張つてさつぱりと有難くないものは女の手への接吻だ。それにしても、これは形式張つてゐるとみるのは嫉加減の第三者の感ずるもの。男にとつてはもつとも烈しい心臟の鼓動高鳴するを覺ゆるであらう。

身も魂も許さないが、せめて「そちにこの手を……」位で、いかにも女の尊大さが潜む。と同時に、男が女を敬するの情感が湧いてゐる。これは戀人同士でも男が下郎で女が姫御前。決して戀愛の快樂が均等の場合であり得ない。むしろ女の虚榮心を表現化した接吻である。

セントルイス市、合衆國の中西部の黑奴の蝟集してゐる大都市。雪のふるさむい降誕祭の前宵、黑人の××を闇の小路のある二階にかひにいつた。由來、アメリカでは年若い——未婚のうちに——男が、黑奴の女と××××××いゝ運を掴むといふ傳說を信じてゐる。それで、まあ若いうちにと、黑人××街へといつたのだ。

それぞれひきつけから×××の本部屋にゆくと、黑奴の××がいきなり軀を×××××××、抱擁せん××××××漆黑にして油磨きをかけた、どす赤黑い唇を×××××××。

いかにエロとグロの交響樂をたのしむとしても、黑人の×××——それもジョセフン・ベーカーみたいの明眸皓齒ならまだしも——の唇、うじやじやけた爛れた×××××の厚つぼつたい唇。それを×××勇氣だにでない。すると、いきなり軀をひき離しておいて、ぐいと手をさしのべて、接吻しろとばかり。敢てそこで恭しく彼女の手の甲に接吻した。その時の黑人×××の輝しい顏。

ツァシンゲル作

抱擁のつぎに豫期するもの

抱擁の戯

ウェルフ作

まさに黒びかりの輝しさ。瞳には性的露出症のひかり。片手はすでに×××をなかば××××て、……。

おなじ手への接吻でも、これは路易時代の佛蘭西の風俗畫で「小房の前」と題されたもの。右手をひとりの男に委し、左手はあとにのこしてゆく男に。しかも、その左手に男の接吻。召使がちらつと眼をそらしたその瞬間に、心ひそかに愛するひとへの手に接吻。手への接吻。男の胸はどよめく。但し、手への接吻を強要する女は、その軟くふくよかと手の甲の肉がもれあがつてゐなければ求めてはならない。糠味噌くさかつたり、郊外の一品洋食のカツレツの肉のごときでは彼女に「手への接吻」を強要するの權利なし。男もそれなら電信柱へでも接吻するにしくはない。

手に接吻するは男の敬意をあらはし女は虚榮心の滿足。現代的なものじやない。……(挿繪「小房の前」)……

淫蕩の奥庭

奥庭の築山のかげはお小姓と侍女の嬉曳の祕密境であつた。やはり十七世紀あたりからの歐羅巴の封建時代には、佛蘭西英吉利の貴族の奥庭は××技巧のための祕密境であつた。

その頃の男女は、すでに××技巧に生きてゐた。貴族はたゞそれに生涯の鍵があると信じてゐた。

宮廷の淫樂、貴族の淫蕩生活、僧侶の耽愛等はルネッサンス以後の西歐の性愛史艶笑史のうちでの劃時代的な性愛露出の舞臺であつた。いはゆる遊戯的快樂の藝術が、繪に彫刻に文藝に現れてゐた。それがロココ時代の現出であつた。

流れるやうな肉慾の疼愛。そのために、家具も建物も衣裳もすべてが性慾

の享樂のための發達であつた。あたかも、われらの櫺子窓の下に朱の瀧繪の鏡台があり如輪の長火鉢に猫がうづくまつて、薄暗い壁には三味線一挺。片隅に赤い友禪のかけ蒲團で置炬燵、といふ妾宅藝術の表現とでもいつたアッコンモディション。それに類してかロココ時代の性愛技巧の舞臺はまづ塵寰を脫した蔽ひ冠さつた樹木の蔭。それは人の眼を遮つてベンチがひとつ。人知れずそこへ媾曳して祕密の快樂に耽る。だが、その奥庭のベンチにはわれらの知る夕化粧の襟足際立つた、肩から滑べり落ちさうなお召の半纏、しどけなく引掛結びの晝夜帶のそれしや上りのお妾は必要としない。むしろ、「奥庭の抱擁」にみるやうな乳房もあらはを乳抑へに辛じてをさへた女。それを狙ふ男。淫蕩の奥庭。この繪からは、女はなかば許した眼ざしと、男の切なる希願を抑へる手つき。男は片脚のばして恭しくしかも切なるを示する姿勢を性愛技巧の步兵操典として學ぶべきである。……(挿繪「淫蕩の奥庭」)……

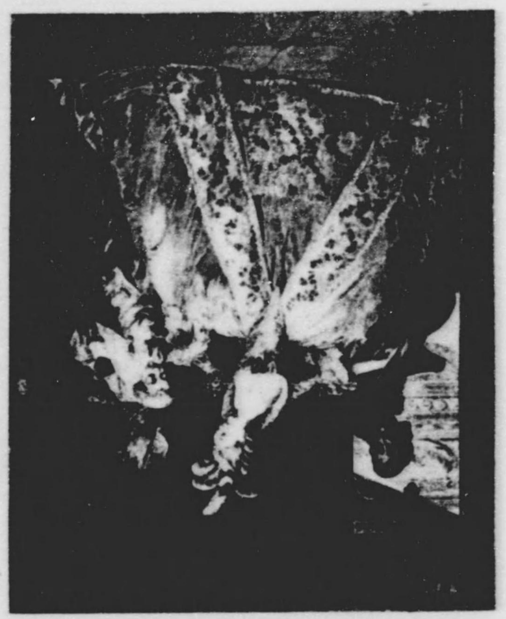
髮　毛

髮毛は金髮がいゝ、とは「殿方は金髮がお好き」から始まつた概念だ。概して金髮がいゝといふに止まる。金髮なるが故にそこに魅惑的なものがあるとはいへぬ。

傳說では、髮毛の赤いのは××に際立つた體臭をもつといはれてゐる。アレキサンダー大王が若い時代から群る女に好愛れたのは彼の髮毛が赤かつたためでない。髮毛の赤い性のものが××から際立つた芳しい體臭を發するからだと。

フェレの說によると赤い髮毛の女は情慾を抑制することのできない程どに性的魅力が强いのだと。

浮彫の奥庭



手の接吻

断髪はいかにもスポーツ全盛の現代の若い女には相應しい。だが、それはすくなくも女が男への挑戰だ。髪毛の房々と長くあつたのは殆んど東西を通じての男女を區別する外形上の特徴であつた。女が髪毛を切るは犠牲とか誠意とかを示す最後の手段であつたことも東西ともに同じであつた。剃髪はやはり女としての資格を捨てた姿であつたのだ。

髪毛の美を捨てゝしまふのは女を捨てゝしまふのだ。髪毛ばかりでない。女は髪毛に眼に睫毛に唇に瞼に手に指に乳房に脚に、五體のどこにも女らしさと女の美とが湧れてゐるのだ。そのひとつが缺けてもよくない。希臘神話に、オデセッーがデルフォイの山上を獵をしながら歩きまはつてゐると、二人の處女——ひとりが黄い房々した髪毛に純んだ瞳と肉感的な唇、彼女は「わたくしはアレテです」と。——ほかのひとりの女は、情深い瞼にふくよかな乳房を握つてもらいたいばかりにもりあがつた掌。彼女は「わたくしはトリフォーです」と。二人して「どちらかを女として選んで下さい」と。だが、この二人の處女はひとりひとりに切り離しては完き女の美はないのだといふや、その二人の女は消えた。この神話は女に女の女らしいところを教へ、男に女の美を告げた女神アフロデットの仕事であつた。

髪毛のない女。それこそ世も捨てた寂しい女。

グロテスクな髪化粧

十八世紀の後半期からは髪毛が女の美の象徴としてもつとも技巧を加へられた。髪化粧（ヘーヤ・ドレッシング）とまでいはれた。マリヤ・アントアネットの時代には髪毛の結び方も一七八四年から八六年の二年間に七つも型が流行した。ナポレオン時代には一週に一度毎ちがつた髪化粧が流行したと。

手の接吻

淫蕩の奥庭

断髪はいかにもスポーツ全盛の現代の若い女には相應しい。だが、それはすくなくも女が男への挑戰だ。髪毛の房々と長くあつたのは殆んど東西を通じての男女を區別する外形上の特徴であつた。女が髪毛を切るは犧牲とか誠意とかを示す最後の手段であつたことも東西ともに同じであつた。剃髪はやはり女としての資格を捨てた姿であつたのだ。

髪毛の美を捨てゝしまふのは女を捨てゝしまふのだ。髪毛ばかりでない。女は髪毛に眼に睫毛に唇に瞼に手に指に乳房に脚に、五體のどこにも女らしさと女の美とが湧れてゐるのだ。そのひとつが缺けてもよくない。希臘神話に、オデセッーがデルフォ井の山上を獵をしながら歩きまはつてゐると、二人の處女——ひとりが黄い房々した髪毛に純んだ瞳と肉感的な唇、彼女は「わたくしはアレテです」と。——ほかのひとりの女は、情深い瞼にふくよかな乳房を握つてもらいたいばかりにもりあがつた掌。彼女は「わたくしはトリフェーです」と。二人して「どちらかを女として選んで下さい」と。だが、この二人の處女はひとりひとりに切り離しては完き女の美はないのだといふや、その二人の女は消えた。この神話は女に女の女らしいところを教へ、男に女の美を告げた女神アフロデットの仕事であつた。

髪毛のない女。それこそ世も捨てた寂しい女。

グロテスクな髪化粧

十八世紀の後半期からは髪毛が女の美の象徴としてもつとも技巧を加へられた。髪化粧（ヘーヤ・オレグランド）とまでいはれた。マリヤ・アントアネットの時代には髪毛の結び方も一七八四年から八六年の二年間に七つも型が流行した。ナポレオン時代には一週に一度毎ちがつた髪化粧が流行したと。

斷髪は遠くバビロニヤが地中海沿岸に勢力を振つた時分に始まつた。さうして時代の變遷はいくたびか女の髪毛を長く短くと流行のサークルに應じて變化さしてゐた。マリヤ・アントアネットは絞殺された路易十六世の皇后として贅澤三昧の宮廷生活を送つた女だが、髪毛の結び方に hedge-hog, half hedge-hog, mills-soap mad dag とグロテスクな名稱さへ附して親しくそれが流行の魁となつた。

これらの髪毛の結び方の猛烈なことは挿入された繪畫でみても一見わかる。この巴里の髪毛流行が倫敦にいつてはマカロニイ・ヘッドなどの奇妙な髪毛になつた。これは佛蘭西の流行に心醉した當時の貴族達が男女の衣裳に珍奇な新流行を考察して倫敦社交界の流行兒となつて得々となつてゐたマカロニイ倶樂部の名から轉じたものだ。

針金の鬢型。入れ髪。縮れ髪。それにつける香脂と香水。髪毛に輝かす寶石。ビイドロ。鳥の羽毛。造花の簪。リボンが貴婦人の頭髪の一切であつた。結びあげられると三呎から四呎あり、結つてしまふと、それの壞れるのが惜しいので、一週間位は寢臺にねずして椅子にもたれて睡眠をとつたといふ。

この髪毛を結ぶのには熟練した髪結ひで、親方は助手をつかつて三日乃至四日もかゝつた。費用も嵩むので、一たび結ふと、できるだけよくもたしておくことに貴婦人達は苦心した。そのために、髪毛に蟲が湧いて、掻いても掻いても掻いので、髪毛のかゆみ止めや蟲退治の香水や香油が工夫されてゐた。

だが、いかに貴婦人は髪毛を新しい流行のための犧牲にして虚榮心を滿足しても、蟲が湧いた髪毛では色消しだ。こんなグロテスクな髪毛を結つた時代にはどうして男に××したかは遠にかいてなかつた。こんな貴婦人との×××こそ『カマ・スツラ』の「壁に押しつけての××」×××××のであらう。

斷髪は虱が湧いたのから流行した流言はともかくとして現代の斷髪は歐米

結髪の怪美

腰箍の怪美

ではまさに十八世紀から十九世紀へのグロテスクな髪毛の結髪の反動とみてよいだらう。右傾に對する左傾だ。

高髷、中高島田、結ひ綿、藝者島田、島田崩し、いたこ髷、さきちご、銀杏髷、銀杏崩し、おはつ髷、兩輪、茶筅髷、丸髷等々いくら江戸時代のわれらの女の髪毛技巧でも十八世紀末期の歐羅巴の女どものグロテスクな髪毛にはまさつた技巧だ。

靜的な抱擁

額に、頬に、咽喉に、胸に、乳房に、唇に、口のなかに舌に、或は性慾變態症でなくしても××に接吻して××××。

だが、接吻は決していかなる箇所に×××するにしても動悸と××の烈しさを相手に感覺させることなく××するのでは××技巧ではない。

抱擁と接吻とは××への果實だ。だが、この靜なる物憂げな抱擁をみ給へ。肉と慾を捨てゝ神へ精進してゐる尼僧アンナと僧ヨハイムは尼僧院の入口でしづかにしづかに××した。その瞬。

十九世紀の諷刺家コンラード・ウィツの筆。どこの國でも、性への反逆がやがて性への冒險へと志す人間の强さを語つてゐるのだ。

それにしても、ジョン・バン・エイクの「朝の別れ」はたゞわづかに羞じらふ花嫁の手を輕く握つてゐるだけ。そこに抱擁も接吻も描れてゐない。十五世紀頃の風俗畫だといはれてゐるが、十五世紀頃の人間はかくまで性愛生活に靜的であつたのか。

行儀のいゝ新婚夫婦。それがすべてだが、脱がれてゐる木靴と狆のくしやみ面。靴と動物が女の足許にあることは××を物語る當時の×××であつた。

女からの抱擁

抱擁でも接吻でも、それが男と女との間に申譚的であつては、××的遊戯の一種だ。

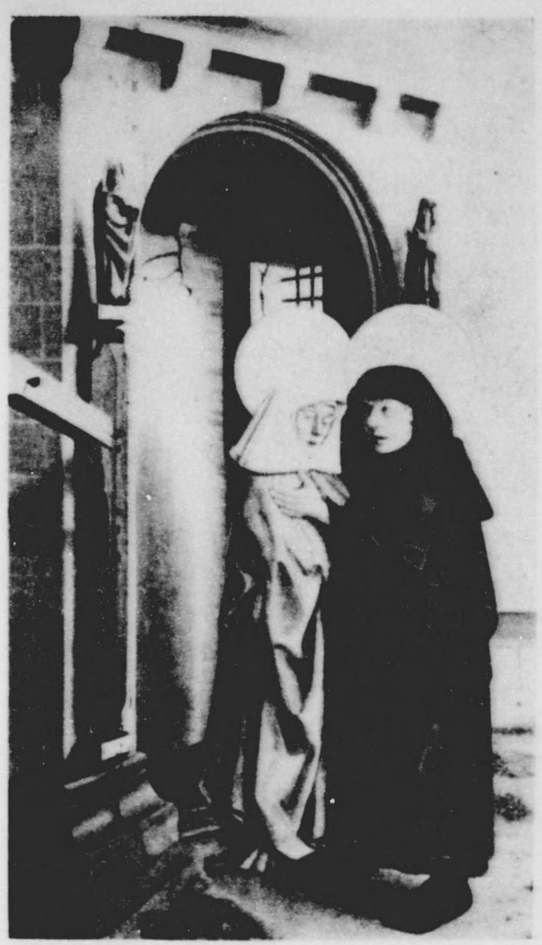
××は男から女にしかけるものだ。接吻は女から男への秘戯だ。女からの抱擁は悦しさあまつて男に噛りつくとかとびつくの瞬間的な行動と表情とが多分に現れてゐなければ效果的でない。敢に抱擁するは、母になつてから、老妻になつてからの階段である。

兩腕ふかく擴げて、胸も××だして××のあたり波うつ刻動と腰の旋律(リズム)に×××の××がなくてはならない。その時、女は決して皓齒をちらりともみせてはいけない。白い齒のちらつく××はすでに敗退だ。皓齒は接吻のその時に男にみせるに限る、と西洋ではいはれてゐるのだ。

現代の戀愛は男と女とが自然から與へられた異性力の結果ぢやない。現代の戀愛は男と女との性愛技巧がもたらす享樂の延長に過ぎない。抱擁も接吻も勢ひ遊戯的享樂や性愛的秘戯としてその效果が考へられる。だから、現代では接吻の辛い味にもひとつの意義をもつのだ。それが、もし、味ひよく男に與へられるなら女はすでに勝利者だ。ペルドリエル・ピシェルの詩に

僕は感じた。兩手の中に「春」の倒れ掛るのを。
僕はそれを捕へ、それを抱(だき)緊め、それを壓(おさ)へた。
風信子色(ヒヤシンスいろ)の濃紫の髮、ふくよかに調つた脣(くちびる)。

とある。接吻のよき效果こそ「春」そのものゝ感じである。それにしても、日本人は男でも女でも餘りに唾液が口唇によけいにあり過ぎる。舌を動し過ぎると、接吻技巧の洗練さを知つてゐる歐米の女が口癖にいふ。男は女の舌と唇



靜的な抱擁

コンラード・ウィツ作

朝の別れ

ジョン・パン・エイク作

とを微に捕獲するの用意が必要だ。それには、その接吻が齎された××への道程が、瞬間的な衝動からか、理解ある戀愛の一過程か、想像と幻想への誘惑からか、接吻につぐある××を豫期するのか、等々接吻に際してすぐとつかんでの接吻技巧でなければいけない。

印度のカト種族は、太腿の×××××××に、腕に、臍に、接吻する。だが、これは××が最高潮に達した男女の××の感情としては、必ずしもカト種族ばかりの風習だとはいへない。

接吻と歯

接吻が、彼女からのものであるなら、彼女が燃えるやうな紅の唇の主であつてこそ、その接吻には無責任の感じをもてる。ヴァンパイヤの紅唇へは男は純な感情を捧げる必要はない。

健康さうな唇。唇のなかには雪の白歯口。皓歯のこぼれてみえる唇への接吻。その唇に、その皓歯に、誘はねばならぬ。

歯は、それが雪の白歯口であつてこそ接吻への誘惑となる。鐵漿は女の身の嗜みであつたかも知れぬが、接吻と歯との概念には現代人にはぴつたりとこない。夫に仕へて他の男の誘惑をうけぬの用意から鐵漿をつけたとしても、黑い歯への接吻はグロテスクな感じがでてゐる。薄黃く歯滓のかすれてゐるのよりも鐵漿の歯がいゝかも知れない。レオ・カンナァといふアメリカの歯醫者の『歯の傳說』といふ近刊ものに、黑い歯と紅い歯のことをかいてゐるが、南太平洋群島の野蠻人はいまでも歯の彩色で男を知る女であるかないかを歴然として示してゐるといつてゐる。

嚙むは××技巧のひとつだ。

印度や猶太では、嚙むが女の知るべき××技巧として××に達した感情表現だとされてゐる。

猶太の傳說に、ふいと道端ですれちがつた若い男女が將來を約すほど慇懃を通じた。たてる證人もゐない。井戸と鼬を證人だときめた。數年過ぎた。男は女を忘れて他の女と甘い××生活に入つた。嬰兒ができた。掌中の珠のやうに愛されたのが、鼬に咽喉佛を喰ひつかられ死んだ。第二の嬰兒が井戸に墮ちて死んだ。男は敢然として女を忘れて初めの女へと驗つた。嚙むは女の深情と知らねばならぬ。鼬はバイテングの惡魔化したもの。

接吻のときに嚙むは獸性である。決して××技巧でない。齒咬の窮極は××の××××のみ存するのだ。齒を相手の齒にあてゝも、その接吻は純な情愛の象徵でない。

愛撫の極致齒咬

「咬みつきたいほど……」とか「嚙りつきたいくらい……」とかは、男女の情事で、しばしば、表現される不用意の言葉だ。人間が原始時代に還るといふのか、男女の××××に、咬みつくとか、嚙りつくとかの感情が潜在してゐる。

咬みつくも嚙りつくも、齒のエロスだ。だが齒が麗しいので始めてエロティックになる。接吻にしても然り。齒はすくなくも男女の口唇の情愛を定める。

鰐口。つぼ口。火吹口。鉈口。出齒。齦露はれ。うそぶき口は、なんとしても齒咬には適しない。

齒咬は接吻していゝところならどこでもよいといはれてゐる。それにしても、接吻して××××とされてゐる上唇口腔眼瞼は咬んではいけない。皓齒、

紅唇のなかに皓齒

よく整調されたすき間のない歯並び、艶鮮な齦、は詩經にも「齒如瓠犀」とあが、それに若くはない。亂杭歯や唇上下薄く黄色い齦での歯咬では決して「丹唇外朗、皓歯内鮮」の艶美さはない。埃及フエニキア希臘では、紀元前に婦人は歯に技巧を加へた。義歯はすでに發達してゐた。アラビヤでは、その頃に、乳香と明礬の混合物で充塡する醫術さへ發見されてゐた。接吻が、人間の原始的發生だけに、歯への技巧は夙に行はれてゐたものと信じてよからう。

ねずみ歯の鋭さで、こまかい歯並びで、齦も血色がいい。それで男の肩さきに腕の××××××して、×××の想ひ出の歯咬。淑女よ、口はきつと含漱なさい。男は肩さきの腕の××××を、やはらかくやさしく撫でるとほんのりと歯のあと薄紫の血痕。妻君に發見されたりすると大騒動ものゝ歯咬。

腫れあがるほどの歯咬は、久しぶりでの遭ふ瀾。「今宵はかへしませんよ」のランデブーのかたみ。

女の腕に、男が忍ばせ得ぬ情愛を××して、××の×××には唇でつよく吸ひつけて歯で×××して珊瑚と寶石の象徴。女からの性的××ではあつてほしくない。

下唇と左頰へは微に嚙咬しなさい。情愛が長續きする、と西洋ではいふ。

女は男からの嚙咬を倍にしてかへしてもいゝのだとされてゐる。

倫敦でコカイン中毒の女が、嚙咬で男の舌尖を咬み切つて死に致らしめたことがある。うつかりと嚙咬を歓迎することもできない。

嚙咬は、抱擁と接吻と××と、飽くこと知らぬ××の情愛技巧である。

抱擁と接吻のエックスタシイに恍惚となつたり×××××した男女の描寫は×××。だが、その心理では男と女とは違ふのだ。

男の抱擁と接吻は能動的だ。女は受動的だ。これが男女の心理的相違である。それといふのも男は抱擁とか接吻とかの戯愛的技巧と性慾といふのを分離

してゐることができる。女はそれができない。女は抱擁と接吻とを男に與へ乍ら、愛情と性慾とを隔離しておけるならば、その女は姦婦かさなくば非常な戀愛的技巧の巧なものだ。この種の心理をもつ女ならば妻としては不適合だ。情人としてもつとも適應性をもつてゐるのだ。抱擁と接吻を遊戯的にやつたりそれと戀愛とを區別して考へられる女は男が警戒しつゝも戀愛三昧にはいれる。

概して、姦通の當事者としての女にはこの戀愛三昧にはづれない心理をもつ女だ。女の貞操を、女の愛情を、女の××を、弄ばれたり蹂み躙じられても、そこに興味と感激と刺戟とを感覚する女の心理は、妾にも情婦にもなれる。だが、妻としては危險だ。

抱擁と接吻とを惜しげもなく男に與へる人妻。そつと玄關先で愛する男の帽子に××する人妻。ひそかに廊下の××で×××に抱擁する人妻。怖るべき家庭の破壞者だが彼女にとつてはそれが三昧境である。その三昧境からの××がやがて怖るべき姦通への××的な觸感へと急ぐ。フ。オベルの『マダム・ボヴリ。』の夫シヤルルと妻ボヴリ。とレオンとの三角闘爭が、或はシユニッツレルの『西洋十夜』の登場人物の××技巧が、いかに抱擁と接吻とを女は行動に移すかを男に知らしてゐる。

結局、男が女に求めるにしても、女が男に求めるにしても、接吻は瞬間的なものだ。瞬間的なものだから事務的に陷つたらすべてが無效果だ。無效果の接吻それは賣淫にすぎない。

男女ともに、心理的に表現的に、抱擁も接吻も巧にごまかし得ることを知つて、巧な技巧を會得しなければいけない。

接吻も相手によつてその種類程度を異にしていゝ。

女がなんの感激もなく、男は求められてやむを得ずといふなら、——疲れた結婚生活の三年目位の夫婦の朝夕の——彼女も彼も、何ごとをも接吻に彩ず

けるな。接吻とはほんの唇と唇との×××。

男が、情熱に燃えて、迫る女の×に×に、微動する××の旋律を發見するならば、男自身も、その上唇と下唇とで、彼女の下唇のみを××するならば、それは彼女の××をして××××××のだ。彼女の上唇には觸れてはならない。この時には、男は動悸もあきらかに、わが心臟の鼓動もかくやばかりと、彼女の××に手を×××して××。

もし、女が、その明眸こそは氷のごとく冷たくあつても、その態度こそ淑女のごとく端正であつても、彼への接吻の刹那に、彼女の唇に彼女の潤ふんだ舌が男の××への××するならば、男は、彼女の明眸のねむるが如くにとじてゆく×××のへの××の觸感と××××と×××××。それは女が男に許す××××××。

彼と彼女が、端麗な戀愛技巧で終始することを欲するならば、その××は"*Straight-Kiss*"。

七つの接吻

希臘神話はなかなかに情愛の記錄だと思ふ。神の記錄に人間の記錄以上の情愛が示されてゐることが悦ばしい。いつまでたつても、希臘神話がよまれるのも一にそこに魅力があるからだ。

美の女神ヴ。ナスは、さすがに美の女神だけに、この女神をとりまいて艶物語がいろいろと盛りあげられてゐる。

まづ、賣淫の女神としてのヴ。ナス——なんてかくと、希臘の諸神のなかに賣淫婦がゐてたまるものかと——、だが、たしかに賣淫の先驅はヴ。ナスであつたといはれる。神もなかなかに人間的なとこがあつた。賣淫の女神もゐたし變

態性慾症もゐた。ジュピターが美少年ガミニードを寵愛したのは男色(ゲイ)であつた。

美の神ヴィナスは淫蕩の子をいくたりかもつてゐた。その數多い淫蕩の子のひとりサィキーが迷子になつた。誘拐されたのか神隠しにあつたのか、とにかく愛子サィキーの姿がヴィナスの手許から姿をかくしてしまつた。

多情でこそあつたがヴィナスは母性愛には燃えてゐた。サィキー可愛いやで手を盡してその行衛を探した。探しあぐねた。サィキーの人相書を觸れまはして神々に探しだしてくれと頼んだ。隠匿されてゐるならば隠さずにかへしてくれとふれた。それを觸れ廻つたのが商業の神マーキュリーであつた。

希臘神話にのこつてゐるサィキー探しのお觸れが、廣告の濫觴である、現代の宣傳の嚆矢であつたと西洋ではいはれてゐる。

この廣告宣傳——迷子サィキー探しのお觸れ——がなかなかに振つてゐた。現代の懸賞廣告といつてもよい。難しくいへば報償契約の意思表示でもあつた。新聞紙に代る商業の神マーキュリーをしてひろめやをさしたのだ。廣告と商業とは神との生活にもふかい關係があつた。

迷子さがしの廣告の内容は、美の神ヴィナスは愛兒サィキーを發見してその所在をしらしてくれただけでも、ヴィナスみづからが麗しい紅唇を提供して、七つの接吻を與へる。愛兒サィキーをつれてかへつてくれたならば七つの接吻以上に、それにまさる何物かを與へんと申出でたのである。

「……接吻以上にまさる何物かを與へん」の内容は、こゝでかれこれいふの必要はない。これこそ愛兒サィキーのためにヴィナスが××まで犠牲にした母性愛の表現であつた。けれど、これは交換條件をもつた××で、希臘の神々の生活にも性的交換——卽ち賣淫——があつた。現代でも接吻とそれ以上のあるものを提供すれば、何事をも成遂し得ること疑ひない。それにしても、ヴィナスの七つの接吻とそれ以上のもの。なんとエロティックな題材であることよ。

匂ひの艶笑文學

匂ひのエロス……接吻は嗅覺性慾……黑髮の匂ひ……女は匂ひの動物……窪村の嗅いだ女臭……體重三倍强の化粧品……臭鼻症のヴョセフィン……香水で國王を魅した姫……鳩の血にヴァヴナル・ボマード……ハンケチの金盞花……雅の香りと宵の匂ひ……鞣革の匂ひ手袋……のこんの香……腋臭の誘惑……青春の匂ひ……漢人は淡白で玄人は濃厚……好みの香水……髭を征伐する女……綬脂綿の悲哀……

匂ひのエロス

女の嗅覺力には、同性からの匂ひや體臭は、鋭く刺戟的ではあり得ない。だが、異性からの匂ひや體臭は、あまりに刺戟的であり官能的である。男が女の匂ひに對して絶對的に敏感であることは、女が男に對しても同じである。

男の嗅覺力は女の嗅覺力よりも、能動的なのだ。女は匂ひ香りに對しては男よりも決して敏感でない、といふのが、古代からの醫學者や科學者が立證してゐる。けれど、女は匂ひと香りとを好愛する。

ミシュルスは、男がすこし熟練さへすれば香料約二百餘種を完全に嗅ぎわけるのに、女は熟達してきても、まづ五六十種を嗅ぎわけられれば、鋭敏な嗅覺力だと立證してゐる。

けれど、女は匂ひや香りに對しては、ことに男の匂ひ——それが惡臭であつても——に對しては、男が女の匂ひや女臭を嗅覺官能に訴ふるよりも迅速で鋭敏なのだ。

同じ鼻の構造で——もつとも肥厚性鼻炎だとか臭鼻症蓄膿症で鼻腔の嗅覺粘膜が病的に嗅覺力の鈍つたのは別だが——何故に女が男臭だとか男からの香りや匂ひを敏速に且つ鋭敏に感覺されるのであり得るのか。そこに、匂ひと香りのエロチックな感覺がある。

獵犬の獵犬たる所以は、獸類の體臭を鋭く嗅ぐことができるからである。その獸類の體臭はすべての匂ひ香り臭氣が瓦斯狀であるが如くにやはり揮發性の體臭が獸類から發散してゐるのである。獵犬の獵犬たるところは、この獸臭の稀薄や濃厚を嗅ぎわけられる官能と訓練との結果にある。

犬のもつてゐる嗅官粘膜作用を、もし、現代のモボ・モガに外科的手術に

よつて移すことができたらそれこそ人性の佳快だ。もつとも、そのために、男が女臭の女臭たる嗅ぎたくない異臭までも嗅ねばならぬことになる。混雜した電車のなかでも、帳ふかく蔽はれた寢臺車のなかでも、花緞子の天蓋のもとふくよかな褥のかさなる閨房でも、××の××や不精ものの××の××を嗅感されるといふ苦痛も生ずる。これにしても性的變態性のものには好んでやまないことであるかも知れない。

番犬や乳牛は、月經時期××の腰のまわりに、嗅覺粘膜の尖端的觸手である鼻づらを異常にびよこつかせる。そこには××のエロスの發散があるからだ。

接吻は嗅覺性慾

接吻の發生的說明がいろいろの異說となつてゐる。社會學者は、接吻の起原の說明を遺傳說とか官能說とか約十も數へてゐる。そのなかで、匂ひと香りを中心としては、原始時代に男が自己專有の女が、男の不在中に他の男とでも××でもしなかつたとか思つて、女の唾液の臭氣を接吻によつて檢別する性能が接吻の起原だともいはれてゐる。

いくら自分で專有してゐる異性の唾液の臭ひがA種に屬する臭氣であるとすればとて、接吻によつてそのA種の唾液臭Aがお互に感別されても、もし女が齒槽膿症だとか蟲齒のとてつけもなく嗅氣ふんぷんたるの場合には、接吻によつては決して同一のA種に屬する唾液の臭ひが感覺されるものではあるまい。

女の口臭はなんとしても臭氣だ。女の匂ひとしては有難くない。まだ女の腋臭は男にとつて悅しい。女だつていくら惚れて愛しても、口の臭い男はよく

あるまい。生玉葱がいくら催春作用をもつたとしても葱の臭氣はたまらない。古代羅馬の女達は臭ひのある調理をたべるときつと麝香と薔薇の香精の含嗽水で口を香化した。古代エジプトの婦女はつねに香錠をふくんでゐた。

リグレーのチ。インガムを食後ぐちやぐちや嚙んだり、ダンスの前に嚙んだりするのは、アメリカの若い男女が好んでする風習だ。けれどチ。インガムそのものが粹なものぢやない。あれを憚面もなく他人前でぐちやぐちややる女などは、××の時の臭氣發散を平氣でやつてゐる女だ。

もつとも、現代のモボ・モガのやうに珈琲にも「それ砂糖だ」、紅茶一椀にも「それ砂糖だ」と、喫茶店やカフェの卓上の砂糖がいかにたゞとはいひ乍ら砂糖を過量につかふものは、嗅覺感覺の粘膜神經を麻痺させてゐる傾向がある。文明人は砂糖を日常消費するやうになつてから嗅覺力はますます退歩するばかりだと醫藥的に主張されてゐる。口のくさい女は相愛の男にうんと糖分をことごとに與へることだ。彼はついに女の口臭を感覺することが鈍くなるだらうから。

黑髮の匂ひ

金髮には金髮の匂ひがある。金髮の臭氣もある。

倫敦での經驗だが、三鞭酒のべら棒にすきな浮れ女が、せつかくの金髮の匂ひを、三鞭酒を金髮にふりかけて得々としてゐたのを親しくみた。できれば三鞭酒の水浴がしたいといふ。この浮れ女は三鞭酒をのむにさきだつて、きつと三鞭酒盃の薄黃い金色の液體を帽子のなかへ撒き散らした。けれど、金髮の房々した匂ひ。それこそ三鞭酒の匂ひにまさる愛情を唆る髮の香であることを忘れた女だ。

アラビヤ人は情熱的な香りとして薔薇を好愛した。金髪の匂ひはまさにアラビャン・ローズの匂ひだ。

それにしても丸髷、桃割、高島田、銀杏返し、洗髪等の香にも捨て難いものがある。すつきりと鮮かにぬけでた襟足からほのかに湧く髪油や脂の匂ひ。巻につゝまれた匂ひ。兩の鬢から流れる匂ひ。髷の香。漆のやうに輝いた黒髪全體からの匂ひ。その黒髪の洗錬された技巧の異態に浮ぶ香りと匂ひは、ひとつの藝術品である。黒髪の匂ひこそ眞夏にひややかに眞冬にほのかに熱い感じを與へる　まさに薫榮の香の瓦斯狀だ。黒髪の匂ひは、これみよがしの立膝に、亂れた裾の間から、心憎い脛の白さが腰の緋縮緬さへ透いてみえるうす暗い枕許におくに限る。洗髪のすがすがしさは涼み臺に限る。

女の肩に手かけても、白粉と髪油の匂ひは感覺鋭く男に傳はる。女が男にもたれ凭つてもすぐと男の體臭と髪の匂ひは女に傳はる。

黒髪の匂ひに嫉妬の感情をぎりぎりと音たてて激動させるのが黒髪もつ女のこれからの匂ひの藝術だ。

女は匂ひの動物

女は香りや匂ひに對して窮極では男よりも鈍感。それでゐて香りと、匂ひの好愛性が強い。愛憎が烈しい。

もつとも、優男にしても男に香水氣のあるのは、ともすると氣障になる。何が氣障といつても、醜男が派手な色模様の絹ハンケチへ麁すぼい香水を匂はすことだ。男はまづ眞麻の純白なハンケチに輕く忍ぶ匂ひの香水。それぞれ選みできめたがよい。ジャスミンとかレモンとかの稀薄な匂ひ。女はこれに反する。女は一に香り。女は一に匂ひ。

グロテスクな髪化粧

古代エジプトの女は、香樹の樹脂を地に穴掘つて、その穴に一面燻きこめた上に浴後の裸體をしばらく横臥させた。裸體の腰に羅布ひとつ、燻香の烟りに燻ぶられながら香が體にしみてくるのを待つた。燻香のあとでは、香脂を奴隷が女の全身にすりこませた。このすりこむ役目は奴隷に與へられた愉樂だつた。

クレオパトラは、その美貌と艶笑術との外に、男を魅惑する香料をつかつた。クラブ洗粉と鶯の糞と糠と、精々ボンピャンの粉白粉の程度ぢや二千年前の古代エジプトの女の化粧に劣る。浴みの後に全身にぬる香料は歐羅巴あたりにはざらにあるが、わが國產に果していいものがあらうか。浴上りのあとの白粉の匂ひ。こや奴まつたく凡の凡。香石鹼の香ひ。こや奴まるでなつてゐない。

アラビヤの女達は、芳香ある樹脂を燃したその熱灰で身體を洗つた。その熱灰に衣裳をかざしてあたためた。揮發性の芳香のもつ化學的利用法である。

英吉利のエドワード六世の皇后は、入浴には薔薇香水。浴み後のマッサージにも薔薇香水と薔薇香脂。部屋も薔薇の燻香。ねてもさめても、薔薇の香と薔薇の匂ひ。もつとも英吉利ぢや薔薇はナショナル・フラワーだ。

「……手ごろの湯沸しに、輝いた眞紅の薔薇香油をティー・スプンに六杯。ティー・スプン六杯の薔薇水。こまかな綺麗な粉末砂糖六ペンス。ほのかに燃えるとろ火にかければ、閨房はそれのたぎるにつれて、あたかも薔薇の花の香そのものが、部屋に芳香として漂ふ」といふのがこの薔薇香狂の皇后のゆきかただつた。もつとも、わが國でも香をたいた。さうして利香といつた。

好色女王エリザベスは喫煙の先驅者サー・ウォルタ・ラーレーをひどく寵愛したくらいだから、煙草の匂ひも好んだ。が、この女王はたとてつけもない香りを好み匂ひを好み色も好んだ。

女王のお氣に入りの香水の處方といふのは、當時の倫敦の上流社交婦人界

の虎の卷であつた。

「……麝香ハグレイン、ローズ水をティー・スプンに八杯。ダマスク水をやはり三杯。砂糖四分の一オンス。約五時間の煮沸してそれを濾した香水」。

さだめし、ラーレーはこのエロ的香水の匂ひをエリザベスの柔い滑な肌から發散する女の匂ひとして、煙草の脂に麻痺した嗅覺神經にも官能的に感じたであらう。

蕪村の嗅ひだ女臭

われらの俳人のうちでも、蕪村といふ男はあでやかなものや、なまめかしきものに對する嗅覺美を俳句そのもののなかにするどく現した。かなりにエロ的な表現だとも感じられる。理解も深かつた。

蕪村が香りや匂ひ、——とくに女の匂ひを核心にをいて——俳句に扱つたものでは次のやうな三つの句がある。

掛香や唖の娘のひとゝなり

これは口のきけないかたわ娘にも年頃になると、やはり帶の間に匂ひぶくろがはさまつてゐるといふことを叙した。可憐な、しかも、女の匂ひ、不具者でも、の感がある。そこに、春を知る年頃の娘の香りを特殊な分野に於てあらはしたものだらうと思ふ。

掛香やわすれ貌なる袖疊

これは前の唖娘の句に較べて、いかにも女の匂ひの生活的な描寫だ。袖疊といふのは、着物をたゝむとき只袖と袖を重ねて略式に疊んで置くあのことをいつたのでなからうか。そして、掛香も無雜作にそれにつけたまゝ忘れられてゐるのである。情欲の生活に忙しい女性の匂ひだ。

掛香やすれ違ひたる宵の闇

これにいたるともはや匂ひのエロのエロたる極致であらう。宵闇にふとすれちがつた麗人からの發散瓦斯。それが、香り。それが、ほのかに匂ふ。ほのかに傳はつてきた。現代味としては、あまりに、ゆかしすぎるの嗅覺美であつた。この頃ぢや、靴下の臭氣がすれ違つてもわかる不精な洋裝の女がゐるだらう。

掛香についてはまづ蕪村の以上の三句があるだけで、他の俳人にあまり見當らぬところをみるも、蕪村は嗅覺官能が發達してゐたといはうかなまめかしかつたといはうか、或はエロ感覺が卓越してゐたといはうかとにかくえらい。

彼蕪村がたゞに嗅覺エロ藝術の表現に於てすぐれてゐるばかりか、今日問題の脚線美卽ち足のエロチシズムを詠んだところの一句は、まさに現代人の心臟を刺す。

栗島へはだし參りや春の雨

これは、おそらく千古の絶唱であらう。この栗島といふのは紀伊の國加太の浦にある淡島神社である。淡島神社は女神を祭つてゐる。

この女神も、こしけか何かあつたとみえて、妙に××の病によくきく。それで、女の參詣者が絶えない。今、このはだし參りも恐らく××の病を治してほしくてきたのか。子寶がほしいのか。熱心なるはだし參りである。熱心さは、女のもつとも××××の白い足のうらが、春の雨にぬれてゐる。久米の仙人ならずとも或は蕪村ならずとも正に垂涎三尺である。

膝頭がみえて白い腿が覗いてゐる短いスカーツ。薄い絹の肌着であるスリップ・インから乘合自動車にのる時にちらつく白い××でも、素脚と白い足のうらと春雨には比較にならぬ。昔にでも、それ相應のエロがあつたんだ。

蝙蝠やむかひの女房こちをみる

これも蕉村の句である。宵闇に掛香をかける女とすれちがつたのもなまめかしかつたが、今また蝙蝠のとびかふ宵闇にちらつとむかひ側の家の女房がこちらをみた。宵闇エロといはうか。芭蕉といふ俳人も蕉村の轍をふんで一寸宵闇のエロチシズムをやつてみた。

後家の君たそがれ顔の團扇哉

これは俳聖芭蕉のだ。しかし、どうもよだれのでるほどの效果をあげることができなかつた。

子規といふ俳人も一寸そのエロをだしてみやうと努力してみた。

夕顔に女湯浴(ゆあ)すあからさま

湯上りや乳房ふかるゝ端涼み

そして一寸なまめかしくみせることができた。しかし明治のエロは遂に天明のエロにかなはなかつた。昭和のエロもエロを求める心ばかりつよくてそれを表現するのに貧しいのではないだらうか。それだのに、

渡し呼ぶ草のあなたの扇かな

と、ちらつと見せた扇さへ蕉村のものはとかく女の扇に解釋したいほどなまめかしい。

女の匂を詠んだ俳句にまたこんなのがある。芭蕉が伊勢に參宮してかへり道で、或る茶屋に立寄つたことがあつた。その時「お蝶」といふ女が

「ねえ先生、わたしの名前を發句に詠んで頂戴」といつたので芭蕉は、その女のもつてきた絹地に次のやうにかいてやつた。

蘭の香や蝶のつはさに薫(たきもの)す

この句は直接にお蝶さんの匂ひをいつてはゐない。しかしひらひらとして美しい蝶はとりもなほさずお蝶さんの姿である。その蝶の美しいつばさが、蘭

の幽香に薫(くん)じられて香つてゐる。さういふ高貴な優雅な世界を詠んで、間接にお蝶さんをほめてやつた芭蕉は粹人である。エロ氣さへあつたら、これまでにお蝶さんを喜ばせたあとで、きつと何とか成つたことであらう。しかし、芭蕉はそのあとのことは「甲子紀行」のなかではかいてゐない。

體重三倍强の化粧品

中世から近世へかけて、歐羅巴の諸皇室では、その皇室獨特の香料とか香水と匂ひ袋をつかつてゐた。それが宮廷の誇りでもあり虛榮でもあつたらしい。一般の人々は、香水などは贅澤ものでそんなにはつかへなかつた。

むしろ、古代希臘とか羅馬時代の女が香や匂ひに對しては使用的にも自由であつた。中世から現代へかけては、女の化粧のごときはとくに上流階級に限られてゐたのだ。

現代人のうちでは、まづアメリカの女が化粧では、下手であり乍ら化粧品を山ほどつかふ。大西洋をわたる巨船で、知り合ひになつたヤンキイ・ガール、一寸大型のスーツ・ケースに充滿したのが毎朝毎夕の消費する日常の化粧品。

ある有名な美容術の大家の計算だと傳へられるが、アメリカでは一ケ年間の化粧品總量十五萬八千〇十二噸で、ヤンキイ・ガール一人割當(ひさりわりあて)一ケ年に八ポンド。

花の蕾、十六ぐらいから始めて六十歳迄——アメリカでは婆さんが仲々にこつてりと粉飾するから——とすると、消費される化粧品の量はヤンキイ・ガールの體重の約三倍强の重量だといふことだ。

この化粧好きなヤンキイガールに劣らないのが、男のくせに例のナポレオン大帝だ。彼は大の化粧好きだつた。洒落(しやれ)ものだつた。

臭鼻症のジョセフィン

ナポレオンは伽羅の香を好んだ。

そればかりか大の獨逸嫌ひでありながら、ケルン水——獨逸ケルンの香水で酒精と香油とを混ぜたもので、俗にコローン水（Eaue de Cologne.）を浴びるほどにつかつた。

ナポレオンの時代には、東方の名香は異國情調を唆るものとしてかなり珍重され、伽羅は一オンスが七十二フランもした。今日からみれば約百倍の高値で、一フランは當時と今日とでは三四十倍からの貨幣價値のひらきがあつたといふ。その高價な伽羅を惜しげもなくつかつたのが香狂ナポレオン。遠にナポレオンらしい。

ナポレオンは洗面にはきつと伽羅の香水。獨逸嫌ひのナポレオンでも、獨逸產のケルン香水を頸から肩へと浴後ふりかけた。入浴に際してはお氣入りの侍從チャーディン——もともと巴里の香料御用商人だつたのが、鼻がきくからと皇帝に寵愛されてついに側近くで皇帝御用の香りと匂ひの御用をたした侍從——といふのが選んだ香石鹼をのみつかつたと。

いつの頃か判然としないが、ナポレオンは三月二十日から四月三十日迄の十日間に、

ケルン香水四函	二四フラン
オレンヂ花石鹼二塊	六フラン
特製白スポンヂ三箇	三〇フラン
マホガニー製毛髮ブラシュ二ケ	一八フラン
マホガニー製リューマチス・ブラシュ二ケ	二一フラン

といふ勘定書が發見されてゐる。

ナポレオンは香狂であり流行氣狂であつた。宮廷の男女すべてに革命前の路易十四世時代の衣裳をつけさせた。衣裳の材料まで自らが選んだ。侍從宮女までも、寵愛をうけてゐた嬖妾とともに、朝夕の衣裳は全部着換へさせた。それに從はぬものは怒りさへうけた。

この香水狂のナポレオンの皇后だけにジョセフィンは、これ亦大の香狂であつた。

彼女は夫よりももつと强烈な香を愛した。彼女の體臭に適應した匂ひとしては、麝香が異國情調を唆るものとして擧げられてゐる。衣裳からもち物、衣裳部屋から臥褥室、浴室、謁見所まで、麝香の匂ひでぷんぷんとさせるのがジョセフィンの嗅覺癖であつた。伽羅の香を好む夫ナポレオンとは、香匂の上でいつも感情の衝突ならぬ鼻の衝突があつたと。

だが、ジョセフィンは嗅覺神經のまつたく鈍弱な臭鼻症で、いつも麝香の匂ひのするハンカチを、絶えず鼻さきにあてがつてゐたのだ。

嗅覺官能の鋭い夫ナポレオンと臭鼻症のジョセフィン。情愛がながつゞきする譯がない。何故なら、嗅覺官能がまつたく遠つてゐる男女は、とかくに××××が思はしくないといはれるから。

香水で國王を蕩した姫

一種獨特の——その時代の流行のありふれた香水や香料を振り向かずに、自分自身の體つきに、自分自身の容貌に、自分自身の體臭や趣味に、ぴつたりとあつた——香料や香水を、苦心慘憺して工夫した姫御前がある。

その獨特な香で國王の情愛を唆つてしまつたといふのだから、現代の女も

ありふれたバィオレットやローズの香水でごまかしてゐては、場末の×××に劣る嗅覺エロ技巧だといはねばならぬ。

英吉利のジョーヂ四世は龍顔麗しく美女美男が胡蝶のやうに踊り舞ひ狂ふ宮廷の大舞踊會で、麗人エステルハズィ姫とステップをふんでゐた。ともすると、舞踊上手のジョーヂ四世のステップは狂ひ勝ちだつた。國王は踊りながら忱惚としてくる。國王はエステルハズィ姫のらうたけき姿が、女神のやうに幻となつて瞳に灼きついてきた。

姫はジョーヂ四世の多情多感につけこんだエロ技巧を施してゐた。それは國王の常用香水の匂ひを、消してしまふだけの强烈な匂ひの精油を原料にした香水を舞踊衣裳にふりかけ、馥郁たる匂ひの體臭をだし乍ら、宮廷の舞踊會にでた。多情な國王は忽ちにして姫の嗅美エロにかゝつてしまつたのだ。

香水で男を蕩(たら)しこむのは、果して犯罪であらうか。催春香水、强精香油、ふらふら匂ひ袋、この頃の日本でも工夫されてもよからう。トルストイの「戰爭と平和」のピエル伯が、ヘレネ姫と舞踏(ダンス)をし乍ら、姫の體臭とそのつけてゐた香りのために誘惑されて婚約を申込むのもこの類だ。

歐羅巴の威嚴も德もない國王や皇后が、十八世紀時代には皇室の威嚴や神聖を保つためにさかんに「皇室香水」を使ふことが流行した。ヨーク大公などは、醜惡な容貌をいゝ匂ひでもつて人を釣つて眩惑させることに痛く苦心した。匂ひでカムフラジューするので有名であつた。路易十一世の姫はひどく口中が惡臭であつたが、香錠を死ぬまで愛用した。路易十三世は禿げを假髮でかくした。この皇室の香水や假髮は當時の貴族社會の流行の淵叢となつたんだから馬鹿々々しい。そこへゆくと、十八世紀時代のロシア皇室では、まだ香水はつかはれてゐなかつた。すべてが、餘程、おくれてゐたものらしい。

ビクトリヤ女王の生母ケント公爵夫人は、その當時の勢力ある政治家と面

謁するときには、その政治家の好む香水を詳細に調べておいて、部屋にふりちらしておいてから謁するの用意があつた。パルマーストン卿、ジョン・ラッセル卿、キャンニング等の政客がこの手でもつて、ケント公爵夫人やビクトリヤ女王にまいらされてゐたらしい。

骨董品だの賄賂だの女などで政治屋を釣るよりも、香と匂ひで政客をあやつるなんて、思つただけでも揷話(エピソード)としていゝ匂ひだ。

ビクトリヤ女王は、いたく「花束(ブケー)香水」を愛用した。アレキサンドラ女王は、白薔薇(ホワイト・ローズ)の香水を愛用した。この白薔薇の香水は、歐羅巴の各皇室では、どこでも愛用されてゐたらしい。

鳩の血にヴァジナル・ポマード

既に男を知る女が、處女らしく裝つて結婚することは勿論よくない。が、しかし、處女として結婚しなければ一生の不運でもある。そこに詐術がある。

處女として嫁いでゆくためには、佛蘭西あたりでは、小魚の肝ぶくろに鳩の血を×××××××して、——もつとも、そのためには約二ヶ月も結婚前に朝夕缺かさず明礬水の薄い溶液で××を一分間ぐらい××××するんだ……。

さうして、×××××××××、とくに結婚式を擧げるのだ。その明礬水で××××××××××、きつと薔薇水が××××××でつかはれる。

この明礬水と薔薇水、これは××××の收斂劑であり、しかして、もつとも處女らしい××××××××××××。その處方は、

Eau de plantain (plantain water)	150 grs.
Tannin	5 grs.
Teinture aromatique	25 grs.

これを洗滌につかつて、しかして、後に

Cold cream	50 grs
Tannin	2 grs
Eau de roses(rose water)	15 grs

この後者を、とくに、ヴァジナル・ポマードといふ。いはく處女香。

これは、××を純白に且つ×××××××。なんと、薔薇水が詐り欺く女にとつて尊きことよ、といひたくなる。

ハンケチの金盞花

ハンケチとステッキ。ビューティ・スポツ。それと香水。

これらは、十八世紀後半の倫敦社交界の最新流行であつた。ハンケチは、路易十四世時代は、現今のやうな四角なものでなく、とくに長方形のを好んだ。それが巴里から倫敦へと流行つた。

香水の勢力は斷然とハンケチやビューティ・スポツを凌駕した。ハンケチに金盞花をつゝんだ。その匂ひは、變態性慾患者をして、×××××。だから、金盞花の匂ひに似た××のを、ハンケチに女の××の臭氣をうけて悅に入つてゐた。これこそ芳香の誘惑でなくして、變態性の香の魅力である。

そんな變態流行だから、當時英吉利議會には香水取締令案が提出された。

この法案は「……婦人がみんな階級を超越して、職業教養の如何程度を問はずに、また處女にせよ、下婢にせよ、未亡人にせよ、女の全部が誰でも彼でも、芳香脂粉で、化粧に腐心するのは妖術であり輕罪として罰すべきだ」と。男の獨身者は大に女を釣るべく香水に惜しげもなく浪費した時代だつた。

その頃の倫敦は、教會でも、喫茶店でも、劇場でも、香、匂、芳香、しかて變態的臭氣で充滿してゐた。

だが、ストランドのチャーレス・リリーといふ香料商は「香水は斷然頭腦を新鮮にする。沈滯した感情精神を昂奮せしむる靈劑」として、催×ポマードあたりを發賣してゐた。女と匂ひ。いつの時代でもエロ的だつた。

ビューティ・スポットは人工黥子(ほくろ)である。

黥子(ほくろ)で、顏の寂しさを彩る技巧が、路易十五世の嬖妾マダーム・ポンパードルの顏をどのくらい艶美にしたかは、ゴンクール兄弟のかいたマダーム・ポンパードル夫人傳にもでてゐる。

最初は巴里、卽ち歐羅巴新流行界の淵源路易王朝の宮廷から流行した。この人工黥子(ほくろ)も工夫されて諸國の宮廷や社交界に流行した。

佛蘭西では、これをグレン・ド・ボーテといつた。堀口九萬一さんの「東ほくろ考」によると「美の豆粒」といはれてゐる。倫敦では、これをビューテ西イ・スポッといはずにパッチといつた。三つ以上つけるの定石だが、七十の皺くちや婆さんが二三十もつけたといふ。脚線美時代すぎて、背肌美時代になりつゝある現代で、夜會服のやうに背を露出する時には、白い背に赤い「美の豆粒」。素脚——練馬大根の眞白いのに、どうだ「美の豆粒」ときたら。

畫の香り·宵の匂ひ

丸木砂土君の好著『好色獨逸女』の「春の花」は好色的に花の說明が面白くされてゐる。

それは女と花との關係である。ところが、花から發する香氣は、必ずしも、丸木君の說くがごとくに、好色植物學者の觀察によるやうな工合に花の好色的意味が限られてゐないんだ。

花にたかつてくる蟲の生殖力がもつとも昂上してゐる時には、花の香氣が正比例して增大する。

つくばね朝顏の如きは、白晝はごく僅少の香氣しかもつてゐない。それが、夕刻からは、まつたく强烈そのものゝ香氣をあたりに發散し始める。

それには、つくばね朝顏の花にいちばんよつてくる昆蟲である或る種屬の蛾が、夕方からでなくては生殖力の旺盛を感覺しないからである。その昆蟲の生殖力に正比例する花の香氣は、やはり、男と女との×××に×××が正比例してゐるのではあるまいか。

黑天竺あふひは晝の間は、殆んど、匂ひを發散しない。夕闇迫るころから、ヒヤシンスのごとき花香、それに對して夜蛾が群る。夜蛾は、夜でなければ生殖行爲を決してしない。

晝。蜂をよぶ花は白晝の香をもつ。夜は暗香すら發散しない。

夜稼ぐ××や××に、果して夜だけ發散する香匂があらうか。

とにかく、白晝の匂ひと宵の匂とを、技巧的にでも考へてみて、つかふ香水香料を全然區別するのも、香匂本來の原則かも知れない。

鞣革の匂ひ手袋

女の手を握つたその瞬間。握つた手が、ほのかにあたゝかみの感じ。決して魅惑的ではない。もの足らない。

かりそめの女でも、握らせる手は冷いのがいゝのだ。据も霧はの××にあたゝかみ。握らせる手に冷たさ。この直感を男に與へることに氣遣ひを、すくなくも、現代の女は苦心しなければいけない。男は、それを悅樂するふかさをもたねばならぬのだ。

逝くなつた女形役者の菊次郎(？)だつたかが、六代目の相手で、舞臺での濡れ場で手を握られる場面がある時には、樂屋や揚げ幕のそとでも氷の上に掌をおいたと。流れるがごとき白魚の指先に、限りない冷さをもたすべく、西歐の女が、薄い皮の冷さをもつ手袋をいつも心がけてゐる。

ほとほととあたゝかみ燃えてゐるのは、下女の手であつてほしい。手の冷たい女。そこに、握手の纏綿たる情愛技巧が動いてゐるのだ。

つめたい手。ひえた掌。それがかへつて心のあたゝかみを傳へてゐる。

もし、そのつめたい手に、女が心して匂ひをふくめてゐたら。手を握つた男の心の動きはどんなであらうか。手に匂する。つめたい匂ひがする。女が手に匂ひをつけるためには、昔から佛蘭西では女が苦心することであつた。

佛蘭西の鞣革の手袋に「匂ひの革手袋」といふのがあつた。十七世紀前半期頃からは「匂ひの鞣革手袋」はギルドによつて、その製造法が秘密にされて、秘訣は洩されなかつた。親方は年期弟子に相傳した。ギルドの親方達は、金主側の卸屋から束縛されて、一年にいくらと嚴重に定められたゞけしか製造することは許されてゐなかつた。從つて、高價で贅澤物で、ごく上流のしかも意氣好みの女が好んでつかつてゐた。

鞣革の「匂ひの手袋」は、その鞣革にしみこませる香料がむづかしい。鞣革の「匂ひの手袋」のギルドの職人以外で、いくら模造しても、どうしても匂ひがながらく手袋の革に保たれてゐなかつた。

香料商人は、手袋商人と結托して、香料の調合を門外不出として秘密にした。「匂ひの手袋」は、かくして秘密の手袋ともいはれてゐた。

だが、手袋にしみこませる匂ひは、決して珍奇な香料ではなかつた。龍涎香、麝香、麝猫香のほかにイタリヤン・アルプス境やスペイン境のピレネの山中から巴里へもちこまれてゐた。匂ひの鞣革手袋は、これらの香料を脂肪成分

と混合した液體のなかに浸しておいた。巴旦杏の油や白百合の根の粉末の混合油で香の發散を防いだ。そこにギルトの手袋製造職人の技術が存してゐた。

鞣革の匂ひの手袋は、巴里から倫敦へと流行した。

その頃オールド・ロンドンはなんでもかでも佛蘭西ものが大流行であつた。とくに淫蕩文化の藝術であつたロココ摸風が傳はつてゐた。この匂ひの手袋もロンドン女の上流社會では伸々の高價で購はれた。好色女王エリザベスは、この珍奇なものをみのがしはしなかつた。佛蘭西ものならそれが自分にぴつたりくるかどうかは考へない。夢中で佛蘭西ものを有難がつてゐた。滑稽きはまるフォンタンジュ帽が顔付などを考へずに誰も彼も競つてかぶつた。エリザベスは、ことに佛蘭西流行を追つてゐた。

エリザベスといへば、容色麗高、才美兼ねた女王だ。性愛技巧にかけてもかなりに高級的であつた。ウォルター・ラレーをして千古未曾有の不思議な藝當であつた喫煙術を宮廷の美女や貴婦人社會に流行させたのもエリザベスのお聲がかりからであつた。ラーレーの紫煙をくゆらし姿に、素的な艶笑術を發見したエリザベスであつた。

その好色女王エリザベスとラーレーの閨房の秘樂は、ラーレーをして、竟に倫敦塔の人たらしめたのだ。

エリザベスは、愛用の匂ひの手袋をはめた姿を畫に描せて、「匂ひ」まで描きこめと仰せられたと。

のこんの香

匂ひに對しては、エリザベスは非常に好き嫌ひがあつた。

女王は謁見室の匂ひとか臥褥室の匂とかを一々區別した。どの部屋にはあ

の香。あの廣間には、あの匂ひ、とちやんときめてゐた。衣裳は、全部西洋杉に紫檀の衣裳函に納めた。それぞれの馥郁たる匂ひをひそめてゐた。

エリザベス女王朝の貴婦人のなかには香料狂ができた。强烈な香料を惜しげもなくつかつて、ぷんぷんさせてゐたんだから餘りに意氣なもんではなかつた。當時の記錄にも「女が、その麗しい體を臥せた臥褥、座席、肌に觸れた衣裳ともちもの。それは、一週間も、一ケ月も、それ以上も、のこんの香ゆかし」と、かかゝれてゐる位であつた。

腋臭の誘惑

いくらいゝ匂ひだと、ひとりぎめでも、他人にはよくないのがある。

ことに、匂ひの趣味といふか嗜好といふか、香りに對しての好惡は、かなりに人によつて違ふ。香り匂ひの取捨に對しては、まづ主觀的でなければいけない。官能的なものだけに、香り匂ひに對しての人間の嗜好は、一理一樣にはきめ難い。

男の好む香りは概して女そのものがあまりに好ないといへる。

男のつかふ香水や香料、女のつかふ香りと匂ひ、それは相當の間隙がある。その原因は、個人的嗜好がその體臭によつて左右されてゐるのだ。歐米の女の腋臭が、日本人にとつては鼻もちならぬ異臭であることは、到底日本の女のそれの比ぢやない。とくに、夏の薄い上衣で、ぷんぷんさせられるのは馴れぬものには、混雜した電車地下鐵では、耐へられなく鼻を襲ふ。しかし、それもほんの束の間だ。

腋臭につかふ香水。腋の下の毛髮をなくす藥の匂ひ——日本でもハイカラな藥屋にはある——と、腋臭そのもの臭氣の三つが混じて、腋臭はかへつ

て男に對して露出症的な挑發的な魅惑をつくる。腋臭だとて悲觀することはない。それに、香りと匂ひで、男をひきつける技巧を加へれば、かへつて××的技となつてくるのだ。それには、佛蘭西の香水ゼラミーにも、ウビガンにも、コテイにも、ゲランにも、それぞれ腋臭を消すのがある。

腋臭と香水、その上にほんのりと腋下の縮れ毛などを袖口や腋の下の八つ口から男にわざと××××る技巧は、ひそかに謀んでも××××。短いスカーツに、裾のうす汚れたズロースをのぞかせてなんてゐるのよりも、もつと效果的だと知つてほしい。尤も、このエロ技巧は眞夏のことだ。男からいへば、腋臭のエロ、腋の下の縮れ毛を、電車のなかで×××××まさに性の竊視的享樂だ。夏の羅衣にかすかにかくされてゐるひきしまつた××微動と腋臭と匂ひ。眼と鼻とへの蠱惑的交響樂だ。

洋裝の流行が、はげしくなればなるほどに、腋臭は大概つきものになる。斷髪で、シークで、モダン語のひとつも口にするなら、進んで腋臭をやつてほしい。けれど、手入れもせぬ病的な臭氣ぢや困る。

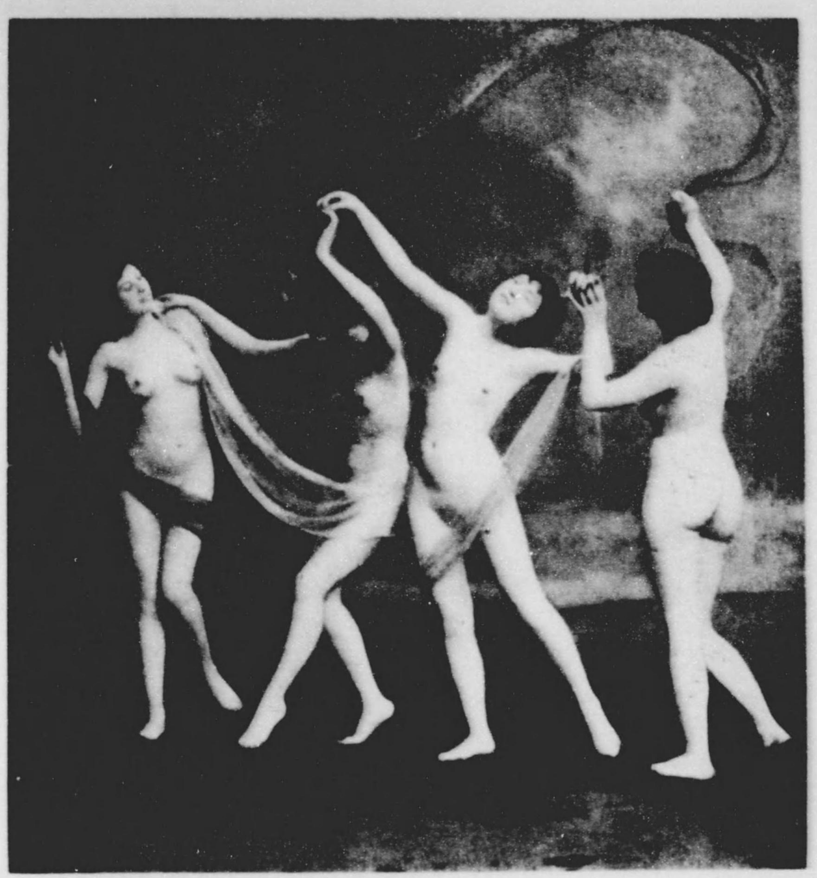
青春の匂ひ

子供は匂ひに對してはいふまでもなく單純だ。勿論、官能が發達してないからともいへる。子供が匂ひに對して單純なのは、官能が發達してゐないばかりか、性慾が發達してゐないからだ。子供が、香りや匂ひに對しての好惡は、ほんの嗅覺機能の好惡によるのみだ。

香りと匂ひは、性慾の發達につれて相對的にその好惡がきまつてくる。

「いゝ匂ひだ」

と單純にきめてゐたのが、青春期にはいると俄然として異つてくる。本能



青春の匂ひ

的にいゝ匂ひといつたものが、性慾觀とともに發揮されてくる。

青春期は性の目覺めてくる蕾のふくらみである。艶な匂ひに憧憬し始める。××器官の發育の完全なものほどその發育につれて異性の臭氣や異性のもつ匂ひに對してひどく鋭敏になつてくる。××器官の××××をして、その匂ひ——むしろ臭氣××××××だが——××する。××××の後に、青春期のわかい男女が××××××××××することを、誘惑されるとなしに、いつのまにか、みずから試みるのである。誰でも經驗してゐることだ。

匂ひの表面は嗅覺官能の刺戟である。匂ひの裏面は、×××××××であるといはれてゐるのは、まさに眞理である。

古代ギリシヤの物理學者ヒポクラテスやクリトンは、匂ひを藥用的に分類して燻燒消毒と防腐劑香料とを二十年前にすでに說明してゐる。これによつても、匂ひ香りは現代文明の生んだものではない。安息香、蘇合香、反魂香は、主として一種の性慾的嗅覺の刺戟を沈靜させるものだ。そこで、匂ひは性の昂奮に對しては刺戟でもあり沈靜でもある。

考へのない話だといへば、坊間で販賣されてゐる强精劑だとか强力劑だとかの精力增進劑に、何故にもつと×××××××を刺戟する香料を、混用してゐないのだ。

××××の發育がいよいよ停止まつてくれば、强烈な香や匂ひの刺戟からはのがれたがる。それにしても、强精劑の匂ひは、ひどく刺戟性をもつてゐればゐる程いゝ。歐米の催×劑とか慾×藥の大部分には××××××××××××××。

結局は、×××××××が、臭氣だとしても、青春の匂ひはむしろ催×藥などにふくませて××××の匂ひと××××とを聯想させねばならぬ。

古代バビロニヤでは、大酒宴の祕戯として裸體の年增女がやはり裸體の處

女を抱擁して處女を××××××××××××××、その處女の××××××××や、××××××を盃にうけて賓客にのませた。

青春の匂ひを年増女が××××××××××××××した祕戯であつた。古代バビロニヤでは、これが——××××××が——いひ換れば青春の匂ひを嗅ぐのだ。一種の若返り法であつた。

素人は淡白で玄人は濃厚

境遇がその人をして匂ひの嗜好を左右する。奥様だとか令嬢が、あまりに濃厚な匂ひを好むことは避けてほしい。

しかし、素人は比較的に自分本位で好愛の香水とか匂ひを定めてかゝる。相手卽ち第三者とか對象の異性が、どんな匂ひにひきつけられてくるかを念としない。もつとも、工夫しないことに素人の素人らしさがあらうだが、玄人になると對象の異性をして魅惑させることを、歐羅巴あたりの女優とか×××は一意心がけてゐる。佛蘭西の玄人はまづ性的刺戟の匂ひを香水に求めてゐる。

とくに、月經の××××××の臭氣を、佛蘭西のフェムウズ製のパウダー。ショメルなどで、××を洗滌して、そのあとに芳香を爽やかにのこしてゐる。それには、フランスのビデェはもつてこいの好設備だ。日本の便所ぢや一寸困るだらう。そこを工夫するのが、これからの女のエロスへの精進だ。

好みの香水

匂ひと香り。これは、化粧水、化粧品、化粧劑、香水香料に、いかんなくふくまれてゐる。匂ひ香りの原料を植物に動物に化學製品に求めたらおそらく

無限であらう。

匂ひと香りの人間の本能的な欲求は古代から現代へ無限に絶えない。なかにも、香水は化粧水ぢやないが、美容技巧に艶美術に缺くべからざるものになつてゐる。慘忍性性慾異常症の反對である變態性慾症である被虐性性慾異症のこのマゾヒスムスの語源だといたれるマゾッホは、彼の處女作『密使』のなかで、マゾヒストが伯爵夫人の化粧室で香水の匂ひに誘惑されて、倒錯色情の快樂に陷る發端をかいてゐる。匂ひの誘惑、香への惑溺、嗅覺官能の異常な快感は、變態性慾症患者ばかりの世界ではない。おそらく、人間として嗅覺機能をもつもののすべてのものが許されてゐることだ。

匂ひ香りばかりでなく臭氣に對してさへも愛惜をもつ。生々しい印刷インクの臭ひや蠟燭の燃える臭ひを好くものもある。梔子の花のほのかにあがる甘い香。山百合の鼻腔粘膜までを刺戟する甘強い匂ひ。三鞭酒の泡からのいひ難い匂ひ。どれをとつても、香匂に對する單純な感覺だが、それを享樂するのは、それらに性的刺戟があるからだ。

夏目さんの『それから』に主人公代助が、よく花の香を嗅ぎながら假寢をしたことを描かれてゐる。「…蓆の座敷へ上がる時候になつた。代助は大きな鉢へ水を張つて、其中に眞白な鈴蘭を莖ごと漬けた。簇がる細かい花が、濃い模樣の緣を隱した。鉢を動かすと、花が零れる。代助はそれを大きな字引の上に載せた。さうして、其傍に枕を置いて仰向けに倒れた。黑い頭が丁度鉢の蔭になつて、花から出る香が、好い具合に鼻に通つた。代助は其香を嗅ぎながら假寢をした。」……鈴蘭の花の香を嗅ぎながら假寢する代助は、花の香からそれとなく性的刺戟をうけたのだと思ふ。その癖、代助は、三千代がもつてきた百合の花の香が、甘たるく強い香氣を、三千代と對座しながら重苦しい鼻への刺激だと思ひつゝも、三千代への羞恥みがあつた。

マゾッホと代助との場合では、香水の匂ひと、花の匂ひとのひらきがあつた。變態性慾症とインポテンスらしいひらきもあつた。匂ひが性的刺戟であつた現代人は、伯爵夫人や三千代の體臭を嗅ぐまでになつてゐる。いくら、××の抱擁があつても、その抱擁になんの匂ひもなかつたらなんとしやう。

冷たい鐵の牢獄の囚人でも、獨房の石壁の小窓からくる沈丁香の馥郁たる花の香には、獨房の獨り寢に耐へ難い性の衝動を覺えて、ほかの獨房を移してくれと哀願したといふ。

女の褥の匂ひ、櫛、ハンケチにのこる匂ひは、變態性の男でもなくとも、耐へ難い淡い執着がのぼつてくる。ボードレールがそれをよく描いた。

さて、この香りと匂ひを、香水に求めるとすれば、女はどれを選ぶか。男はどれを悅ぶか。これは難しいことだ。

フランスもののコティ、ウビガン、ビノー、ロヂヤガレー、レグラン、グヴリー、ドヘセーだとかセラミーなどは、誰も知つてゐる。それぞれ萬能香水といふやうなものがある。セラミーのでは、萬人好みの香り五種としてカッピー、オフランド、フォースタ、フロラール、ショリスワーが廣告されたりしてゐる。いづれにしても、佛蘭西ものが香水ではいゝことは異論がない。

高價らうよからう、廉からうわるからう。この原則は香水にはあてはまらない。いくら高價でも、その人の趣味とか、衣裳好みとか、體臭とかに適合しない香水なら、いくら高價でも駄目だ。

それよりも値段を超越した自己の趣味嗜好にぴつたりとくるものを選ぶがよい。でも、日本製や亞米利加製はよくない。英吉利ものならアトキンスン。獨逸ものでは471番などがある。赤は、俗に、赤面といはれたもの。

佛蘭西ものなら値段でゆくと、十圓臺でセラミー、ウビガンのケルク・フルウ、コティのレエマン。二十圓臺三十圓臺とイサベイのブルウ・デ・ジンな

と際限なしだ。

普通にはローズ、ヴァイオレットなどが香水ではたしかに萬人好みだ。萬人好みといふより萬人周知で、それに馴れてゐる。ヘリオトロープは漱石の「三四郎」で、平凡な三四郎が美彌子に極めてやつた奴だ。「香りの會」をつくつて僕を教育してくれた美容家の三須裕君は香水通だけに、現在販賣されてゐる香水の種類を隨分澤山擧げてゐる。ヂャスミン、レモン、ラベンダー、アカシヤ、イリスルート、ロスマリー、イランイラン、パチュリ、ベルガモット、ネロリ、ヂェラニューム、リリー、リラス、オポポナックス、チョプロース、マグノリヤ、クロモヂ、チョヂ、ナーシサス、バルモロース、サンタールの二十一種も三須君は數へてゐる。どれが、どんな風姿の女に、どんな男に、とくると到底定め難い。だが、香水の選擇を平凡な三四郎に任してはいけない。愛人の嗅覺美に訴へて購ふべきや無論。といふのは、聖オ。ガスチンが「懺悔錄」に…香匂を吐きつゝ魅惑し給へり」といつた。シルレルは腐つた林檎の嗅ひ——一種の香氣だ——を嗅ぎながら創作に耽けつた。ボードレールは麝香とハヴナ葉卷の匂ひとの混じたのを好んだ。ゾラやツルゲネーフは臭氣を好んで描いてゐる。香匂で、平凡な男を惑溺するのは、まつたく單純なエロの技巧だ。

女の選定する香水。それは一に女と相愛の男の嗅覺美によつて選べ。惚れた弱身で痘痕も笑窪の諺通りに、腐つた蜜柑の匂ひが、いゝといふのがゐないとも限らないから。

それにしても、香水は嗅いでみた時に、それがその原料たる香料の匂ひに似てゐればゐる程いゝんだ。

瓶をふつてみて、栓をとらずに嗅いでみて匂ひの良否をきめる。その香水の瓶の泡が、こまかくながく消えないのは濃い香水。栓があけられるなら、一滴手の甲にたらしてアルコホールを發散させて嗅ぐがよい。

睫毛を征伐する女

「下街にゆかない？」

ルイズが訊ねた。大柄な割りにひきしまつた顏を、扉をあけるとぬつとだした。

午下りも二時頃だつた。といふのに、まだ安價つぽい人絹の毒々しい花模様のピジャマの裾を縺げながら睡眠不足の瞳をどんよりとさせてゐた。

「ゆくよ、すぐかい」

「もちさ」

と物懶げだが、婉然と扉をがたつかせて去つた。

喫茶にでもゆくのに誘つたのだと思つた。早速に、讀みかけの小說を放りだした。あれこれと身仕度をしてしまふ。序に、投函する端書や雜誌の宛名を三四ばかり認いた。卷煙草に火をつけた。なから喫い了つた。ルイズはまだやつてこない。臥褥室へとゆく。ゐない。浴室でじやぶじやぶと浴みする音がしてゐた。

「なんだまだ湯か。はやく上れ」

と廊下越しに叱鳴つた。臥褥室のヒータに凭掛つてぼつねんと喫烟してゐる。やがて、タォールひとつに××を××して、ルイズは臥褥室の化粧臺に向つて腰をおろした。

「濟みません」

しなだれかゝるやうなウインクルをして首を傾げる。

卅歲に近い年增女が兩肌を露出しでまづ乳抑へを媚めかしくつける。腰には××××。ペチイコートなんて肌につけたことはない。薄い絹のスリップインだけを、肩から紐でかける。××へかけて、それこそスリップインすると××のところを、端切を臀の方から折り曲げて、ひとつボタンをかけるだけだ。鏡に覗き込んでゐる。一心不亂の態。

「まだかい。なんだ、これから睫毛のお手入れか」

「何いつてるのさ。睫毛のお手入れつて、あたしや睫毛の女王なんだからね」と喚呵だ。

鏡臺と睨めつこで、——もつとも片目だけで——片目は眼をむいて睫毛を變挺な棒切で摩擦してゐる。少々、出目で、いつも瞼の腫れあがつてゐるのを氣にするルイズが、睫毛の女王とくる。あんまり朗でない睫毛を、痛々しくも征伐してござる。

ルイズときたらまづ朝起きて——といつてもいつも正午近くだが——入浴後の一仕事は勿論お化粧だ。そのうちでも睫毛の征伐だ。

ある時は、蠟燭の細いので睫毛をちりちりとほどよく灼く。そのあとをなんとかいふ生睫劑を、鏡臺と睥睨しながら、指先小器用に睫毛のところ瞼の端へと摩擦すること十回位。ときには、睫毛の端が亂れたとて剪刄で剪む。そこを瓶の硼酸水重曹水の微溫湯とでびたびたと濕す。橄欖油、ローズゼラニュウム油、麝香草油、ベルガモット油とかの香油みたいのをなすりこむ。カンクリームとかで、瞼をマッサージ。しかして、變な刷毛で睫毛の逆立ち藝當を見事に了らせる。

「まだかい、隨分ながいぜ」

「この頃變ね。あつしの奇麗になるのをそんなに好かないんだね」

と唇を動しつゝ、指先は依然として睫毛から眉毛へと動く。脂肪過多なんだからとてデビネクリームとやらで鼻筋から額へと塗り揚げてなんとやらの鞣革で拭いてござる。眉毛の毛なみとその妖艶さのために硼酸水の微溫湯でお洗

瀧の上に、緑茶の煎汁を小さい壺にとつて、眉刷毛でいくどとなく摩擦するのだ。亞米利加では、日本からの輸入品緑茶が、眉毛美粧の艶美術につかはれてゐることを、東方の君子國靜岡あたりの茶摘み女は知るまい。

睫毛と眉毛と鼻と額の艶美術を、ついにみとれて待つ間に、シガレット二本と葉卷が、すでになかば白い灰となつてゐた。

「下街へゆかない」

と聲かけてからとうに二時間も經過してゐた。

ルイズは、寢込むくらいひどい月經の時でも化粧には念入だ。けれど、月經××用のコチックスをとり換へても、それを便所に捨てもしない。臥褥の下なぞに放りだしておく。

月經の××が×× された儘でお顏の化粧だ。こんなのをバロニースといふ。バロニースとは黄色よりも血みどり色の靴下。豚の腸詰そつくりの彩りで、月經の××がまさにコチックスにバロニースだ。ルイズは、顏こそ陽光にみせても恥しくはない艶美術に耽けつても、コチックスはまさにバロニース・ストッキング以上の血みどりだ。

脫脂綿の悲哀

月經の時に、亞米利加の女が、ドラッグ・ストーアから購つてくるコチックスは、ときどきエロスのナンセンスを描く。

亞米利加の都會でのアパート住ひでは、アパートの一室居に五つから六つもの小い部屋がある。厠も二つ位。

紐育市の、上街で、アパート住ひの愛蘭人の老夫婦が日本人歡迎といふので下宿した。老夫婦のほかに相宿には下街の電氣會社のオフィスとかで働

く、なかなかスマーッなフラッパー風の職業婦人ひとり。伊太利人系とかで、割りに漆黑な房々した斷髮だ。片靨が人目を惹く。テキサスのカレッヂ出身とか下宿の婆さんからきいてゐた。土曜と日曜とはきつと宿にゐない女だつた。お互に、食事は街邑でとつてゐたので、勿論ゆつくりと話する間柄でもない。時に、廊下で遭つて挨拶するくらいのもの。

奇麗なアパートのトイレットはフランスあたりのビデェに劣らない機械化した便所浴槽化粧室を兼ねてゐる。清淨なタイル張りで、純白のバス・タッブと、いつでも熱湯と冷水とが霧のやうに瀧の如くでてくる。朝起きぬけに、ヒーターでほのかに暖められたトイレットで、便器にゆつくりと腰おろして、一服やりながら新聞をよむ。便器に腰おろす前に、浴槽をネジひねつて湯をいれておく。化粧鏡が曇つてくる頃には、用も辨じて一風呂となる氣持は、ぴちぴちした輕快さが、衛生的といふよりも、活動的に感覺される。

だが、このトイレットの便器が、紐ひとつ引張れば奔流のやうな水で一切合財を遠くハドソンの河口かなり沖合の海底へと流れ去つてゆく。かく機械化されてゐるのが、女の月經の××に對して大なる不便不自由とをもつんだ。多くの女は、月經の××に對して、まだ舊式にも脫脂綿を××に挿入してゐる。この脫脂綿なるものが、機械化されたトイレットにとつては惡魔だ。

水洗の便器では、備ひつけの塵紙しかつかつてはいけない。新米の日本人、紐育のホテルで日本からの手紙を讀み乍ら、つい卷紙——それも榛原あたりの上等もんだつたらうが——で、祖國の便所通りに、至極簡便に用を達してしまつた。その卷紙が、水に溶てしまはない。便所の大洪水といふ失敗があつた。新聞紙なぞが、水管の彎曲でつかへてそれこそ大事件。脫脂綿なぞ××のあとで、ぽいと投げ捨て、勢のいゝ水壓で便器から妻こそ隱してくれる。だが、水管の彎曲はいかんせんやだ。

ある夕方、古本漁りから歸宿した。すると、下宿の厠の廊下の前に、宿の婆さん立塞がつてゐた。いつものお調子でない。

「ハロ！　北川、お前何か便器の水管につかへるものをつかつたか」

とペチヤペチヤときた。

「水管につかへるものつて？」

と怪訝たらざるを得ない。

「お前、日本じやこんなトイレットではなからう」

と。電車はあるか。飛行船はあるか。電話はと、日本のことを不思議がつてきいた婆さん。いよいよ厠まで日本のを詮索しだした。婆さんのいきりたつた話の筋によると、ついさき頃、相宿の例の職業婦人が用を達してゆくと、××を工合よくハドソン河口へと流してくれない。そこでミス・テキサスが大騒ぎをしだしたといふ。ところで、ミス・テキサスとオールド・ミッセス・アイルランドの二人の女は、まづ例のミスター・ジャップが葉卷の吸殼でも便器に投げこんだ、ときめてしまつたんだ。僕は、葉卷は、葉卷の國にきたんだから、朝も夜も、口からはなさなかつたんだ。

いくら葉卷好きでも、ミスター・ジャップは葉卷の吸殼を捨てるところは心得えてゐる。便器を灰皿や屑函の代用にはしないと、女連の主張に嚴重に抗議した。けれど、便器にはちやんとつ二塊の×が浮んで、水が××と混じて焦茶色が少々みえる。一目してミスター・ジャップの支那めしの×ではないとわかつた。斷然、その日一日部屋にゐないで、朝いちど宛も忠實な番犬のごとく正確に××の用を濟まして外出したんだと、婆さんに主張釋明した。婆さんまだまだ納得しない。ミス・テキサスはとうにお化粧もそこそこに、低廉いシールの毛皮にくるまつて外出してしまつてゐる。すでに、電話で清潔屋を呼んであるから、その入費を支拂へとの劍幕だ。寃罪の上に入費を支拂へでは、

それこそ重大なる結果だ。僕は、まつたく當惑した。

扉をノクして清潔屋さんやつてきた。針金の大きい輪を肩にかけて鞄ひとつもつてゐる。亞米利加でも、厠の掃除人足はやつぱり薄のろで、噛み烟草をぐちやつかせてゐた。

婆さんの喋舌るのを空つぶいて聽き乍ら、ミスター・ジャップの顏を下目でみる。掃除人足お手のもの便器の羅宇掃除ときた。婆さんは電話のベルでトイレットを去つた。清潔屋奴、默まつてトイレットの入口に立つてゐる方へ、へんな流盼で、

「こりや、おい女のだね」

ときた。×をみて品がいいみてとつたか、ぽつんと浮んでゐる人糞の形で女のだときめたらしい。しかし、便器のなかの焦茶色の水にぽちやんと漂ふ×が、しかして、その塵紙が皺くちやになつた光景。よくみれば、若い女の×であり××の塵紙と、道は清潔屋は實物檢證してしまつた。だが、管通しの針金は水管の彎曲でひたつと先へゆかない。

「お前、淋病の繃帶でもいれたのか」

とくる。淋病どころか、その日の朝は前晩の支那めしを喰ひ過ぎて、葱と葫と支那醬油の臭氣で、われ乍ら呆れた大便をしたんだ。

「今朝やつたんだが、病氣ぢやねいや。ゴッデム！」

と、ゴッデムが口を衝いてでる。

針金が役をしないので、清潔屋はいまいましげにミス・テキサスの坐つて××した儘の便器のなかを、とつ手のついた小鍋で汲みだし始めた。すぐ脇の純白清麗な浴槽へ水道のネジをひねると捨てだした。驚いたのなんのと。

「こりや浴槽だぜ」

「洗へば同じだ。すぐこんところで同じパイプになるんだよ」

と壁をたゝく。便器を空つぽにした。愛すべき女形の××も原子の如く塵散して奔流してゐつた。便器の掻ひ掘りは了つた。

やがて、便器の下の方をパンチで木ネジを外した。よいかな。便器と水管とのカーブをつなぐバルブには、生々しい血のついた一塊の脱脂綿。いふまでもなく、ミス・テキサスが××の時に、最初に月經の×××する×××を捨て流したんだ。

「へつ！　下劣なパロニー・スタッキング」

清潔屋は、さも穢はしげに摘んだ血みどろの——あたゝかみも覺えるやうな——脱脂綿。だが、彼の瞳には甘い接吻でも×××した。

性慾的索物症みたいの彼の生々とした瞳と輝く唇。清潔屋は噛み烟草をごつくりとのみこんでしまつた。

×××××××××

×××××××××

使ひふるされたコチックスでは、性慾的索物症の清潔屋の彼にとつては、無感覺なものではなからう。

コチックスとは、亞米利加特有の月經帶である。紙製の獨特なもの。水にとけて流れてしまふので、水洗便所向きものと新しく流行してゐた。それをつかつてゐれば、ミス・テキサスも耻じもかゝなかつたのに。脱脂綿とは舊い。清潔屋は、だが、それを、指さきにつまんで、よろこんでゐた。

墓になつたカザリン

1

歐羅巴で變な女にばかり接觸してゐた後に、亞米利加に渡つた。紐育でも、少々女疲れをどことなく覺えてゐた矢先。久濶ぶりだ、ヴァジニアの山莊へこい、とウェスタン・ユニオンの親信紙が紐育のホテルでわたされた。

十年も前に、プリンストン大學の在學時代に度々厄介になつた友達の家は、同窓の若いのが主人公になつて子童が三人もある筈だ。

一週間の紐育のメトロポリス・ライフで、慌しさに怖れた。早速、南部への旅へと身輕でとびだした。

やつてこいと招かれたヴァジニア境の山莊は幾度か夏と冬とを過ごした曾遊の家だ。懐しさもあるし忘れられない痛手も……。やさしかつたカザリンと樂しく暮した山莊でもあつた。哲學者みたいの姉ルイズはどうしてゐるだらうか。これらが山莊への旅の思ひの數々。カザリンと別れてすでに十年になる。十年前がなつかしい。

山莊。まつたくヴァジニアとノース・カロライナの兩洲の洲境の山脈の麓にある山莊だ。二階が大きい二つの寢室と、いくつかの小さい寢室の外は、階下が食堂と應接間兼用のホール一つの山の樓み家だ。

石積みの贅澤な暖爐の前で、夜更けも忘れた。吹雪の宵も知らず顔で、唄つたり、踊つたり、カードに耽けつたりした。

はじめての夏の山莊生活では、朝の讀書と午後の馬の遠乘り。夜の、山から山への自動車專用路のドライブ。しかして、わが若りしカザリンに佛蘭西語を、朝はやく玄關の脇のハンモックでも敎へてもらつた。カザリンの乳房にもさわつた山莊……。

馬の遠乘りでは、里の百姓家でよく鷄を購つたり玉子を仕入れた。山の徑道の徒歩競爭では、脚が惡いので、いつも仲間はずれで後陣を承つてゐた。その時でも、カザリンは一所についてゐてくれたんだ。握りあつた手は輕く汗ばんで、よくカザリンのハンケチでふいた。兩人は、そのたびに……。

大學の試驗が終了しなかつたので、從兄のダニエルと二人して二日ばかり遲れて山莊についた。ついた日の午後。カザリン達の伯母さんは、「これでみんな揃つた。二人の若い淑女が待ち詫びてゐましたよ」

と。ダニエルには彼の戀人エディナが勿論そのお相手であつた。誰がお相手かと思つたら、ダニエルの從妹のカザリンが、いかにも女々らしくなつて、大きい瞳に潤んだ睫毛を微動させ乍ら、

「しばらく……」

と握手してくれた。無邪氣だが、どことなく尻込みして、なんとなく女らしさの匂ひが感ぜられた。

若い女が五人。若い男が四人。しかして、すでに姥櫻の伯母さんがその附添監督。山莊は垣と壁とをとび越えない限度での男女同棲生活だつた。二度のアメリカ生活で、この時ほど處女との團樂をしたことはなかつたのだ。と思ふと、十年後に招れても、山莊への旅がいつも新鮮な情を動かす。

黑奴の夫婦ものの別莊番が下男召使を兼ねてゐた。毎朝毎晩、きつと四組の若い男女のうちから、臺所で食事の仕度といふ規律が實行されてゐた。わざわざ、紐育の片桐といふ日本食料品商から、醬油をとつて鰻燒をやつた。毀譽褒貶なかばした。天麩羅は、娘達からも、ひどく好評を博した。

二ヶ月ばかりのあいだカザリン組の當番の朝は、連中よりも早くから起きてあれこれと手傳をした。不器用に葱の皮を剝いたりした。カザリンは纖弱い腕で暖爐に薪をくべた。珈琲工合をみろと命令けられて珈琲沸しをひつくりか

へして黑奴の下女から厄介視されたこともあつた。

カザリンは、的皪とひかる宵の明星みたいのダイヤモンドひとつの襟飾のほかは、到つて地味な服裝で長い睫毛に潤ひをみせていそいそとしてゐた。

豐な頰に、情深い微笑を漂はせて異國の黃い若い男を、パアートナァーとして擁つてゐてくれた。

その夏から三年前に、親友の家庭で始めて遭つた。その時は、カザリンはまだお下髮だつた。よく膝へのつて、下手な發音を顏のぜきこみ乍ら不審がつた少女だつたが……。すでに、それが舊い相識の感じばかりか、なんとなく物寂しげに異國からの大學生の胸に何ものをかを響かせてゐた。

姉のルイズはダニエルの從姉妹のうちですぐれた麗人だつた。大學を卒へても、まだ獨身で繪ばかりかいてゐた。カザリン姉妹は早く母親に別れ、父親の手と伯母の手で育つた。その父親もかなりの遺產をのこして、つい一二年先に死んだ。

姉のルイズは、いよいよ山莊を去つて大學へかへつてゆくときまつた前宵に、露臺で二人きりになつた時に、

「カザリンをどう思ふの？」

と訊ねた。遠いところにおいて、ひそかに眺めてゐたカザリンの姿が、どかんと胸許にとびこんだ感じを覺えた。ルイズは失戀した女だけに、カザリンとの間柄をさとつてゐたのだつた。

大學の生活で、酒も國禁を犯してのんでゐた。街の女も知つてゐた。乾ききつてゐた寂寥い異國生活に呼吸してゐる日本人には、カザリンと深い戀心を打ちあけあふのは、餘りに彼女は優しかつたし淑しい女だつた。

2

大學院學寮はどうも煩さくなつてきた。何時に起臥して、食卓は何時から何時と。縛られてゐる學寮の生活もかれこれ三年になつたのだ。大學街の街端れで、はるかに湖のみえる靜な二階へと下宿をさがしあてて移轉したのは、カザリンからの手紙が、毎日毎日くるやうになつてから間もないことだ。

朝。目がさめて寢臺からまはりの壁を眺め乍らの一服。窓外の春雨の落葉をたゝく音の繁さに誘はれて「今日も雨か」と朝の湖の水面をみに窓際にたつたが、寢臺にもぐり込んでしまふ。

復活祭以後は研究室の講義も全部——といつても一週にたつた三日だが——午後になつた。正午前は、下宿にゐて讀書したりしてゐた。午後から、研究室と實驗室へとでていつたのだ。

朝めしだけは喰べたければ、階下の老人夫婦と簡單に濟ませた。晝と夜ととは、フラタニティーの食卓にでた。二階の窓からみえる湖の水色が、日に幾度なく複雜に變化した。緯度が高いせいか、清澄な空が紫の水面に對應して美しい彩りをつくつたりしてゐた。

あたりの靜寂さは窓まで迫まつてゐるのだ。音とも知れぬ響と湖面をわたる微風とは、融けあつて徐々と繪畫にだけ描ける靜律が、ともすると、クリスマスに友の家で別れてきたカザリンの憂ひ顏のリズムに思へてならなかつた。カザリンは、眼をつぶつた接吻のをりに眼睫が顏にさわるほど長かつた。靜な、衝動的でない舌さきの微動。接吻まで、カザリンらしかつた。これがクリスマス・プレゼントと、羞しげに囁いたのも、もう三四ヶ月前になつた。手紙は必ず一日一通もらつた。返事はきつとかいた。

桃。梨。李。林檎の花。いちどきにみんな咲いた。

春を誇るあかるい花の樹々の根元には、薄黑い土からの小さい紫の菫、黃の水仙が、咲きつれてゐた。丘の春は、春の湖と相呼應してゐた。

靜な環境にゐながらも勉强はできなかつた。かへつて、嵐のやうに感情が動いてゐた。

3

春盛りと思つて油斷してゐると、おとなしやのカザリンは、お手製の復活祭の挨拶カードに、獨り寂しがつてゐる惱みを聽いて下さい、とばかりに迫まつた文字で屆けてよこした。

街の女を抱くどころか偶然に知り合ひになつたなかば素人のオフ・スガールとも嬉戯した。ボーカーをして競馬に夢中になつて、街邑にでてはひそかに鬱ぐ酒をのんでゐる外國留學生のひとりに、純なる處女の情をこめたこめないやうな手紙はむしろ慘酷であつた。でも、カザリンの手紙は何よりも待たれた。

手紙よりも下街のアパァートで、

「こや奴、この頃どうかしたね」

と喚呵きつて支那飯店で踊るオフ・ス・ガールと稱するサァニティーケース愛用黨のナンシーの肉塊と、その寢臺とが有難がつたのだ。

どうせあと二年すれば日本へ歸らねばならぬ軀だ。やるだけの金で歡待しろといへば、かへるかへるとぬかしやがる、と怒るナンシーはアメリカの女には珍しく金ばなれの奇麗なことと、ぽてぽてした餅肌が、のがれたいのがれたいと、思ひつゝひきつける魅力であつた。

毎週金曜日の午後になるとダニエルの自動車が、それが工合わるいとジ・

ンス・ホプキンス大學以來使ひ古したフォードのツ。リストで八十哩もドライブしてカザリンに會ひにゆきだした。ダニエルが歸宅しない時には獨りで汽車にのつた。二月の下旬からは缺さずカザリンを訪ねた。遣へば面長のカザリンは、大きい潤ひの眸をみはつて手を展げて迎へてくれた。胸には、いちど好きだといつたフリ。ジャーの香水がいつも匂つてゐた。

淡紅色の寢卷ひとつで抱擁してくれるナンシーには、電話がかゝつてきてもなんとか遣はゞ言ひ草をつくつた。純潔な女の情の動きは、肉の惡戯も遠ざけてきた。だが、指導教授から督促されてゐる論文は捗取つてゐないのであつた。

カザリンは手紙をきつと毎日かいてよこした。雨が降つても雪が降らなくても、大學郵便局の私信函に正午といふと一通。部厚のものか、薄いものか、いづれにしても。

女からのたよりには、すぐと返事をかくのがアメリカの若い男がしなければいけない義務だ、とナンシーからの手紙に返事をかゝないので皮肉られた通りにカザリンにはかいてだした。

男女の手紙の禮儀。いくら學窓生活の呑氣さでも、毎日の返事はかなりに煩雜だつた。いゝ文句を覺えやうと思つて、小說と戲曲を貪り耽けつたのも英語の下手な日本人にとつては一仕事だつた。

つゝましげのカザリンの手紙は、いつのまにか無遠慮になつてきた。美しいひとの細い眉が顰むことをかいても返事は美しかつた。手紙のひとつ。

「あなたはあまりに親切過ぎます。親切すぎてもわたくしは怒つてゐるのではございません。すぎた方がやつぱり悅しいのです。

土曜日の夕方に大學の病院から漸く家にかへつてまゐりました。ロッ

キング・チェヤで編物を始めてをりますと、妹思ひの姉ルイズがわたくし宛の特別配達の小包をもつてきて下さいました。

もうよくなつてよかつたのね、と微笑みながら小包をみせびらかして、誰からの？　と。わたくしはすぐ解つたんですよ。でも、すこし昂奮して封を解きました。

香のたかい白薔薇。

よく覺えてゐます。山莊で、みんなして何の花が好きだと選びあつた時に、わたくしの我儘はあなたを無理矢理に頷かせてホワイトローズ。

「白薔薇は何んの具象か」

「純な友情……」

ルイズに應へました。ルイズは、微に笑つてゐました。すこし咳きこみましたら姉は輕く背を撫ぜてくれるのでした。そんな時、壁の母の肖像畫が悅しさうにみえますの。

「お前の手紙をよむのにも辭書がいるんだよ」と英語つてそんなに面倒くさい言葉でせうか。あなたのお手紙くらいよくわかる英語はありません。もつと、もわたくしにとつてはね。

あなたとわたくしの話くらい難しいことがかゝれる手紙がありませうか。それでもよくわかりますの。もう、友情と戀愛の議論はやめませう。やめてもよろしいでせう？

咳がまたではじめました。咳いる時に背をたゝいてくれる姉は部屋に引き籠りました。いゝ姉ですが寂しいひとです。

白薔薇はまだマントルピイスで匂つてゐます。今宵は白い薔薇の夢をみませう。では、おやすみ……」

言葉の相違。人情の相違。生活の相違。肌の色の相違。感傷的な憂愁が積

いてきた。庇ふやうな顧れかゝるカザリンの心持は日に日に手紙に綴られてゐた。愛と情とに渦へてゐる異國人の心のおく底を透視する鑑でもないがと、娘心のやさしさには、返事かくペンにも氣遣れと慎慮とが駛つてゐた。

いくたびか、いくたびか、默まつてゐてはどこまで引きづられてゆくのかと、解り兼ねて「友情ですよ、友情ですよ」とかいた。

黑味がちの眸。黑と白との色を好くカザリンは、男女のよき友情の極致は戀ぢやないかと論定してきた。

オフ・ス・ガールのナンシーは異國人だらうが同國人だらうが、月曜から土曜日へのオフ・スの仕事の外は、生きてゆくための彼女の耐え難い肉の征服に惱んでゐた。別れた亭主は呪つても、男女の××は呪へなかつた。日本料理がたべたいたべたいと、いつくるかいつくるかと、下手な筆蹟で催促してばかりゐた。電話では、かなりヒステリカルな聲をだしてゐた。

ナンシーには、戀とか情愛とかを離れて、男と女との堰を構へない××の技巧がほしかつたのだ。爪磨の藝術で、指の尖きまでお化粧しても、金と性の滿足とがほしかつた。嬉曳する彼女のアパアートの一室では、瓦斯で沸した湯で、××を××××するのを面倒くさがつて避姙のピルまでのんだ。

丘の生活はたゞ慌しい。純な情愛と濁つた情慾。しづかに讀書するには耐えられない日が續いた。ダニエルは、

「郷愁？　戀の合戦？」

とひやかし始めた。

大學の三たび目の夏の休暇がきた。三たび目のヴァジニアの山莊の日がきた。カザリンとは姉ルイズや從兄ダニエル達の目をさけては散歩し乍ら話した。接吻と抱擁……。けれど、彼女の胸の患ひはかなりに進んでゐた。

目にしむやうな白リンネンのシイツを、狼狽してパジャマでかくすことさ

へあるナンシーの寢室へは、夏の山莊から歸るとかへつて足繁く通つた。彼女は、別れた亭主からも再婚する迄の慰藉料を時をり捲きあげにいつた。オフ・ス稼ぎもやめるから、同棲しやうと迫まることが、度重なつてきた。

夕餐も大學のフラタニティーの食卓でとることが減つた。大抵はナンシーと連れだつて、支那めしだ日本めしだと、とび歩いてすました。食後、どこにゆくでもなく、映畫でもみるとナンシーの部屋にかへつた。濃綠と淡紅との交織されたやうなシェードの下で、夜更けまで乳くりあふことが一切を忘れさせた。

カザリンへの手紙だけは、穢れた反逆者も丘の湖のみえる部屋で靜り心でかいてゐた。

いつしか、南部の秋も、冬も過ぎた。カザリンからの手紙には、白椿だの桃だのの花瓣が、入れてあつた。

病弱なカザリンは廿一歳の華さを、姉ルイズに親身の看護をうけ乍ら、もの寂しい病床の人になつてしまつた。

4

疲れ弱つた胸に耐えられぬれぬ思ひ。それが、カザリンの手紙のどこにも湧れてゐた。あの接吻、あの抱擁、と過ぎてゆく遣ふ日のすべてを現實から幻へと追つてゐるカザリンであつた。

ダニエルは丘の家の窓際の長椅子にねそべり乍ら、

「胸がわるいからいけないといふのか」

とまで問ひつめてきた。アメリカ娘には珍しくも、從兄にまで切ない思ひの救援を求めたらしい。姉のルイズはダニエルを大學に訪ねてはよく誘ひにきた。

素晴しい自動車で、妹の手紙やらホーム・メードのお菓子やらをよくもつてきてくれた。

白薔薇と新刊の小説と美術の本は殆んど毎週カザリンの枕許へと送られてゐた。カザリンは何よりもそれをよろこんでくれてゐた。

葉巻を喫えてぼんやりと湖畔を歩いた。葉巻を喫えてぽつねんと街邑のナンシーの狭い部屋へと通つた。それでゐて、金曜日から日曜日へかけては、カザリンの家の人となつてはゐたが……。

だが、……突きつめてくればくるほどに冷くなる狡い氣性は、カザリンの接吻に抱擁にひきづられつゝも、最後に無氣に繋ぎを切りはなしてしまつた。

紐育からリバプールに向ふ船の甲板から、無線電信の報信紙四五枚にカザリンへ見舞と歐羅巴への旅の挨拶とを送つた。

船がハドスンの河口をでると間もなく、滑らかに風いだ海原を舷端の欄干にもたれて眺めてゐた。なぜ、亞米利加を去るのか。ふと、紐育の日本倶樂部で野口英世博士が、不自由な左手を庇ひながら、右手で王や飛車の駒を動し、「なんと雪隱詰になつても、毛唐の女はもらふなよ」と。その夜、呟いたこの言葉を、思ひながら、歐大陸への船旅はやるせなさで寂しかつた。

「わたしの愛とまごころはあなたと一所に」の文句を、カザリンから無線電信でうけとつた。

……

……

……

カザリンの墓に遺ひにゆきたい。あれから十年後。ヴアジニアの山莊への旅の眞の願ひはこれであつた。親友は電報にカザリンのカの字もだしてゐなかつた。

香りと匂ひ

昔から有名な香水……四世紀も芳香を放つ珍書……野蠻人の嗅覺……胡草の匂ひ……香匂の取締令……香りに因んだ遊戯……地勢と香りと匂ひ……羅馬時代の香り狂……薔薇のブルゴリヤ……性的分泌物の麝香……誘惑する香りと匂ひ……龍涎香……殺菌力をもつ花香……香りの魅惑性……性的嗅覺官能の胚胎……エロ的な香水の選定……生殖と性的分泌……文化と香匂……シルレルとゴドレール……催×カクテール・抑制カクテール……白葡萄酒に香料……スープに混ぜてのむ…男だけが愛飲するシロップ……女だけが愛飲するシロップ……香料酒……細しいママレード……催春酒

昔から有名な香水

この頃の日本ぢや、香水といへば殆んど佛蘭西もの全盛だ。セラミイ、コテイ、ウイグニイ、カロン、ルバン等々。巴里渡來ものが幅をきかしてゐる。英吉利のアトキンスンとか、獨逸の四七二番なども、ちらほらつかはれてゐる。だが、すくなからう。香水で、昔から歐羅巴で有名なのは、十四世紀の末頃にハンガリヤ香水といふのがあつた。

これはハンガリヤの女王エリザベスが仙人から夢のうちに傳へられた處方に據つたものと傳說されてゐる。女王はそれを寵愛してゐた。

このハンガリヤン香水は、いつまでも處女美を保つてゐる香水であつた。エリザベスの麗朗な女王ぶりには波蘭の國王が惚れ惚れして求婚した。その時に、女王エリザベスが、姥櫻も姥櫻、すでに古稀を越えること二歲卽ち七十二歲であつた。七十二の皺くちや婆さんを、處女らしく匂はせたハンガリヤ香水は、ばらの薔薇の花と菫との精油である。

ラワンデル香水といふのが英吉利では古來から評判だつた。青藍色の花をもつ刺賢垤爾といふ植物の精油。芳香ばかりかこのラワンデル香水には殺菌力があつた。

オールド・ロンドン時代のたびたびの疫病流行に際しては、ラワンデル香水は、疫病除けの殺菌消毒香水として、ラワンデルの花束と、よく呼び賣りをされてゐた。

さあさあみなさん　お購ひなされ
とても綺麗なラワンデル
山盛り二束がたつた一片

なんて小唄が流行てゐた。

詩聖バイロンがよく詩句によみこんだコロン香水は、十八世紀になつてから伊太利亞から巴里倫敦へと流行してきた。迷迭香と橙花、オレンヂ、シトロン、枸櫞の香精混和香水であつた。性的昂奮性があつたので好かれてゐた。

ホニー香水はジェームス二世の侍醫ジョージ・ウイルスンの言葉によると「肌を滑にする香水」であつた。麝香、胡麥、ガニラ、安息香、オレンジ油の混和香水。

南阿の開拓者セシル・ローズのことを英吉利人はよく帝國建設業者といふ。エンパィヤーとかインピリヤルといふ言葉は、英吉利人の口癖のひとつだ。帝國香水といふのが、矢張り十八世紀には口中を爽快にする香水として、ロンドンの社交界でもて囃されてゐた。

この香水は、反魂香、安息香、マスチック、アラビヤゴム、丁香、肉豆蔻、松の實の心、スヰート・アルモンド、ブランデーに混和した麝香の精香。

四世紀も芳香を放つ珍書

牛津大學のなかのボードレーン圖書館には、十六世紀から現代まで四世紀もひき續いて芳香を放つてゐる珍奇な書物が藏されてゐる。すでに、四世紀にわたつて、薄暗い乾燥した圖書館のなかで、獨りぷんぷんと芳香を放つ。それは薔薇の香。

「香氣を放つ書籍は、モンテ・カシノからきたもので、運搬される途上書物が香水の樽のなかにつかつたものらしい」

と圖書館の定期年鑑に毎年「匂ひを放つ珍書」として誌されてゐる。

昔は英吉利の國王や僧正達は、よく圖書館の床に香料や匂ひものを撒きち

らさせたのである。

野蠻人の嗅覺

香りを慕ひ匂に憧れるのは人間の本能である。嗅覺官能は他の諸感覺よりも人間には鋭敏な程度で與へられてゐる。嗅覺官能は、それでゐて野蠻人が文明人よりも原始的だがより鋭敏だ。といふのも、野蠻人は鼻腔の嗅覺神經のある粘膜が文明人ほどに痲痺してゐないからだ。

人間がかく嗅覺官能の强い動物であると主張したのは、古代ギリシヤの僧侶セオフイリス・プロトスパミアスである。

嗅覺神經のある鼻腔の粘膜は、鼻腔が外界とほどよく通じてゐて始めて活動するのであるから、鼻腔の健康は一に本能的快樂への第一歩であると知らねばならぬ。

いくらいゝ利も鼻でも、香水や香料を、鼻腔いつぱいにつめてしまへば、それ以外の香氣も匂ひも決して感覺されはしない。戀人や妻君からは、たまには離れて、馴れ切つた鼻腔の嗅覺神經に新鮮味を與へるのは××への技巧のひとつだ。

味覺官能と嗅覺官能との關係は、味覺する以前に嗅覺が働く。食物を咀嚼したり嚥下したりする時には嗅覺力はかなり鋭く働く。この味覺官能を働す以前に鋭敏に嗅覺官能を働すのは、犬が鋭敏だし猛獸も非常に鋭い。プリニイの說では、鳥は腐敗物がすでに腐敗作用を起しつゝある以前に腐敗の臭氣を感じると。蟹と蝦は鋭い嗅覺力をもつてゐる。それといふのも生殖作用のためださうだ。

肉食動物は草食動物よりも體臭をよく嗅ぐ。人間にしても肉食を好む人が

菜食の人よりも體臭を嗅ぐに鋭く強いかどうか疑はしいが。その代りに草食動物は花の香とか樹木の匂ひを肉食動物よりも鋭く感覺する。婦人科の醫者が女の××の臭氣によつて性的生活を知るのもこの類であらう。

印度民族のうちのベル種族は獵犬のやうに動物の體臭を嗅ぎわける鼻をもつてゐる。亞米利加印甸人は嗅覺力によつて他種族の體臭を嗅いで、眼に映ずる足跡よりも臭氣で正確に敵の在所などを發見する。これらの種族は妻は夫の體臭を嗅ぐ。夫は妻の體臭を嗅ぐ。他の女との抱擁とか、他の男との接吻とか××を夫の軀の移り香からも、妻の××からもわかるといふのだから浮氣は許されない。從つて、彼等は視覺力や聽覺力によつての性的判別よりも、嗅覺力によつての判別が強い。

英京倫敦は、十月下旬から二月へかけて霧の都會となる。その霧が一種特異の臭氣をもつてゐる。それが、豆スープの臭ひだともいはれてゐる。處によつては、メロンの匂ひだともいはれる。とにかく、冬の倫敦の匂ひは、いづれにしても霧の臭ひである。いまでも、濃霧のなかに、四辻を標示する瓦斯バーナーのぼやつとした玭素色と霧の臭ひは想ひ出す。

故郷の臭ひ。田園の匂ひ。海濱の藻の香り。山の匂ひ。高原の匂ひ。それぞれ郷土的な想ひ出を嗅覺官能から知ることがある。德富蘇峯先生は刷りたての新聞紙のインクの匂ひに耐えられない讃慕を感ずる新聞人であつた。

女の髮と白粉と枕と褥と、××と柔い××の匂ひ。いちど女を知つて、女の匂ひを忘れられぬのは昔からのことである。だが、或る人に快感を與へる香りと匂ひが必ずしも萬人にとつてのいゝ香りであり匂ひではあり得ない。餘りに強烈な香匂は頭痛や吐氣を催さしめる。だが、その強烈な香匂に刺戟されて陽氣になる人もある。こんなのが香や匂ひで誘惑されてふらふらとするのだ。

烟草の匂ひ

十八世紀から十九世紀にかけて倫敦や巴里で流行した嗅ぎ烟草は、芳香のある烟草をアンモニヤにしめしたものであつた。

なかには、嗅ぎ烟草に、ローズとか、ラワンデルその他の花の香りが、加へたものがあつた。佛蘭西の嗅ぎ烟草にはオレンヂ、麝猫香、麝香、龍涎香等の香が加へられたものもあつた。

葉卷の名產地キューバのハバナでは、原料をシーダーのやうな芳香をもつてゐる木材の函に、貯藏したりして、烟草に烟草以外の香りを加へてゐる。紙卷烟草にしても、ヴァージニヤものにはヴァージニヤ的な匂ひがある。土耳古ものには、土耳古的な香りがある。埃及ものは、いちばんやはらかい烟草の匂ひと香りをもつてゐるのだが、廉いものは駄目だ。

香匂の取締令

十八世紀は歐羅巴の女の化粧革命時代であつたといつてもよい。古代風の粉飾、封建時代風の堅苦しい化粧から男女ともに解放されてきた。顏には現代の女のビューティー・スポット以上に淑しいパンチといふ珍型な油押繪が貼附された。ハンケチが、スチッキが流行してきた。

この尖端的な流行は香水と匂ひ袋とかの誘惑や魅力がつけ加はつて更に激しい光景をみせた。とくに、香匂に溺惑したのが、オールド・ロンドンの女であつた。一七七〇年——わが十代家治將軍時代——の英吉利の議會では「婦女がみんなその階級職業年齡及び教養の程度を問はず處女であらうとも既婚者で

も下婢でも未亡人でも、婦女といふ婦女がよしやそれが婦女の嗜みであらうとも英吉利國王の臣民たる男の誰でもを香りと匂ひ、脂粉、顔料、麗しき義歯、染毛、スペイン毛糸（肌を染めるためにつかはれた洋紅を滲みこませた毛糸）、コルセット、技巧スカーツ、躍高靴、腰の腰（女がスカートの臀部を大きくみせるための一種の繼で七重桓 *Sevenhold Hence*）等で踊着して結婚を誘つたり、妖艶な性愛技巧とかで、色戀を强ひれば輕罪。その結婚は無效だ」といふ珍奇妙な取締令がでた。

當時の妖婦的技巧がこの一法令によつても想像される。香りと匂ひが、法律の槍玉にあがつたのは、おそらくこれが世界で嚆矢であつたらう。

假髮と顔料が男の化粧にもつかはれた。假髮は鬘といはれた。鬘には、ヴァィオレット、ローズ、麝香のごとき高價な香料がふくまれてゐた。

女の顔に美顔資料としてつけるパッチは、絹布とか、硬膏の小片に日月星龍とか、馬とか、ひどいのになると蜘蛛とか生殖器とかの珍型もあつた。七十からの醜い老婆が、皺くちやの顔に、十五六もパッチをつけて、悅に入つてゐたといふのだから妖婦的技巧以上だといはねばならぬ。

大學生もお化粧して白チョッキで白靴下で麗しい鬘をつけての盛裝で食卓につくのが當時の牛津とか劍橋の大學生の生活であつた。大學には「お白粉をつける部屋」（*Powdering-room*）といふのが必ずあつた。だから、婦女の化粧取締令は必ずしもわが天保の大改革時代ばかりではない。水野越前守忠邦が老中主座になつて、儉約萬能主義で「市中の髮結床で、お客が込合ふからといつて、女房や娘などにお客の顔を剃らせてはゐるが、あれは風紀上よろしくないから嚴禁」なぞは手緩い方だといはねばならぬ。

香りに因んだ遊戯

中世時代の英吉利では、香りに因んだ遊戯があつた。「香橙とレモンズ」とよばれてゐたのがまだのこつてゐる。

これは子供が二人手を組んで高くあげ、その下を他の子供達が通りぬける。通りぬける子供達は手を組んだ子供が唄ふ小唄の唄ひ了らないうちに通つてしまはねばつかまる。

"Here comes a chopper to chop off your head:

The last, last, last man's head."

「ちよん切る男がきた。お前さんの頭をちよんぎるぞ。遲れた、遲れた、遲れた、遲れお方のお頭を」

何故にこの遊戯を「香橙とレモンズ」といふのかはわからない。恰度、われわれの「こゝは何處の細道ぢや、天神樣の細道ぢや」の類だが、遊戯の名稱が「香橙とレモンズ」。

地勢と香りと匂ひ

地勢と氣候は、花の香りと匂ひに重大な影響を及ぼす。强烈な芳香をもつゴムやその他の樹香は、印度・セイロンから東洋の熱帶や溫暖帶が古代から有名だ。歐羅巴では、薔薇がなんといつても芳香の花の女王である。

南フランス、とくに、地中海沿岸の芳香性植物地帶はその優れた點では世界一であらう。

オレンヂの花が、パールの乾濕地方で烈しい芳香を放つてゐることは、パ

ール地方の特有だ。そこはオレンヂ香料の製造地としてすぐれてゐる。ゲラッセからニースの地中海沿岸は一大花樹園の展開である。芳香放出性植物の栽培がその花樹園に君臨してゐる。スチレーレ山麓には香高きすみれが咲き誇ふ。月下香もまたすみれにまけぬ薫りを放つてゐる。

ケーンを中心とした地方からは、薔薇、月下香、旃那屬、素馨、オレンヂの香。ニームからは、迷迭香、かあねいしょんとラヴンデルの花が匂ひ誇ふ。

伊太利亞には蔦尾屬の香花。佛手柑が匂ふ。シシリーには、レモンとオレンヂの花香と果實の匂ひ。

寒冷地方には、ヒヤシンスの外に芳香性球莖狀植物の花がある。和蘭はその中心だ。英吉利では、ラヴンダとスレー地方の薄荷。ヘルトフオルドシェヤーは、世界で最も高價な薄荷精油を產してゐる。

花の香りは白晝はあまり强く嗅覺官能に感じないものである。だがこの例外もある。花の香りは夕暗迫る頃かもしくは夜になつて强い香氣を發する。煙草、宵咲きせすつらむ、夕方咲く剪秋羅屬の花、三柱頭きばなのはたさを屬の花がそれだ。双葉さささう屬の花は白晝はまつたく匂はない。夜の十一時頃から香氣を發し、漸次曉近くになつて花香が減少してくる。陽光をみるとすぐと香氣は發散しない。女が宵に化粧して、宵越しの匂ひを發散するのもやはり自然なのだ。

花から發する香氣と關聯して、花にあつまる昆蟲の活動力が最も旺盛な時に、花香が增すのだ。つくばね朝顏の花は、白晝は極く弱い香りだが、宵闇みのつゝむ頃から强烈な香氣を發する。それは、蛾の一種類がその頃がもつとも活動するからである。黑天竺ゐふひは白晝は匂ひなし。夕にはヒヤシンスの如き香も發して、夜蛾はその時に花に群がる。これら以外の花は、概ね白晝香りを放つて蜂を呼ぶ。日沒後は香りをとざすのだ。××や××は、これらと全く

反對だ。

花の色彩と香りと匂ひの關係はまつたく神秘の謎だ。だゞ、コーラーの說では、この謎に關して幾つかの實驗を示した。芳香を放つ花でも、白い花がもつとも香りをもつ。黃い花がそれにつぐ。赤い花、靑い花、紫の花、綠の花、と順に香匂の强弱を示してゐると實驗の結果を示した。オレンジ色とか褐色の花は、最も弱い香匂である。

羅馬時代の香り狂

女が髮と乳房と羞恥部とを露出してゐても、それが肉感的であつても、もし惡臭があつたらば、男は決してそれにひきつけられない。香りと匂ひは女の髮から乳房から——しかして、これからの女は羞恥部にさへも男を惑溺させる匂ひを——發散させることが性愛技巧である。古代ギリシヤ人が裸體美を誇りながらも裸體の匂ひを保つために香脂を用ひた。それが羅馬に傳はつては、羅馬の女は異常に香脂を裸體に、とくに×××に用ひた。

顏料のほかに水仙の球根からの汁と白蜜とを混和したものをリンネンに濕して終夜顏にのせて皺のできるのを防いだ。皓齒になるために石灰の燃え灰で齒を磨いた。羅馬の女は黑髮が多かつた。金髮にしたいために葡萄酒と酢との混ぜた土壺に水蛭を腐敗させてそれで黑髮を金髮にした。勿論、過酸化水素で漂白するの技巧は知らなかつた。だが、それに均しい結果を獲てゐたのだ。石鹼は山羊の脂肪とあっしゃ(枠)の樹液とでつくられてゐた。羅馬の政治家クラッサスやシーザーは、餘りに激しい女の化粧と香料との濫費とで、香料の輸入を禁じたこともあつた。

羅馬に輸入された香料は主としてシバリス人が扱つた。シバリスの人卽ち

シバライトといふ字が、そのまゝ贅澤家者侈淫蕩に耽溺する人の意味に轉訛してゐた。これによつても、いかに羅馬時代が、香りと匂への讃美時代であつたと、いまでも推し知れる。

薔薇のブルガリヤ

香水をつくるので綺麗な花を培つてゐるのは土耳古とブルガリヤである。アドリアノープル地方では、耕作地の大部分が、香水の原料としての花を採るために薔薇園である。この地方の薔薇は外側雄蕊の花瓣に變じてゐて、花の輕い眞紅の中輪咲きである。

ブルガリヤ高原の四月末から六月へかけては、曉ちかくから天涯限りない香りの生命が薔薇園に展開されてくる。群る子供達は薔薇の花を摘む。摘んだ花を袋や籠にいれて運ぶ。唄と踊がどこにも湧いてゐる。薔薇園はまさに花の美と芳香と天使みたいの子供達とでエデンの樂園そのまゝを思はせる光景。

摘まれた薔薇の花は、農家の納屋の舊式な蒸溜場で、薔薇の香精油となつてくる。それが、佛蘭西の香水工場へと輸出されてゐるのだ。

性的分泌物の麝香

嗅覺神經は鋭敏だがすぐ疲勞をする。とくにオゾンの濃い海濱だとか、高原では、人間の嗅覺力は鋭敏になるが、すぐと疲れる。酸素は香氣傳播の好い媒介體である。とくに、揮發性の香氣は酸素が濃いと强烈になる。

揮發性の低い香パチョリヤとかオボホナクスのごときは最强の香だ。揮發性の高いものローズ。カラマスのごときは弱い香氣をもつ。麝香は性慾を刺戟

するので、これを女に無理に嗅させてから、マンデガサといふのは、强姦したといふ。香り應用の犯罪がある。

最も激しい香で、それが動物の分泌物であるなら、その香りは、その動物の性的分泌物と同じ臭氣である。麝香は麝香鹿の雄の腹中に腐敗した他動物の血液がたまつて、生殖分泌腺や精液嚢にはいつて一種特異の香氣をもつ。この香氣は、雄の麝香鹿が交尾期近くなるとさかんになつてくる。ヒマラヤ山脈の高原や西藏から支那の奥地に生棲してゐるのは、雌の麝香鹿の嗅覺力に訴へて雄が雌を嗅ぎよせる。麝香は、雄の麝香鹿の腹部に、胡桃の半分位の大さで袋みたいのが臍の邊に發見される。白皚々の雪の高原で、雌をひきよせるために分泌する麝香が、社交界の女が男をひきつける香料となるのだ。

雌をして雄のありかを知らしむる麝香の香りは、側にあるすべてのものに、その香りを傳へる。だから、昔、東印度商會は印度から輸出する茶と麝香とを、同船で積出すことを堅く禁じてゐた。

性的分泌物がもつとも鋭い傳播力をもつ香りであることは、香りが女にとつて男にとつて性愛技巧の缺くべからざる所以と知れ。强い香りの麝香でも、樟腦と巴旦杏の香りにふれると香匂は減退してしまふ。

誘惑する香りと匂ひ

パチウリ香を好む女が、衣裳にも部屋にも閨房にも臥褥にも、それを用ひてゐたら、段々と食慾が減じ不眠症となつてしまふ。誰にとつても、適度の香りと匂ひは、愉快な誘惑的な感覺を與へるが、度を過ぎてはいけない。

女には、シトロネラ、ローズ、ヴィオレットが概してよい。男には、麝香、白檀、シィーダ等が男性的なものとしていい。

龍　涎　香

龍涎香は、蜂の巣からだとか、琥珀と同じ植物性のものだとの傳說がある。今ではそんな伽話みたいの傳說は全く信じられてゐない。龍涎香は、抹香鯨が不消化物として吐き出したものである。スマトラ、マダガスカルとか、ブラジル、支那から日本の近海には、さかんに發見される。

殺菌力をもつ花香

動物の性的分泌物の香料が性的刺戟とか性慾昂奮性をもつてゐるのに對して花からの香りと匂ひは殺菌力をもつ。佛蘭西の香水の原料を採る花樹栽培地方には肺結核が稀有だ。肉桂、丁香、馬鞭草、ラワンデル、白芷、紫檀、百合、レモン、茣等はいろいろのバクテリヤを殺菌する香りだ。結核菌は肉桂の精油で二十三時間で死ぬ。ゆうかり油では十二時間で滅してしまふ。

香りの魅惑性

唇に、皮膚に、頰に、しかして、羞恥部までにも、顏料をもつて彩色したのは、古代エジプトの女の化粧法であつた。目の緣にアンチモニカの黑いコールの液で彩つて艶妖な表情にした。

乾いた瞳には性の動きがない。瞳の潤ひと目瞼の薰は男をひきつける情愛の囁きだ。エジプトの女はそれに念を入れた。

バビロニヤの女もアッシリアの女も化粧法のなかに目瞼を薄黑く脂で塗る

技巧を知つてゐた。ヘブライの女の化粧は全くエジプトの女の亞流であつた。燻香と香油と髮脂とは女が男を誘惑する尊い材料であつた。それらの香料はヘブライの女はヘブライの女の女臭——女の體臭——に均しいものを好んで用ひてゐた。これは自己の體臭が弱いのを他の香料で補ふがためである。男が女に誘惑される場合を考へてみる。そこには、心理的に香りと匂ひの吸引力が動いてゐることは、古代からの方定式となつてゐる。

舊約全書の以子帖書の第二章十二節以下には「女子はおのおの婦人の則にしたがひて十二ヶ月を經しかる後順番にいりてアハシュエロス王にいたる、是その潔淨の日を終るはかくのごとくなるが故なり、卽ち沒藥の油を用ふること六ヶ月また各種の薰物および婦人の潔淨ごとにあつる物等を用ふること六ヶ月、女子の王にいたるは是のごとし、その婦人の身より出て王の家にゆく時には凡てその望む物をことごとく與へらる」とかいてあるが、古代の女が男を誘惑し情事をなすためにいかに香料を尊んだか。

石に潤し鳥に說敎した聖オ゛ガスチンも、香りと匂ひの誘惑は、女難以上だ、と懺悔錄に告白してゐるのをみても香りと匂ひの魅惑性が窺知される。

性的嗅覺官能の胚胎

香りと匂ひの享樂は本能的であるとともに、その裏面には頹廢的な官能的な惡魔的な跳躍が潜んでゐる。嗅覺官能の惡魔的な跳躍は臭氣に對しても銳い快樂を耽美する。

これは嗅覺官能が、香りと匂ひに對して働くべきなのに、嗅覺の障礙からして宛も女の××の膣の×××口腔とか肛門を××する變態的なのと同一。

性的變奇の感覺が×××から離脫し、乳房とか足とか髮とかに愛慾の對象

が展開されてゐるのと同理で、異性の香匂から轉じて、裝飾品や靴や肌着やひどいのになると××とかに一切の嗅覺力の感覺障碍を轉向してくる。ボードレールが好んでこの惡魔的な嗅覺感覺を詩に表現した。「……濕りがちな土のうち、蝸牛群れるなかに」とか「墳墓の匂ひ闇のなかに漂ひ、をぢをぢとわが足は沼のほとりに思ひがけなき墓と冷き蝸牛を踏みぬ」と惡臭の表現によつて、醜惡汚穢な臭ひに耽美してゐる。一種の變態的嗅覺官能だ。近代人には、この感覺障碍は、たしかに惡魔的な耽美である。谷崎潤一郎の『秘密』にも、『惡魔』にも、こんなのがよく描出されてゐたことを覺えてゐる。

とくに、思春期にある女や男が積極的に性の目ざめを嗅覺官能に訴へんとすることが多い。ある臭氣に執着し憧憬して、人の前では、香りや匂ひを怖れて、人なきところで秘に病的刺戟を異性の肌着や××から求める。海理香の香りを、月經期に嗅いで氣絶したり、××の臭氣を嗅だりする。

詩人アベル・レゼエが『にほひ』といふ小詩で

あはれ物の香よ、汝はわがすべての感覺を驚嘆に置く

いま溫き部屋のなかに薔薇の花は死に迫り

汝は、ひたすらその花の名殘りに觸れて吹く

まめやかなる微風の如く飛ぶを覺ゆ

わが心を煽るために彼等の妙じき香を聲とする花あやめよ素馨よ麝香撫子よ

またその香をもて我等を微かに醉はしむる口開けし酒瓶よ

また時として我等を自失せしむる性的快樂の名殘なる物の香よ

は、いかにも性的快樂が、臭氣に匂ひにあることを最後に示してゐる。性的生活が、異常に昂進したり、正しい器官快感に滿足し難い男女に、性的嗅覺官能の生活が胚胎してゐるのである。

エロ的な香水の選定

香水が、香料が、匂ひが、どれもこれも性愛技巧になくてならない原料だ。吸引力だ。そこで香水とか香料とか匂ひを選ぶには、自分の體臭をよりいゝ匂ひにするものを以てしなければならない。健康な處女には樅の香りがするといふ。乾草の匂ひに誘惑されて、農家の娘がついしらずに男への××となる。

體臭はその階級とか職業とか環境とかで決して同一でない。それよりも食物が一に決定的な原因だ。肉食は汗と脂の發散をつよめる。ミルクと果實をよく攝るものにはなごやかな體臭だ。香水はハンケチにつけるよりも肌に直接につけるものに、とくに現代の婦人は××だとかズロースにつけて、香水と××の臭ひとを調和させることがエロティックだ。そのためには、ローションといつて香水を酒精で稀薄にしたものを用ひるのが酒落者だ。

麻の純白なハンケチなどにつけて香水の滲みになるのは、香水の瓶から直接につけて瓶の口のやにが滲みになるのだ。香水は香水吹きで必ずつけなくてはいけない。

生殖と性的分泌

背椎動物は皮膚から分泌する作用を特にもつてゐる。この分泌作用によつて、分泌物にはそれぞれ固有の臭氣がある。いはゆる體臭だ。

この分泌腺は生殖時期には著しく刺戟されて分泌物も多量になる。蛇の肛門近くの分泌腺とか鶴の下顎腺は生殖と深い生理關係がある。雄象の腋の下の腺には麝香鹿の分泌腺に似た分泌物を發散する。この性的分泌物の匂ひは印度

の性典『アンナガ・ランガ』によれば、女の性慾的區別のひとつの「象のやうな女」がもつ匂ひ——體臭——と同じだ。體がよく、肉つきふくよかで、髪の豐な、あたかも象の腋の下からながれでる匂ひをもつ性×××の强精な女を象の性的分泌物の匂に形容してゐる。象でも、麝香鹿でも、去勢すれば分泌物は停止してしまつて性慾がなくなる。

性的分泌物と香水。これを科學的にもつと研究して、現代人のために、香匂の享樂を昂上させてほしいものだ。

文化と香匂

文明の進歩と文化の進展は、人間の生活から素朴な原始的な部分をとり除いた。けれど、スカーツに帽子に裝飾品に——ことに女の現代的な粉飾では—原始人らしい好みが現れてゐる。裸體にひとしい羅衣。半裸體そのまゝの衣裳。性的生活での原始狀態。文化の進展した現代にあつても、原始狀態はかへつてわれわれの生活に滲透してきた。

古代民族が、香りと匂ひに憧憬したり好愛したのは、衣裳とかいふ肉體隱蔽道具が發達してゐなかつたからである。赤裸々の裸體で異性に接觸してゆくのは、勢ひ香りと匂ひを化粧法にとりいれねばならぬのであつた。香りと匂ひに、とくに女性が親んだのも、男から注意されたい、男から求められたいからであつた。香りと匂ひの發達と變遷の惠みには、女の性的思想の變遷がいかんなく物語られてくる。

色彩と形態とで男を眩惑する。これは十八世紀十九世紀の女の性愛技巧だ。これからは、香りと匂ひを、色彩と形態とに加味して、一歩ふかくつき進むべきである。

真夏の發汗期に羅衣ひとつでのエロ發散は單純である。羅衣を透して隱蔽さるべきを、さらに羅衣を透して香匂とで技巧すべきだ。古代エジプトの女は、熱帶地方の發汗をアルコンナ根の白い香液で、髪に口に羞恥部に滲みこませた。現代の女が、月經時に××を放置するごときは古代民族に恥じてよい。

シルレルとボドレール

林檎の腐つたのを嗅がないとうまい考が浮ばない。林檎の腐つたのを机の抽斗に入れて置いて、そつとそれを引き出して、その匂ひが外にもれてるのを嗅ぐと、あらゆる幻想が湧き起つてくる。そして、多くの詩が生れた。これが獨逸の大詩人シルレルの癖であつた。

このことをゲーテは、かつてエッケルマンに話しをしたと見えて、エッケルマンは書いてゐる。ゲーテのやうな健全を愛する詩人には、しかし、このやうな病的な行き方はあまり感心しなかつたらう。

ボドレールといふ詩人は女の髪の毛を嗅いで詩をかいた。といふのは、彼の書く詩は印度のやうな熱帶地方の椰子の葉しげる港の風景といつたやうなところが多いんだから。どうしても、植民地生れの白人の女の髪を嗅がねばならなかつた。或は黑人でもよい。石油の匂ひを嗅ぐと發動機船が梭の如くに織り交ふ港の風景が浮んできて、いゝ港の詩がたくさん出來るといふ詩人もゐる。そして「石油の思ひ」といつたやうな詩を作つてよろこんでゐる。

ボドレールがいつも膝枕をさして貰つたといふ女は、はつきりと研究家に知られてゐて、その數も二三を出ない。それは、玉の肌の佛蘭西生れ白色美人ではない。印度やアラビヤやアフリカの風景の幻想を呼び起すやうな、植民地的な女でなければならなかつた。つまり、そのやうな土地で生れた植民地育ち

の白色美人か、それとも黒人の女であればよかつたのである。

ボドレールの詩にア・ユーヌ・ダーム・クレオール（a une dame creole)といふのがある。ダーム・クレオールとは、植民地で生れた純白人系の女である。その詩で歌つてゐるのは次のやうなことである。

「太陽の愛撫に浸つてゐる、香氣高い園の、茜色をした樹木と、椶梠の樹との枝を交へる、木深き物かげに、これまで人の氣付かなかつた魅力をたくさん持つた一人の女、異境に生れた白系の女を知つた。その艶色は青きがごとく暖きがごとく、焦色髪の蠱惑の美女、襟元にかくしもきれぬ仇つぽさ、豐滿の肉體でしかもすんなりしたからだつき、歩みを運べば森の女神、ほゝゑみにゆたけさあり、雙眸にきつとしたところがある。若しこの女が光榮の國フランスに來て、セーヌ河のほとりにでも或は緑りこきにアール河の岸邊にでも來て、昔ながらの建て物に住まひをしたらどんなによくふさふことであらうか。多くの詩人の胸に千萬の詩想を湧かすであらう。そして黒人共を從へたよりも更に容易くこの詩人達を脚下にひざまづかすことであらう」

催×カクテール・抑制カクテール

男でも女でも、兩手のうちにしつかりと「春」を握さつてゐたいのだ。

すこし齢が老けてきてからは倒れかゝる「春」を、逃げてゆく「春」を抱き緊めてゐたいのだ。女が衣裳にばかりでなく、美容術に艶美術に全力を擧げてゐる。男が若返り法に憧れてゐる。有閑階級の男女の生活が直接に間接に青春の冀ひの永かれと行動してゐる。だから、强精劑が、强壯藥が、アルコホールが、モルフォンが、コカインが、阿片が、近代人の生活に必要となつてきた。

古代ギリシヤの酒神ディオニサスの寶祭では、酒神を敬し崇ぶ心から青春

の匂ひに燃えた處女も×を知つた××女も、ひとしく夜を徹してキチーロンの丘にはテーベの處女××の女の群。パルナッスの丘にはアッチカやデルッキの處女と××の女の群。ディデタスの丘ではスパルタン。各々が亂髪で、××をわづかに葡萄の草にかくした裸體で、炬火をふりかざし、處女と××の女とは抱擁して亂舞した。××と××に疲れては深い眠に陷つた。そこには、羞恥も躊躇もなかつた。たゞ、抱擁と亂舞からくる女の青春の惑溺だけがあつたのみだ。この酒神の寶祭は、女へ青春の匂ひの自覺を與へる性の祭であつたのだ。

日本海につきだした能登半島の山間の小街邑富來の町には、盛夏の宵に松原うち續く砂丘のお宮で、徹宵して男が娘の尻と××とを××しながら「くじれ」「くじれ」と群をなして叫びながらお宮の森をとりまく。娘も人妻もそこに參詣するものは女として男の群には區別がない。すべてが××を求めてゐる赤裸々の女である。團體的行動の男の群の「くじれ」に對して、女群も一團となつてこのあやしげな振舞に對抗してくる。なかには、これをいゝ沙時として平素の抑へられた××を、相思の男女が群れ狂ふなかゝら、砂丘の松原へと逃走する。くじれ祭は、男の指さきに×××の匂ひが、潑溂として生きてくる。

一切の慾望が遂げられるとしても、青春を冀ふ慾望の充足は果して永久に可能であらうか。

古代ギリシヤの女達は、女と女との抱擁と亂舞からして、青春の匂ひに惑溺した。能登半島の漁村の男女は、×××によつて青春を冀ふ性愛術を、寶祭に托して味ふのだ。

イスラエルのダビド王の處女回生術といはれてゐる性愛術にしても、或は現代流行のホルモン學說にしても、ヴィタミン說にしても、近代から現代へかけての醫學的若返り法の一切も、結局は寶祭の青春の匂ひを、主觀的に、科學的に、求めんとしたにすぎない。

性愛術、艶美術、艶笑術――あるひは寝室の美學とか――これらの從屬的な補助的な、表面化された呼稱の回生術といふのも、すべてが青春への還元か青春そのもの維持に汲々たる人間の慾望からの一技巧にすぎない。金があつて、時間があつて、名譽にかゝつて、甲狀腺のホルモンの、內分泌腺のホルモンとセルジ・ヴォロノフの外科的手術による睪丸卵巢の新陳代謝も、ブル階級の青春の匂ひを補給する技巧だ。誰もかれもが自由に許されるべきものではない。われらにとつては、それが餘りに遠い世界だ。

そこで、松葉とか松の實の食用が不老の妙藥だといはれた。紐育や倫敦で生牡蠣にジン・カクテールを飲むと給仕などは「へ……」と意味ありげに微笑む。つるどくだみの何首烏だのと安直なものが普及され易いのにのびてゆく。香料では、麝香とか龍涎香との香料が嗅覺的刺戟劑として、または斑猫からのカンタリスが××塗布劑として催×藥となつてゐる。だが、すべての纖細な巧致な素朴な性愛術 最後は××の滿足にある。すべてが手段として奇奇怪怪で目的として完璧であることに歸する。紀元前十一世紀の太古にダビド王が青春の匂ひと氣息とが若いみずみずしい娘の肌の接觸から發散し、それを不斷にうけてゐるのが若返りとして處女回生術は誰でもかなりに自由に許されてゐるのではない。つまるところは催×技巧でも至極容易なのが尊いのだ。この原理が坊間の催×藥とか强精劑とかになつた。けれど、青春の匂ひに憧れ青春の夢に不斷にのつてゆく若い男女は、いま頃そんなものをポ・ツにコンパクトに忍ばせてゐてはゐけない。催×のカクテールや、××抑へるカクテールを知つてゐなければいけない。

藥でもなければ魔藥でもない。酒と香料とを主劑にした催×カクテールである、抑×カクテールである。倫敦の Erotica Biblion Society の出版物に、×を催すカクテールとか、××を抑へるカクテールとをかなりに擧げてゐる。

酒と香料との結合は、まことに××技巧のうちでも捨て難いものと知れ。

白葡萄酒に香料

白葡萄酒を土臺にするならば、

わにぬらの球根粉　三十瓦。肉桂　三十瓦。大黃　三十瓦。白葡萄酒　一リットル。

これを混合してからよく振盪してのむ。だが、慾をいへば十五六日も貯藏して密封してからならば猶いゝのだ。

少々手數がかゝるが、精氣燦燃のもつと强いのでは、やはり白葡萄酒の土臺では、

せをで一るの根粉末　六十瓦。かすかりーすの乾皮　三十瓦。香かりむすの樹脂エッキス　二十センチ瓦。精溜アルコホール　五百瓦。蒸溜水　一リットル。

これを混合して最少限度十四日間密封貯藏してから十四日後に煮沸して大に煽をする。混合液が五百瓦の分量になるまで煮沸してから白葡萄酒にまぜてよく振盪して瓶詰にしておく。但し、のむのは男女ともに××する直前。リキュール盃に一杯か大いティースプンのひと匙。

スープに混ぜてのむ

酒の嫌ひなものにはスープに混合していゝのがある。

龍涎香　二瓦。沈香　六瓦。安息香　十三瓦。麝香　二瓦。

これを葡萄酒三鞭酒ウ・スキーいづれでもよいから等分に溶して沸して瓶

詰にしておく。それを五六滴づつ薄いスープに滴してのむ。

男だけが愛飲するシロップ

シェリーでも白葡萄酒でもいゝから土臺にして、男専用（ゼントルマン・オンリー）といふ媚しいシロップ。

規那皮　八瓦。じやんさんの根　六十瓦。しねらりや　三十瓦。おにぬらの球根　三十瓦。かるだもーむの種　六十瓦。こゝあ　六十瓦。龍涎香　一瓦。麝香　二センチ瓦。

これを煮出して滓を捨てゝ、葡萄酒なりシェリーなりに混ぜてよく振盪して砂糖シロップ五百瓦加へたもの。

女だけが愛飲するシロップ

男だけのと同じで、シェリーなり白葡萄酒が土臺になつてゐる。

じやんさんの根粉末　三十瓦。ろりていおら　三十瓦。黒色とらふる　六十瓦。からーるの乾葉　三十瓦。おにぬらの球根　十五瓦。かるだもーむの種　三十瓦。龍涎香　一瓦。白砂糖　一キロ瓦。麝香　二センチ瓦。白葡萄酒　三リットル。

右を男専用シロップと同じの方法でゆくのだ。

香料酒（ピメンタス）

手數がかゝるが效果的だ。酒嫌ひの女にでもよいといはれてゐる。

肉桂粉末　三十瓦。生姜　三十瓦。沈丁香の蕾　八瓦。おにぬら　三十瓦　白砂糖　一キロ瓦。

右を混合して五日間貯藏した上に濾過器で濾してから漏斗で葡萄酒を注ぎ込む。その葡萄酒のはいつたものに龍涎香十センチ瓦と粉末麝香を二センチ瓦と白砂糖を四瓦いれてよく振盪して用ふ。だが、仲々に強烈な香料催×酒だから、酒としてのむのではなくして、トニックとして××の直前に男女ともに用ひてよろし。但し量は少量。

媚しいママレード

酒でもなくシロップでもなく、あちらの朝飯には、きつとつくマァレードに香料の神秘さを處方した催×マァレード。

こゝあの乾酪　三十五瓦。まんなの樹液　三十瓦。おれんじの花の絞り汁　三十瓦。阿片ちんき　十二滴。ばるさむ香水　十滴。

以上の分量でマァレードにすればよい。

催　×　浴

まだ擧げてくれば限りなく催×の香料主劑のカクテールも抑止するのもあるが、省いて最後に女がいつも若々しい旋律（リズム）に交響して生活してゆかれる青春の匂ひ豐な入浴の香料で「春」を催すもの。

迷迭香（まんねんかう）　五百瓦。おりがん　五百瓦。薄荷五百瓦。黄菊の花　一つかみ。

これを十二時間混合しておいてから入浴直前に薔薇（ローズ）水百瓦位に麝香液百瓦加へて入浴する浴槽にまぜる。青春の浴みである。××の直前の入浴。

「税關」婦を語る

稅關……小金溜めた「稅關」女……女給書ペヤー……十六歳にして情を解した……倫敦のウェスト・エンド……實り子から闇者に……戰爭が始まつてから……ピカデリー・サーカスの娼婦……臥房室の自墮落……浴槽の傳授……初夜……初會の客

稅　關

パリーでも、ベルリンでも、ウインでも、むろんマルセユーあたりにでもいはゆる「稅關」と稱するものがゐる。これは、いふまでもなく人肉の「稅關」である。

ロンドンには、この「稅關」がかなりゐる。ことに、日本人好きのするアイリッシュやウェリッシュがロンドンでの日本人にとつての「稅關」になつてゐる。誰がつけたのか知らないが、ロンドンにきてこの「日本人の稅關」の媚い抱擁と接唇をうけないものは皆無といつてもよからう。

數ある倫敦の辻君のうちで、この「日本人の稅關」になつてゐるのは多く小金を溜めこんでゐるらしい。おそらく、どんなに日本そのものが不景氣のどん底にあつてもロンドンにくる日本人はその不景氣を忘れて財布の底をはたくのだらう。同じ人肉の市をさ迷ふ辻君にしても、金放れのいゝ日本人相手は、商賣として面白い。

小金溜めた「稅關」女

娼妓藝妓にお職があり姐さん株があり、自前丸抱への區別があるやうに、倫敦では娼婦は自活自營が普通だが、それでもそれ相應の區別的階級がある。ことに、ひと廣(かな)の「稅關」として、あれは「日本人相手」「あれは獨逸人專門」「あれは印度人」と札つきの姐御として、縄張りをもつやうになるのには、まづ第一に顧客筋が自づとそれを認めてこなければならない。と同時に、辻君仲間でその札つきたることを默許することが必要だ。倫敦の賣春婦くらいに、自由自

儘の商賣ぶりはない。賣春婦として相等の生活をしてうしろ暗い思ひをしないし、みせていないのは、まづ歐大陸の諸都市の娼婦のうちで倫敦が第一である。だけに、姐御たる資格の「稅關」たる箔がつくのは仲々に大變だ。

ベギーの日記には、その「稅關」の資格が與へられた時のことについて、次ぎのやうにかいてゐる。……愈々、わたしが希願してゐた「日本人の稅關」になれる日がやつてきました。前々から仲よしのメーが、「お前さん、もういいよ」と、姐御株達のひとりのメーが加勢してゐてくれたので、ついにはわたしも、「日本人の稅關」のひとりとして、羽振をきかせると思つてはゐました。こんなに早くとは豫期してはをりませんでした。

姐御株はどんなにして、ひとつの縄張りで七八年から十二三年も商賣してゐてもひとによつてはなれないのよ。

わたしみたいの馳け出し——とにかくピカデリー・サーカースに出沒し始めてから五年目で——が、と思つてゐた矢さきでしたから、明日の日がいよいよそれの公に決定されるんですから、その宵は無茶に三鞭酒をOさんに振舞つて貰ひましたよ。

翌日、日の暮れるのを期してカフェー・モニコーの地下室の方の「隅の卓」に集りました。

わたしは、二時には入浴し、乳母が念入りに身裝を手助ふ。流石に、呑氣のOさんも、その日はいつもの日本紳士の端正振りと誇つてゐらしやつた薄笑ひを、ほんとの快い微笑にして、覓にはわたしが第一公式の衣裳で化粧鏡に向ふと破顔一笑。日本紳士の端正振りを捨てゝおしまひになられる程に、わたしは若々しく美しかつたのでした。

宵の忍び足がハイドパーク公園の並樹路にちかよる頃。Oさんとタキシーでカフェー・モニコーにゆく。Oさんとは入口で別れ、わたしは地下室の「隅

の卓」にまゐりました。すこし遲れてわたしが着いた時には、姐御株八九人が待ち顔にわたしの軀をつま先まで檢分するやうにみあげみおろして「こゝがお席だよ」と大姐さん株のジエンネットさんの隣りに坐らせてくれました。

夕食が了つて、三鞭酒の盃が再び黄金色の液でみたされると仲よしのメーがわたしをみなさんに紹介した上で、ジエンネットさんが「ベギーの稅關入りを祝福する」と宣告してくれました。

姐御株の外のみなさんは、小聲でしたが力強く「イエス、イエス」とか「ヒヤ、ヒヤ」と卓をたゝいて賛成して下さつた。ジエンネットさんが、乾盃といつて三鞭酒の乾盃がされたんです。

Oさんはお人の惡い。反對側のわたしの眞正面の遠い卓で獨りで悦にゐつてゐらつしやつた。

「稅關」とか「姐御」とかいつて、たいさう權勢のあることは知つてゐましたが、こんな儀式張つたことがあつて、姉妹みたいになるとは知りませんでした。

けれど、姐さん達はみんな親切で、親身になつて何かと話してくれました。大姐さんのジエンネットさんと仲よしのメーは、わたしに手提と婦人持ちの煙草入を贈つて下さつた……

これによつてみても、倫敦の稅關たるものがいかなるものかの一端が窺はれる。

ベギーの懺悔では、稅關として大姐御になれば、ジエンネットさんの姉さんのナンシーさんなどは十萬圓からの貯金を三十年間で——十八でピカデリー・サーカスの娼婦仲間にはいつて、三十四で客取りをぴつたりやめて、あとは妹分のジエンネットやその外に四五人の娘分を追ひ廻しての娼婦商賣の女將になつてゐるのだが——のこしたと語つてゐる。

ペギーは、小一萬圓からの財產をつくつて、ペギーの眞に好きな日本人Oさんを、男妾のやうにして、大事にした娼婦あがりの女將であつた。

金が溜まつても何を苦んでこんな泥稼業を續けてゐるのかといへば、吉原雀蹈り百まで忘れぬの諺通りで、ひとたびこの苦界で「稅關」くらいまでなつた娼婦は並大抵の家庭生活や男一人を守るなんての墜苦しい生活は、性慾の變態性の昂進によつて到底やつてゆけないのである。

倫敦の、日本人の稅關には、大姐御株としては、日露戰役以後から大正四五年まで稼いでゐたジエンネットの姉ナンシーが、ともかくも十萬圓の財產をのこした。今では六十に近い老軀を倫敦の郊外近くのケンジングトンで贅澤な隱遁生活をしてゐる。もつとも、老女將で、これらのほかに、五六名は樂な老後の餘生を昔の粹な日頃を想ひ出しながら送つてゐるとか。

なかにも、×××として、その令夫人は××××××××××でありながら、その××を倫敦へ迎へずして、倫敦と東京の生き別れ十有餘年の孤閨生活をしてゐたその×××は倫敦の××××××支店詰のうちにピカデーリ・サーカス生え抜きの美娼との間に混血兒の四人もこしらえた。×××が日本へ無理矢理の歸國後も、依然として莫大な兒女養育料と自分の稼ぎとで、堂々の生活をしてゐるのもゐる。

倫敦の「稅關」としての日本人向きの娼婦は、倫敦が日本人に親しい都會だけに他國にみられない興味ある挿話をもつてゐる。

女秘書ペギー

紀元節、天長節は——お可笑しいでせう。日本の紀元節天長節がイギリス人のわたしにとつて洵に結構な日なんだつてなんと申しますと——倫敦のわたくし共にとつての書入れ日ですの。「稅關」は大概はお約束濟みで前々からお約束でもつけておいて下さらなければいゝお相手は、いくら日本紳士がピカデリー・サーカスから、ホテル・セシルの舞踊場あたりまでお探しになつても、發見はいたしません。倫敦の「日本人の稅關」は、紀元節天長節を有難いよき日だと、心から思つてをりましたの、……。……。

と、ペギーは紀元節天長節に、情人のOさんが日本流の大禮服のまゝで、ペギーの隱れ住居に立寄つた想ひ出を懷しがる。

情人Oさんとは世界大戰後に××政府から派遣された××××××所の××のひとりで足かけ十年の滯英生活中、ペギーを娼婦生活から拾ひあげた。ペギーの學問のあることや殊にペギーが獨佛伊の三ヶ國語を解するので、わざわざオクスフォード街の速成タイプライター學校に入れてタイピストに仕立てあげた。倫敦の××××會議や遠くは瑞西のジエネーブの國際聯盟の××××にまで同伴していつた。

ペギーは、その當時は××政府からの派遣××Oさんの女秘書然としていかにも優淑な英吉利婦人らしく立振舞つてゐた。それは白晝のこと、人前でのこと。Oさんとペギーは人なき處では思ひ思はれた情人であつた。閨房の夜伽ぎ怠らなかつた妻であり、夫であつた。さらに、Oは××をな×づ×な×なけ×ば、××の恍惚境にはいれない變態性のペギーの性×充足者として、十數年目にゆかりなくピカデーリー・サーカスの或るカフェーで發見した——むしろペギーにとつては神から與へられた——日本の紳士であつた。

ペギーが、日本紳士Oさんに奇遇したローマンスよりも、或は女秘書として××××氏をたすけたペギーの物語よりも、さきに變態性慾の典型として、且つは倫敦の娼婦、後に倫敦の「日本人の稅關」までになつたペギーの生ひ立

ちの奇しい生涯を物語らねばならぬ。

十六歳にして情を解した

陽光の佛蘭西、といはれてゐる位に、四季を通じて陽光の麗々とみなぎるカレーから、程遠らぬ佛蘭西の一寒村の農家に生れたベギーは、平和な村童村女達にまじつて別段の不自由苦勞も知らずに生ひ立つた。

七歳の時に、生みの母が急病で死んだ後に、ベギーは父や三人の兄弟と別れて、容貌好みと氣立てがやさしいのとで、巴里で裁縫師に嫁いでゐる伯母に貰はれていつた。

寒村から花の巴里にでてきて、何んでも物珍しいベギーは歳に似合ぬ大柄な體のぱつちりとした、品のいゝ娘として育つてゐた。十二三歳の時には十五六かとも思はれる位にまさせた顔貌と物腰で、浮氣な裁縫師の弟子達は時々情話などを敎へた。時には、ひそかにベギーの××をやさしく×れ×りされた。

伯母の家が裁縫師だけに、お得意先には巴里流行の華美な衣裳をつけた貴婦人や令孃達のあでやかな姿をみる機會が多く、家では浮氣ものゝ男女の弟子達にとりまかれて、虛榮と情事とを自然の裡にのみ込んできた。ベギーは、十六歳の春には男戀しさの情心を覺えた。その年の夏には、伯父夫婦の店の弟子の若い男と倫敦へと出奔してしまつた。

男は、しばらく倫敦でベギーと同棲しながらくらしてゐたが、もともと縹緻のいゝベギーを一時の慰みものにしやうとしたに過ぎないから、ベギーに金がなくなつてきたのが秋風のたち始めであつた。ベギーは慘々な苦勞をなめてゐるうちに頼りにした男には捨てられた。今更ら巴里の伯父の許にも歸れず倫敦で孤獨の身となつてしまつた。

勝氣なベギーは、廣い倫敦で糊口の爲めに職を求た。世話する人があつて、倫敦の目抜きのウェスト・エンドはオクスフォード街とハイドパーク・スクウェア近くの百貨店セルフレッヂの煙草販賣係の賣子見習になつた。

一二年の倫敦生活で片言交りにも英語はわかり、その上に佛蘭西語はお手のものだつた。だから、案外に店でも役に立ち、男を知つた豐艶な女らしさとなめた苦勞から生れる愛嬌とは數多い賣子のなかでも相應に客の目を惹いた。

倫敦のウェスト・エンドそこは倫敦での遊蕩的氣分の濃厚な街邑である。

ことに百貨店のセルフレッヂはリゼエント街ちかくのリバーティーとその他の老舗に比して、廉價品と嫖緻よしの女賣子とで客足を惹いてゐた。到つて下品な亞米利加式で、そのなかでも煙草販賣係の女賣子は、色眼をつかつてもいゝといはれてゐるくらいに浮々した商賣だつた。ベギーは、巴里から夢中で出奔した男との苦勞とを想ふと「もう男などはいやだ」と神妙な心持で、商賣に身をいれてゐた。でも、商賣が商賣とて、いつのまにか、自分の美貌に惹れて、いろいろの素振をみせられてゐる客の心も柳に風と受けてゐた。

倫敦のウェスト・エンド

ロンドンのウェスト・エンド。

そこは巴里のモンマルト街、伯林のイェガア街とは違つた感じがするが、ともあれロンドンでの花明柳暗の享樂が渦卷いてゐるところ。

そのウェスト・エンドちかくのボンド街、リジエン街、バックレー四辻の街々には、倫敦のみならず世界的に著名な贅澤ものやが中世紀から現今にかけての老舗として金のあるものを吸ひつけられる。そこらあたりからピカデイリー・サーカス、リスター四辻、シャフツベリ・アベニューの諸街には、寄席や、

劇場、カフエー、バアー、踊場、料理店、支那料理店、百貨店、寶石貴金屬店等が軒並みに人の心をなんとなく浮々と映るやうに櫛比してゐる。

ウエスト・エンドは斯樣の一帶である。そこには、正午過ぎには早くも辻君が盛裝して彷徨する。この邊一帶に出沒する辻君は、とかく倫敦でも、上の部類に屬するといはれてゐる。サミユウル・ラバアーの小唄の "Oh come to the west, love, oh come there with me" とは、女と肉と酒とのウエスト・エンドの一端を唄つたものである。

そのウェスト・エンドの樂園でもベッドフォード、ウェリングトン、ガリック、メーデン・レーンの芝居街に朝夕蠢集する女優やコーラス・ガールの膝もあらはに現はれやうの短いスカーツの濃艶ぶりも、黄金と戀愛と、歡樂と性慾本能と、誘惑と墮落、酒と女、淫婦毒婦遊冶郎、等々の都會的の惡の華が四季間斷なく咲き亂れてゐる人生の樂園の縮圖である。

そこに、ベギーは色の流眄と男の心をつかむ言辭の愛嬌とで生きんがための生活を展開せしめてゐた。いかに生きんがための眞劍な生活でも、場所が場所であり、それに男をいちど知つた成熟しきつた巴里女の美しさは、老夫人づれでくる慇懃な老紳士の顧客さへも、ベギーから受取るハバナの葉卷兩さしだす指先をそつとつかんでゆく。

朋輩のあるものは圍ひものだつた。情人をもたないものは全くないといふほどの荒淫な四圍で、出入する顧客は浮氣つぽいウェスト・エンドの歡樂を追ふ「情慾の獵人(ラブ・ハンター)」であつたなら、物價が高く生活に追はれがちの百貨店の女賣子は、いつのまにかそれ相應の秘密の內職を發見してゐた。

倫敦の百貨店の女賣子で、心も軀も、純なものは絕無だといはれてゐるのは各國とも同じであらう。百貨店で、買物に二三度いつて賣子が意味ありげの微笑をみせたら、それがきつかけで、週末(ウイークエンド)の遠出ぐらいはお茶の子濟々。

日本人の留學生で、百貨店のリフト・ガール、日本のエレベータアー係だが、と同棲してゐて姙娠させて大問題を惹起した珍談すらある倫敦だ。セールス・ガールのひそひそ話は、顧客の噂と樂な贅澤な生活の空想談ばかり。

ベギーは、とうの間に男との苦勞をうち忘れて男ほしさの情が、男去つたあとの獨り身のやるせなさと生活の苦しさから湧きはじめてゐた。

賣り子から圖者に

「浮いた心の殿方ばかりがお店のお顧客ばかりではございません。そりや、ほんとの通りがかりのお客樣でも、返へつて、わたくしどもなら氣をひかれるお方もありましたよ。

なかに、たつたお二人。わたくしの係りの葉卷(シガー)の方へおらつしやる常客で、きりつとしたいかにも男らしいお二方は、お一人は獨逸訛りのある紳士。いいハバナを一週間に一度きつとお購めにこられて、わたくしがつけて差上げる火でいゝ香りの葉卷を燻ゆらし默禮なさりながらお歸りになられました。

それが二ケ月ばかり續くと、こんどは一函宛お購めになられないで、毎日午後の四時半頃のラシウアハー前にセルフレッヂの出口にちかいわたくしのところで、葉卷を四本宛規則のやうにお買ひなられてお立寄りなされました。

別段に、いやらしいお顏つきもなさらず、高價なハバナをお購ひになると、默まつて挨拶をなされながら大股におかへりになります。

わたくしよりも隣りの寫眞(コダック)機係の朋輩が、

「ほんとにいゝお客樣ね」

と噂しだした頃には、わたくしは、そのお方が陳列臺の前にお立ちになられると、いままでの無邪氣さでは葉卷の點火をつけてあげられないのでした。

日が經つにつれて、朋輩達は、

「ベギーおかしいよ」

と揶揄ふのでした。それが、揶揄はれれば揶揄れるほどに、この若々しい紳士の男らしさに胸が燃え、そのお方がおみえにならない日でもあつたらわたくしの定休日の翌日あたり朝から朋輩が、

「昨日はゴルフのお裝だつた」

位の噂をされても、なんとなく嫉妬の焔に燃えさしした」と、ベギーは語るのであつた。

ある日。その日は朝からひどい霧雨。雨ふりに負けぬ氣の倫敦つ子も外出しないせいか、客足も薄かつた。閑暇なベギーは、讀みかけの佛蘭西の戀愛小說を讀んでゐた。すると、いつもの時刻に紳士が、

「今日は」

獨逸訛りで會釋しながら、葉卷を購ひにこられた。

ベギーは吃驚しながら、いつものやうに愛嬌よく點火をつけてやると、人影の薄い陳列場のあたりを見廻しながら、

「自動車の附屬品はどちらに賣つてゐますか」

きかれ、問ふまゝに答へると、

「有難ふ」

ベギーにとつては、懐しい佛蘭西語がでてきた。ベギーは、思はず昔しながらの佛蘭西語で受け答へしてゐたが、これが眞面に話しあつた最初であつた。

毎日きつと午後の四時半頃には葉卷買ひによつたこの紳士が、どうしたものかさらに姿をみせなかつた。ベギーは朋輩達と

「どうして、おみえになられないのかしら」

噂しあつてゐるうちに二週間は過ぎた。

再び、この紳士がベギーのところに現れた時には、ベギーはもう顔さへみれば、なつかしい親しいで胸が滿々てゐた。

兩人は以心傳心で、それから二三日して煙草包を手渡する時に、小さい紙片をもらつた。それは、今日八時にセルフレッヂからほど遠らぬベーカー街停車場へおゐでと、かいてあつた。

ベギーは、その夜からこの紳士と樂しい逢瀬を毎夜續けてゐるうちに、到頭難堂してしまつた。彼女は引取られ紳士の圍者となつた。ほどなく、樂々と玉のやうな男の兒を生んだ。紳士は倫敦と伯林とで機械商をして獨逸人だ。

二年の月日は矢のやうだつた。英吉利人を嫌惡する獨逸人質氣は、佛蘭西女だといふことに愛着をもつて、ベギーはかなり可愛がられた。男の兒を相手に彼女は、郊外ハムチッドでの生活はその獨逸人との愛の巢そのものだつた。

好事魔多し。二年目の中頃に、獨佛の國交斷絶。續いて英獨の開戰。ベギーは人の情愛の絆を超越した國際的憎惡のため、亦もや放浪の旅にのぼらねばならなかつた。

戰爭が始まつてから

「その時でしたの。わたしは、旦那の獨逸人と別れて獨り身の寂しさで、もらつたかなりの養育金を虎の子のやうに忘れ難みを養育してゐましたが、戰爭は始まるし、遊んでゐてもとこんどは子供は里子に預けて、チャーリング・クロス近くの珈琲店の勘定係になつて働きだしました。けれど、廉い給金であり、里子の費用はあるし、戰爭でそろそろと物價は暴騰してきました。細腕では仲々の苦難續きでした。

なにしろ、獨逸軍は勢よく白耳義境に迫り佛蘭西は眞の國難。伯母や幼

友達のことども夜な夜な獨り身の異國での耐へ難い鄕愁でした」……

ある日。いつものやうに夕方の交代時間を見計つてオクスフォード街の店店の大安賣を朋輩と素見しにまゐりますと、その乘合自動車の二階で、背後の座席から、突然に、

「ペギーぢやないこと」

と立派な婦人がいふのでせう。吃驚しながらよく顏みれば、百貨店セルフレッヂ時代の朋輩でした。メーでした。

「どうしてゐるの？」

覗き込むやうに、わたしの顏から衣裳を眺めてゐるメーは、どう踏んでも女賣子や女事務員ではない立派さでせう。恥しいのと珈琲店の朋輩がゐるので默まつてゐると、いつのまにか乘合自動車はリゼント街を過ぎて、オクスフォード・スクォアに來てゐました。

「とにかく一度訪ねて下さいよ」

とメーは——玆で降りるからとばかりに贅澤な手提から小型の名刺をだして握らしてくれました。メーはわたしが女賣子であつた時に最も親しかつた朋輩でしたし、それに例の獨逸人の家庭にもよくやつて來たので、わたしのことについては一切合財知り拔いてゐました」

ピカデリー・サーカスの娼婦

「メーもあの身裝では何か稼いでゐるのぢやあるまいか。きつと、圍者になつてゐるのだらう」

と、想像した。名刺によつて、ハイドパアークの近くの家を訪ねたペギーは、メーの住居がかなりの貸邸宅の二階で、部屋を三つばかり。かなりに整つた裝飾があり、氣の利いた召使さへゐたが男氣はなかつた。

訪ねた時刻は午後の二時頃。秋の日がまだ舗石道に陽光の影尻をひいてゐるのに、悅んで迎へてくれたメーは臥褥に自墮落な風でよこになつてゐた。

臥褥室の自墮落

自墮落な生活ぶりは臥褥室に入ると一目してわかつた。ほのかに殘るハバナのいゝ香。臥褥の脇のタオルの數々。紳士用の白羽二重の寢卷。「どうみても圍者らしい」と、ペギーは昔の彼女のありし日の臥褥室のことなどそれとなく描いた。

メーは百貨店の女賣子をしてゐるうちに、ウェルス生れの若い事務員と同棲した。メーの溜めた小金があつたので働くのをやめると間もなく、男から激しい病毒を傳染された。入院中に男は看護婦を騙して出奔してしまつた。氣立のいいメーは男の仕打の惜々しさで、その後は男を玩具にしてやれとばかりに竟に進んで春を鬻ぐやうになつた。汚れた魂も軀も腐されてゐながら、華美な姿で、瀟洒な貸邸宅の虛榮に外觀を包んでゐるのだと、ペギーとメーの話は灯がついてもつきなかつた。兩人とも羨むほどの幸福を忘れてきた女だつた。

けれど、メーにはメーらしい處生哲學があつた。

散々に處女の豐艶さを男に踏み躙られた彼女。今更のやうに貞操とか女らしさのために、エプロンかけて仕事衣つけて一日汗みどろに働いても一ケ月の生活費どころか小遣にさへ不足する開戰どきのその頃。媚びと情とをカフェーや酒場の卓で灯にまぎれて取引すれば美味しいものが喰べて好きなことができる。それでも剩してゆけるんだから、淫賣婦淫賣婦と馬鹿にできない、とペギーの眞面目くさつた珈琲店の勘定係なんぞやめてしまへといふのであつた。

男の心の眞實にふれたことのないメーは、ベギーが戰爭が濟んで再び昔の旦那が歸つてくれるなぞの約束ごとを一切否定してゐた。……どうせ純な無垢の軀でないわたしですからメーのいふやうにも、とベギーは思つた。一人の旦那よりも天下晴れて遊冶郎の一夜の園者になつたのは、ベギーが昔友達のメーの指金であつた。

浴槽の傳授

「お前さんの嫖緻よしで、この道の商賣上手になつてごらん。男を知らない軀ぢやなし、きつといゝお客がつくよ」

メーはすつかり姐さん氣取りでその翌日からベギーの軀を當分引取つた。

十日ほどメーの住居にゐた。朝夕となくメーのすることを眺めてゐたベギーは、メーが荒つぽい金を稼ぐのにすつかり魂消げてしまつた。

毎宵、はやければ八時九時頃。遲くも十二時か一時には、メーはきつと客をつれて賃邸宅の住居へ歸り、三鞭酒だボルドウーだとぽんと景氣のいゝ音。

一夜の假りの宿をすれば、翌朝は起るのがはやくて十二時。大概は一時か二時。起きぬけに臥褥から薄絹の寢卷もぬぎすてゝ大きなタオルに、肌も露に、腰だけ繼んで浴槽へとゆく。

浴槽室の扉もしめずに、朝餐を部屋越しに女中に炒麺麭に鹽豚玉子燒と珈琲だ茶だと。浴槽の女は、好い薫のする浴槽の水を撒りかけてあたゝまる。

ベギーを妹だ妹だ、と可愛いがりながらも、メーはこの朝の浴槽では奇妙にも軀を洗はせてゐた。それは、姐御が妹分に彼女達の×××の貴い訓練を×××ゐるのであつた。

浴槽からあがれば、ベギーはメーがしてくれる化粧の鏡にうつる自分の姿

に恍惚となつた。メーがベギーの軀の××××からは、紫天鵞絨の上(スリッパ)者はいたゞく五體に浸み込む快感を臥褥の上で夢心地になつた。

昔は百貨店の賣り子朋輩のメーは清々しい容貌に紅さした唇で、客の送り迎へから床入り、電話の呼びだし、××の消毒法から××××に必要缺くべからざる藥品道具等一切の知識を教授するのが日課だつた。

初　夜

ベギーがメーの魔窟にきてからざつと二週間はたつた。そのあひだにメーはベギーの愛兒の里親へ送金してくれた。衣裳を調へてくれた。當分のうちは、妹分メーとして、ベギーの住居の一室を當てがはれた。

夕刻に、乳母が應接室の食卓に用意してくれたもので輕い晩餐をとつた。入浴もそこそこに化粧を入念にして大鏡の前にたつと、ベギーはわれながらその豐艶さにみ惚れてゐた。姐御株のメーは、そはそはしいベギーの首筋をきうつと接唇しながら

「わたしの旦那をとると承知しないから」

輕く微笑みながら「女でも惚々するよ」と抱擁した。メーは、愈々でかけるにさきだつて、ベギーの手提のなかに名刺を數葉と手垢もついてゐない一磅(ポンド)の紙幣のほかに小錢を一磅ばかりゐれてやつた。

これは客張りにゆく資本だ。倫敦の娼婦は、二三磅の金は毎宵なんとしても用意してゆくのが、一流どこの風習である。この資本で、三鞭酒(シャンパン)の一本もぬいて、客を食卓で待つくらいでなければいゝ鴨はひつかいらぬ。

八時過ぎ頃。パアァーディングトン停車場ちかくからタキシーで、二人はピカデイリー・サーカスのレストラント・グロゥブへついた。

メーは滑しこんで入口に立つ給仕達のお辭儀を尻目にかけて、奥まつた食卓についた。まづ四邊を見廻はすのであつた。

ベギーは唯だ唯だメーのするところをこれ尊しと從ふのみであつた。それぞれの食卓には、すでにほんのりと酔ひ心地を現したそれ者が、馴染客らしいのと喃々喋々の眞最中。初見世のベギーは處女ではなかつたが、眞正面には顔が擧げられなかつた。

メーが三鞭酒(シャンペン)の洋盃(グラス)をあげながら、

「なんだね氣の弱い。しつかりおしよ。みんなお仲間だよ」

と元氣をつけた。意氣好みの給仕達が、三鞭酒だリキュールだボルドウーだと食卓から食卓へと運ぶ。

蘭花が、薔薇が、あかるい灯にうつつて、酒と女のための眞の歡樂境だ。

初會の客

燕尾服の一群。派手なスポーツ・スタイル。お微行らしいタキシードの連中。多勢の紳士は、メーの背後にちいさくなつて入つてきたベギーの姿をみのがしはしなかつた。

流眄が薔薇の葉越しにをくられる。囁き。私語。或はつれの娼婦に不審(いぶか)しげに訊ねてみる紳士もあつた。

ベギーは、それらの白人の紳士達には、どうしても愛嬌笑ひもみせられなかつた。

「もしや顔馴染のお方でもゐたら？」の怖しさで胸はいつぱいだつた。

どうしたことか。ベギーは、うつむき勝ちになつて洋盃(コップ)の縁に指をやつたり、隣りの食卓での談笑に氣をとられてゐた。ふいと、メーの側に色の白い日

本紳士が靜かに腰をおろしてゐた。

メーとは懇意のあひだとみえた。メーには目禮をしたが、ベギーには話しかけなかつた。

いかにも、肩巾のひろい健康さうな紳士は、給仕に三鞭酒(シャンペン)を命(オーダ)しながら、銀の煙草入(シガレットケース)から細卷きを二三本ひきぬいて、はじめてベギーに「いかが？」と勧めた。

場馴れた鷹揚さは、その日本紳士の流暢な英語と相俟つてベギーの注意を惹いた。三鞭酒の洋盃を擧げながらメーの囁きに首傾げベギーの方に意味ありげの會釋を無言の裡にした。ベギーも三鞭酒の快い酔ひに力得てなんの氣もなく無言の會釋を返した。

メーはふいと立ちあがつた。ベギーとその紳士とを卓にのこして、默つて奥の方へと消えた。

「のみますかね」

輕く上體を伸して三鞭酒をとりあげた紳士は、その顔に現はしたなつかしげは、商賣にでた初夜のベギーにも心うれしい仕草だつた。

「商賣だ」「遊びぢやない」と思つたベギーは、瞼が急に熱く涙の滲じむのを覺えた。勧められる儘にベギーは三鞭酒を呷つた。紳士とベギーはあまり口數もきかず、三鞭酒がとりもつランデブーを樂しんで。

しばらくすると、酒をのみつけぬ彼女は、口あたりのいゝ割に五臟六腑にきく三鞭酒の酔ひで恍惚となつた。なんとなく、はしやぎたくなつて、おのづと綻びてくる唇許には、嫖緻(ようち)のいゝのと天性の愛嬌とで、不斷の濃艶さが湧いてゐた。

ベギーはぢつと坐りこんでゐられなくなつた。三鞭酒をのんでゐるのが耐へられなくなつた。一途に恥氣も怖氣もなく腕を組んで勢よく街頭へとでた。

紳士とベギーはかくしてそれから二三軒カフェーやら酒場を梯子のみした。自動車にのせられた時にはベギーは酔眼朦朧として何が何やらわからない。

「歸るよ」

寝顔の頬を指先でつゝかれた。ベギーは吃驚して目をさませば、いつものやうに獨り閨房にゐたのではなかつたと知つた。

臥褥室の、厚い暖簾(カーテン)のかさなり目から射す陽光は、絨毯に倫敦の秋にはめずらしいあかるさであつた。

深酔ひの後の疲勞がぐつたりと五體に浸みてゐた。起きるのさへ物憂い。前後の正體なく寝入つてしまつたベギーは、昨宵から今朝まで、頬をつゝかれて、おこされる迄はつきりした覺えさへなかつた。

「何をそんなに考へ込んでゐるんだよ、萎れる奴があるもんか」

と、浴槽のタオルで、軀を拭き拭き微笑むのは、ベギーにとつては忘れられない初會のお客、日本紳士だつた。

萎れるにも萎れないにも、初めての商賣にでて、亂酔してどこをどうして彼女の部屋までかへつてきたのかわからなかつた。それに、馴れぬベギーには、寝卷にも着替ずに兩乳もあらはにでてゐる下着(ペティコート)のまゝでは、臥褥の衾をはねのけて、朝がへりの客の身仕度も出來かねるくらいに恥しかつた。

應接室(シッティング・ルーム)ひとつ距てゝねてゐる筈のメーの臥褥室の方でも臺所の方でも人聲も音もしない。

「恥しい」

ベギーは、いろいろと昨宵から今朝へかけての、前後の事情がわかつてきた。蘇つた彼女は、無意識に毛布に潜りこんでしまつた。

靴をはいて、上衣にブラシをかけてゐた紳士は、ベギーの「恥しい」と潜りこんだのを呵々と大笑しながら、

亂舞

「恥しい？　よせよ。恥しいも恥しくもないも今更らのことぢやないよ。お前が商賣人だつたなんて考へ込むからだ。そんなことは處女時代にいふことで、結局は酒と色と金とで苦勞する世間だ。まあそんなに萎れずにメーに元氣でもつけてもらへ」

上衣の内懐中から紙幣をだして枕許においた。×××した。しづかに、扉の外へとでていつた。

靴の音が、乳母の閉める外扉の音で消されるとなんとなく悲しくなつた。ベギーは薄すく陽光の射す部屋の天井を凝つと視つめながら枕許の五磅の紙幣に手も觸れやうともしなかつた。喪神したやうにぼつと彼女自身の淺ましい寢くたれ姿を幻のやうに天井に描きながら、昏々と深い眠りに陷つてしまつた。

「ベギー、おきるんだよ」

どかつと、臥褥の緣に腰かけられてはつとすれば、桃色の薄絹の寢卷姿にアブダラの細卷を咬えたメーは兩足をベギーの軀にのせてゐた。メーは枕許の五磅の紙幣をみて

「へえ。初めての宵からのお稼ぎではたいしたお手柄だね。あの人がね」

昨宵の客の歡待ぶりから三鞭酒の飲みぶりの鮮さをほめて、初會の客を逃りださないで、あとも昏々と眠る度胸は、いゝ度胸だと語つた。

「あの仁はね、××××の若い手腕家でMさんといふので倫敦生活十年以上でわたし達仲間で有名な伸々の女喰ひでしみつたれでさ。それが昨晩わたしにお前さんをみて「いゝ娘だね」と初めからお思召があつたんだから。まあしつかりおやりよ」

あれこれと話してゐると、扉をこつこつとたゝく、乳母が入浴の仕度ができたと告げたのだ。メーは立ちあがつた。……

……、

……

……。

ベギーは、親切な紳士の物腰しぶりを思つて、今夜もあんな人にぶつかりたいと祈つた。

尖端的アメリカ風俗の横顔（プロフォール）

女難的風景……幻を追つて……機械力のつくる風俗……宵の火事……絹靴下狂……情人心理……愛を囁く日……四月馬鹿……密輸酒……闘タク・ガール……復活祭ダンス……燮ピンと鍵……衰弱した男

女難的風景

世界各國の大都市を通じて紐育市くらい女が暴威を逞しうする大都市の生活はない。世界の大都市のうちで紐育市くらい金の威力が物をいふ大都市はない。金の威力は法律を奪ひ權力を崩壞し性の生活を極端に支配する。金の濫費も紐育市ほどにされてゐる大都市はあるまい。一夕の酒宴に何千弗の何萬弗のと、生牡蠣の料理に一粒何百弗ともする天然眞珠を隠して紳士淑女を悦ばす。三鞭酒——密輸入された頗る高價なもの——を噴水から湧出させて、その噴水塔の彫刻塑像とみせかけた裸體美人が女優であつたり、宴會後改めて第二次會へと來賓を海上の宮殿ブレーメン號やベレンガリヤ號でその儘巴里へと一切合財財布もちでお迎へする趣好だ。現代の世界の尖端的流行はその創案が巴里であつても、金の都市弗の都會紐育の第五街にわたつてきて、そこから世界へと放送されてはじめて新しい流行となる。

金があれば紐育市の生活は現代的享樂の極樂園である。金がなくても美男子であれば嬪夫生活をしても享樂してゆける。金もなく器量もなく力のない男が焦熱地獄の苦惱を味ふ。紐育はまさに金と美しさと力との大都市だ。だから女は金なくして享樂して生きてゆかれる。紐育の玄關口に天使島といふ外國移民收容所のある離れ小島がある。金のない外國移民には天使島どころか惡魔島なんだ。

女が生活の上で勢力をもつたり暴威を逞しうする風俗が女尊男卑の風習になるなんて議論するのは紐育の紐育たる所以を知らない半可通の言ひ草だ。

紐育市での女の暴威は單に男が女に對して卑下してゐる程度ではない。女難が——怖しい女難が——男に對して不斷にふりかけられてゐることを意味す

るんだ。紐育無宿のデカメロンも、マッツハッタン無宿のカルメン姐さんも、生きてゆくために生々しい爭鬪をやるんだ。

紐育で結婚生活をする。借老同穴の契りなんていふ情義はない。簡便に女が亭主の働きと金に對して性を提供するのだ。性と慾とを交換して生活させてもらふ。男は女の性慾を購ひとる。さうして女を背負つてゆく物々交換生活が紐育での結婚生活だ。金のある女は金の威力で男の性を購ふ。美男としかして××の強い男は、その道の口入紹介所の手で、小綺麗な既製洋服に人絹のワイシャツ人絹の綾下で、倫敦や東京ではべら棒に暴値れる葉巻を斜に咬えて洒落なその日ぐらしができる。

セントラル・パークの横のお妾横街。そこでは嬪夫と婢とコンドムとが仲よしだ。××することのできる愛婢は嬪夫以上に高値だ。金のない女でも容貌と愛嬌があればいくらでも贅澤に生きてゆかれる。金もなく働きもない男は一週幾弗かで煙草一服吸ふ間もなく働いても女なんて影だつて讀めない。イースト・サイドの貧民街にも、×××が冊分で五六弗もする。一週間の給料がふいだ。それで濫據にくるまつてゐるのだ。女は絹ぐるみで××××だ。

働いても働いても喰へないんではない。働いてゐれば生命だけは續いてゆく。ライト・ランチでたべてゐれば物價の高い紐育でも東京よりは優しだ。だが、女がない。少々の働きでは女がこない。手鍋提げてもなんての神妙な女は掃き溜を探しても發見らない。女は紅脂漿ならぬ棒紅とお白粉を、男のためではなく、生きてゆく女自身のために、男へ呼びかける性愛技巧の誘導にすぎない。その男が、弗をもつて女の仕放題をさせるか、生かしてゆくんでなければ、女は男といふものを相手にしない。ラブ・メーキング・ガールはゐてもラブ・メーキング・マンなんてことは片影すらも紐育にはみあたらない。

論より證據。紐育ぢや老人ほど若い綺麗な奴をつれてゐる。金は老人にな

らなくては東西ともに自由にやならない。紐育では金が戀をつくる。金が性愛技巧の一切を支配する。

幻を追つて

伊太利亞のゼノアからアメリカ三界まで金と女がほしくつて大西洋の荒波を移民船のぼろで渡航してきてから約三十年。「イタ公」「イタ公」と冷笑と輕蔑されながら穀磨きで馬糞や塵埃を吸ひこみマーケットでは果物商の配達をやり肉屋と轉々として二十いくつかの商賣に替つてこつこつと弗札ばかりを拜んでゐた。二十一歳の時に渡航して十年は默つて働いた。アッツァリコといふ伊太利名があり乍ら、他人は呼んで「イタ公」。この「イタ公」十年間に三千弗溜めた。大戰物發で購つた自由公債が籤に當つた。三百弗の公債が千二百弗になつた。五千弗ちかくも銀行の金庫に「イタ公」の預金がひそかに納つてゐた。

「もう貰ふんだ。隨分我慢し拔いた」

映畫女優の裸體姿や變な猥畫をひそかに一夜二十仙の木賃ホテルの寢臺の枕許に忍ばせて××の惡習に囚れてゐた。小金もできた。アイスクリームとソーダ・パンテンの格安の賣り店舗でも購つて女房を貰つてと思ひ思ひ惡習の自慰からは逃れることができなくなつてゐた。

いつの間にか胸の骨がいやにみえてきた。顏色が澱つてきた。朝、寢臺を離れる時にふらふらと眩暈がする。商賣してゐても釣錢を間違へて

「こや奴！　スキンダル」

と叱鳴れたり、損をしたりした。けれど、唯一の休息所木賃ホテルの寢臺や便所で人目を憚つての××は、それで五弗、これで十弗を浮かせて淫賣買ひの節約。弗札と裸體の猥畫とを眼の前においての××の惡習はやまなかつた。

いつのまにか三十年過ぎた。だが、「イタ公」すでに数ふべからざる××不能に陥つてゐたことも氣づかなかつた。

そこへ飛び込んできたのが父親が伊太利人で母親がヴァジニア生れのニグロの名だけは立派カザリンといふ莫連女。「イタ公」の四十二に對してはまだ充分若い二十八。その時は別しての定職はなかつたが前身はブルックリンの安夜鷹。どこできいたか「イタ公」の小金を狙つての女氣。「イタ公」有頂天になつてロハでカザリンがもちかけるのに全速力をだした。だが、別して面白くもおかしくもない。裸體美人と弗札を前にしての××が彼の極樂だつた。

凄腕のカザリンは二ケ月で「イタ公」の懐中をすつかり捲きあげてどろん。「イタ公」は毎日ぼんやりポケットへカザリンの寫眞を入れて口笛吹き乍ら紐育の街といふ街をうろついてゐた。いつかそれも姿を隠した。瘋癲病院の施療室でやつぱり口笛を吹いたり、時には人前も憚らずに××を昔のまゝに……。

三十年の零細な貯蓄。三十年間の働き蜂のやうな勤勉なる勞働。三十年間の裸體美人と弗札と××。しかして、口笛吹きつゝ瘋癲病院で空をぼんやり眺めてゐるのは、一體何十年これから續くのか。女難の「イタ公」は、かくして大紐育の一隅で幻を追つて生きてゐる。

機械力のつくる風俗

アメリカは女尊男卑の國だといふ。大間違ひだ。アメリカの女は偉張つてゐるといふ。さうぢやない。偉張るのを通り越して女性の難が男にふりかゝつてゐるのだ。女は男を殺しつゝあるのだ。アメリカの女と男との風俗が、西洋全體のものだと思へば、それこそ大間違ひだ。

現代アメリカの風俗文化のなかに舊い大陸西歐諸國民からの——とくにアングロ・サクソン民族からの——傳統的な遺傳的な共通した風俗文化があるとすれば、それはいはゆる西洋諸國に共通した西洋的なものである。決して現代アメリカを語る風俗文化ではあり得ない。現代アメリカには現代アメリカのみがつくつてゐる非西洋的な風俗がある。それを看過してはいくらアメリカを裸體にしても無益だ。

紐育市の地下鐵道は、世界のどの地下鐵道よりも、規模の大さ、速力の迅速さ、運搬人數の多いのでは、敗をとらない。これこそ世界一だ。地下鐵道が急行線をもつてゐるんだから紐育式だ。

この地下鐵が紐育市の三主要區域のマンハッタンからブロンクスとブルックリンの二手に地下に蜘蛛の巣を張つてゐる。規模と能力とは一見して現代アメリカが機械力と能率本位とで堅められてゐることが窺はれる。快駛する地下鐵に對して路面電車ののろのろした情調も捨て難いが教會詣りの婆さん爺さんか不具者の乘物となつて前世紀の遺骸を曝してゐるに過ぎない。新宿から東京驛までノン・ストップといふやうな地下鐵の急行線は上街コロンビヤ大學前あたりから下街タイムスの四辻まで自動車をとばしても四五十分かゝるところを十分足らずで一氣にぶつ飛ばして快駛する。朝夕の勤め人の混雜時間は、文字通りの暴風雨的でショップ・ガールもタイピストも大の男のなかにまじつて肱を張り腰をふつて割り込むのである。夕刻、紐育のさかり場タイムス・スクエヤあたりからのつた水兵五六人。混雜時間のなかを若いオフィス・ガールに押し合ふのを勿體の幸ひと寄り添つて顆の匂ひを嗅ぎ羅衣の××へ××して嬉々と猥らな惡戯。時をり暴行凌虐事件が停留場から停留場との間で僅に三四分といふ瞬間に二人も犯された。スピード時代風俗である。

スピード時代風俗は機械力のつくる風俗だ。機械力とは人間力否定である。人間力の否定はすべてを格一的にしなければならぬ。統一的にしなければ

能率が乗つてこない。標準化しなければ機械力の文明は成立しない。機械力によるスピード時代風俗の現代アメリカはすべてが格一であり統一であり標準化である。

靴一足、靴下一足、ズロース一對、シヤツ、下着、既製洋服等々すべてが番號によつてサイズが一定されてしまつてゐる。なかにも、既製洋服は機械文明の生んだ機械力的風俗の標本である。

既製服はその昔百四十二年前にフランス革命直後のごたごた騒ぎで四民平等になつた巴里人の庶民階級が急に階級のない社會へ顔をだすので着衣の大改革が齎された時に、フランスでは需要に對する供給が不足で既製服なるものが始まつた。このストックのできる仕立物がアメリカでは加洲の黄金發見とともに始まつた。紐育の百貨店開祖メーシーは既製服を大中小の三種に區別して、誰がとび込んできてもすぐと袖を裁ち裾をつめて女にでも男にでも新しいのを一時間の間に仕上げてる。他の品物を購つてゐるうちに着換へて店から送りだしたので大儲けをした。

日本で男のカラーと足袋とが大中小が番號で一定してゐるのみだ。機械でものを造つて機械的に販賣する現代アメリカではすべてが既製品でサイズが標準によつてきまる。衣服のスタンダリゼイシヨンは人間の頭までを標準化する。されば、現代アメリカの風俗は、一面から觀れば、紐育の百貨店がつくる百貨店風俗であるともいへる。

理髪舗へゆく。電氣バリカンがヂイッヂイッと朗に微なエンジンの音たてて頭髪の上を滑つてゆく。床やの若衆は手を僅にバリカンの舵をとるが如くに動すのみ。そこに人力の表現が必要とされない。電氣ブラッシユがスウィチひねれば頭を掃除してくれる。若衆が椅子の臺下のボッチを靴尖で踏むと、鏡の下がぱつと口あいて乾いた新鮮なタオルがとびだしてくる。いちど使ふと穴へ投り

込む。別の洗濯場へゆくのださうだ。すべてが電氣による自働裝置だ。

髯を剃つてゐる短い間に爪がマニキュアー・ガールのやさしい手で磨かれてゐる。ズボンがプレッスされてゐる。靴をニグロの奴がその面顔よりも黒びかりにしてしまふ。帽子がブラッシュされてゐる。理髪舗の入口の扉は電氣仕掛でぐるぐると間斷なく廻轉して人の手で押したり引いたりの必要がない。

活動寫眞へゆく。切符賣場に女の子がみえない。「お金をおいれ下さい。切符がでます」とかいてある。いれると切符がぴよこんと瓢輕にとびだす。熱湯が、冷水が、ホットエッーが、クール・エッーが、ネジひとつの開閉でお誂へとばかりに供給されてゐる。すべてが機械の力と分業の能率とで割りだされてゐる。機械力の風俗はかくして賣××まで機械化して、リグレーのチッインガム噛み噛み天井をみながら隣りの小部屋に待してある客數を暗んじ乍ら「ユウ・フィニユシ？」。××までがショト・タイムのビイス・ウォークとなつてゐる。

男女の風俗も生活も、弗と兩換すべき貞操と情愛とがあるだけだ。情調も意氣も張りもない。戀愛と性愛のシンプリハィイズは現代アメリカの風俗の象徴でないと誰が否定することができやうか。性と生活。愛と金。戀と弗。男は生活に金に弗に女に滿足を與へなければ、すべてが悲劇になるか喜悲劇に了る。

宵の火事

カン、カンカン、カン、

　カン、カンカン、カン、

夜の靜けさは聽き馴れない鐘の音で破られた。

何事かと思つて、翌日の下調べに餘念のない時、鐘の音に誘れて窓際まででてみる。間の延びた鐘の音が幽闇な半月の空を流れ、火のあかるさが花とし

て空を半燒に焦がしてゐた。大學の靈庭でがやつく叫聲が微に傳はつてきてゐた。

春はまだ淺いが夜風は寢卷ひとつの肌に快くふれて火事見物には寒くもなし暑くもなしの好時節。大學らしい。でかけてみるか。みまいか。お江戸ならぬアメリカの一隅まさか火事とて寢卷ひとつでの彌次馬ぶりはお許しあるめい。周章てカラをつけ衣裳調へた頃には、火も消えるのだらうと心配しいしい服をつけた。アメリカへきて始めての近火見物。ましてや火の手は大學の構內。お江戸育ちの彌次根性むらむらと胸を衝いた。

急に臨んでの早業。外套ひつかけて玄關へと階段おりると下宿の主婦の早言葉もそちのけで往來へ飛び出せば、カンカンカンと半鐘ならぬ鐘の音がさらに烈しい。火事はたしかに大學の殖物。ゆくべしと駈けだせばなんとはなしに「やァい」と江戸の積りで一と聲張りあげてみたくもあつた。

往來には人影かさなつて早口に囁つてござる。異人が口ほどにもあせらぬ態度が小面憎い。四五町がほどは息もをつかずに駈る。裏門あたりから兩側の芝生の廣場には自動車が列をつくつてゐる。ブウブウの警笛鳴らして自動車の縱隊は大袈裟なり贅澤なりお抱へ車で火事見舞か見物か。彌次馬の學生に伍して校園に入れば、火はまさに學生倶樂部のあたりから擴がつて、圖書館心理學實驗所も危げにみえた。

まづひと息ついて、遠見と洒落てゐれば、學寮の大學生連思ひついたり置き古るしのホースを消火栓につないで消防隊の演習よろしくの有樣だ。うようよとするのみ。祝融の神樣は、お遠慮なく魔の手をひろげて、建ちならぶ建物は金的的中で、火勢は落ちつかない。

學生のホースからのろのろと水が罷りゐでたる頃には遲れ馳せながらの自動ポンプが唐紅の不動明王の怒るがごとき火焰へと白い銀の筋を撒きあげてき

た。ヘルメット帽の消防手の活躍には勇みの哥兄達の風貌も探してもみえぬ。

學生倶樂部はみるみるうちに棟も横なぐりにどつと搖れて落ちた。餘勢は續いて建ち並ぶ學生食堂へと黑煙と紅蓮の火焰を吐きつけてゐた。「まづ消せないね」と空にむつくりと突いて聳へたつ大建築の累卵の危きを獨りぎめにして一服やりだす。あたりはがやがやと騷ぎの海。老楡の樹の下で腰をおろした。集まつてくる大學生や大學街の人々も、遠卷きにして、火の海へとびこんで家財でもとりだす氣色もみえない。それでも、健氣な大學生が、三々五々消防夫に混じつて、あれこれとだしてゐた。

そこらひと巡りしてと腰をあげて圖書館の裏側の大學小路にゆく。人混みから割つて顏だせば、外套でかくしてはゐるが夜目にも際立つて艶麗な寢卷の裾をこぼした婦人學生達の一群。手に手に寫眞機さげて笑ひさざめく姫御前。これはめつそうなと寫眞機の暗示あはすに吃驚した。ヤンキイ娘の火事見物まさに斯くの如しと肝膽が拔けんとすればその突端。新しい火勢は、毒々しい焰の舌を逞ふして、學生倶樂部の二階窓から三階窓から噴きだした。

蝟集する大學生の群。これはまた天外の野放圖。「美しいぞ！」と。お世辭にしても凄い。姫御前の一群は香たかき烟草ふかしてジャズの調子。「はてヤンキイは火事に對しては浪漫的耽美主義者だなあ」と驚き果た。

ここでかれこれの暇潰しに、思ひかへつて友達のゐる學生倶樂部へといそいでゆく。玄關口から校園へと椅子をはこぶもの毛布洋服抱へて駈るもの。亂雜だが火の手のずんずんと伸びるのをみて用意だつた。階段へと急げば、中途で三四人の學生が大トランクを持て餘してをり、むらむらととはこの時。火事には馴れたり、火はたしかにのびたり、友よ急げと五尺の短軀にジャップが火事は花の江戸育ちの氣質で呶鳴つた。

煉瓦の大建物だけに崩壞する音響は凄まじい。火足はのろい。どつと人波

が崩れて遠巻きにと退く。遽に人聲があがるをみれば自動ポンプの一臺が見事遲かりし由良之助でも吐き出す水量正に八龍大王のそのごとくに、南無三火は消えるかと消えるのを惜けげに思ふのも異國での火事見物だつた。突然、突如、ピヤノの烈しい演奏。ふりかへつてみれば樹の下におかれたグランド・ピヤノの前に斷髮の婦人學生狂はしげに演奏してゐた。人は聲をあげて迎へた。家財とりだす大學生は一段の元氣をだして亂調子からリズムへの躍進だ。なんのことはない火事場でピヤノでジヤズの演奏。進軍喇叭ならぬジヤズの突擊曲。人の力は、人の勢ひは、今一段と燃えあがつた。

その歸り道。驚くは再三再四。寫眞機手に肩に三々伍々學生が婦人學生をエスコートしながら裾の長い絹物の寢卷を脚さきにひらつかせてゆくのだ。駛る自動車にも婦人學生が外套の襟をたてて大學生の胸に髮をふかく埋めてゐるのだ。耳許では囁くに「羅馬に入つては羅馬に從へ」と。獨りぼつねんとかへる。話聲がする。ふりかへれば若い學生達。

「學生倶樂部はもう舊かつたからなあ。新規に建るさ。金は集るよ」

と。いつぞや教授につれられて、倶樂部の教授食堂でお馳走になつたが、その喫煙室と圖書室だけでも惜しい氣がしてゐたのに。金はすぐ集る。新規に建るさ。お國柄の大きいだけに、火事會話も景氣もいゝ。自暴になつて、獨り口笛ふきながら、宵の大學街の街樹路をゆけば、

「ハロ！　Sかい？」

追ひ越しがけに聲かけられた。宵闇にもわかるにつこり顏。女は黑い外套に小柄な丸顏をみせてゐた。眼に頷いて手は握りあつた。エレンはやさしく、

「奇麗な火事……」

婉然とした。同じ研究室にゐて、氣のあつたエレン。ブラジルからきたイスパニア系の若い婦人學生。でもやはり「奇麗な火事」と。頗るエロティックな宵

の火事だ、と思ひつゝエレンを街樹路の內側へと誘つて腕をとつた。

絹靴下狂

亞米利加通が曾て現代アメリカの男女の風俗を評して「……女は絹にくるまつて、男は襤褸にくるまつてゐるといふのが、これがいまのアメリカの文化」と喝破した。

まさに現代アメリカの女はねても覺めても絹だ。絹でなければ夜も晝もあけない。絹肌身につけたさに女は男を求める。男は女に絹さへ與へてやれば女が摑める。絹は人絹であらうと天然絹であらうと差別はない。

都會の女は上は富豪資本家の令閨からお嬢さまから下は召使烟草工場やフムネ工場の女工まで絹を肌につけねば承知しない。獨身ものの女はお蠶ぐるみになりたいばかりに朝からオフ・スで働く。宵からは時々は警官のお手入れのあるライネス・ロー・ホテルあたりまで働く。日本人支那人とみれば嬪夫と相棒になつて美人局をする女もゐる。それといふのも嬪夫は汗せずして絹のワイシヤツに絹の靴下絹のハンケチと生活したい。女は絹の肌着、絹の上衣、絹の靴下につゝまれたいからだ。絹の靴下は上下ともに好れる。低廉であるし、簡便な贅澤品でもあるから。

絹の靴下と膝小僧のでるスカーツ。これくらいエロティックな匂ひを發散するものはない。とくに華やかな靴下止が白い太腿にちらつく。地下鐵の腰掛で時をり懸命にスカーツの裾を膝小僧へと手で注意してもまくりあがる。新聞紙よむ男が、釣皮にぶるさがる男が、遠目に近目にちらちらとその女の膝を氣にする。氣にする筈だ。膝頭のすこし上にはばつちりと張りきつた太腿の肉に派手なピンクの靴下止めがめりこんでゐた。女は知つてか識ずか、三文戀愛小

戯の普及版に夢中だ。

絹の靴下もいゝが、縦絲横絲一筋がぬけてゐても彼女ははかない。縫ぎのした靴下は屑籠へお拂ひ箱だ。倫敦の女は霧がたちこめてくる頃にはよく純毛の靴下をはくが紐育の女は大雪でバッスが停つても薄手の絹靴下。伯林あたりの下女が木綿のをつけてゐても紐育の下女は黒奴の下働きまでが人絹にしても絹靴下。紐育では絹靴下と女とは前世からの因果だ。

女の肌着のペティコートが絹。この頃ではペティコートを肌につけてゐるのは洵に淑な女に限る。スリップインといつて薄い絹の胴だけの肌着。肩からは巾狭の紐で釣つてお尻の方へ餘り布を××の前でフックで止めるといふ肌着と猿又との兼用。それにガータで絹靴下。

「こんど何日遣ふの」

と淡紅色の靴下を濃青のガータでとめながらまだスリップインさへ肌につけてゐないマリアといふホテルからホテルへと稼ぐ女は、婉然として顔をあげた。

「いつになるか。また電話をかけろよ」

といつた時に、マリアが枕許の弗札を淡紅色の靴下とガータとの繋ぎ合せ目にいれた。靴下はときに紙幣入れになる。もつとも、太腿もマリアの稼ぎのためには……。

絹の靴下と膝頭は脚線美のエロだ。爪磨きはついでに足の爪を磨く。ペディキュアは足の爪ばかりでなく膝小僧まで磨く。磨かれた膝は白絹、ピンク絹、肌色絹の靴下でつゝまれてゐる。紐育の盛り場ブロドウェーですんなりとのびた素脚に茜色で繊細な線を描いた肉の靴下の女をみたことがある。裸體靴下といふやつだ。日本あたりのモガが麗々しくやつてゐるびかびかの薄絹の靴下は光澤こそいゝが脚の形好がわるい。むしろ脚の形好なぞ一足とびに蹴飛ばして、これみよがしに素脚に靴下らしく彩ることだ。

裸體靴下に對して素脚靴下とでもいふのだらう。血みどろの豚の腸詰を思はせるやうな激しい肉感的な彩りのバロースタッキング以上の露出靴下だ。素脚靴下をはいてはならないとお觸れはでてはゐない。穢れたズロースの裾をちらつかせるよりも餘程耽美的だ。冬は寒からう。真夏、兩腕の不恰好な種痘の痕跡をみせる位なら思ひ切つて素脚の靴下にしたがよい。誰でもみるから。

情人心理

事實はともあれ形式上では、アメリカでは男が女に結婚を申込むのだ。紐育あたりの獨身女が生きてゆくためには挑發に挑發でこれでもかこれでもかと突こんでくる。が、さて同棲しませうと、男からいふべきことになつてゐる。

男が女に申込む結婚。それが原則だ。だが、四年に一度くる閏年はリービ・イヤーといつて女から男に結婚を申込んでいゝ傳說がある。女から男へと申込む。これこそ積極的に女の××を開放した門戸開放の年だ。

現代アメリカの女は戀愛的技術にかけては露骨とテンポーの迅いのでは世界で有數の技能家である。男もそのより露骨なことを欲求してやまない。それでゐて結婚生活は日本のやうに單純化されてゐないのだ。

結婚までの戀愛的プロセスを複雜化し露出化して享樂することは英吉利や獨逸の比ではない。倫敦の女は妻へといそぐ。伯林の女は世話女房にすぐとなつてしまふ。巴里の女は××してしまふ。そこへゆくと、現代アメリカの女は、あくまで、情人として享樂することができる。

情人には、即刻お要求とあつても拒絶しますよの辛辣さがほしい。現代アメリカの若い女にはそれが充滿してゐる。けれど、彼女達は情婦にはなれない。情婦は苦勞を頒ちあつての氣持がなくてはなれない。情婦には倫敦の女

や伯林の女が向く。巴里女は姿だ。情婦は、ときには、お小遣ひぐらいは融通するんだから。

ヤンキイ女は、情人として、戀人としてなら享樂できるし、その技巧最上級。情婦ぢやないから、××にかけては、から未通女である。

よくアメリカの女の甘い軟い親切さに馴れて日本人あたりが「これなら物になる。これこそ時期到來好機逸すべからず」とひとあたりあたつてみる。ところが、彼女ぐんぐんとひきづり廻しておいていざとなれば「あたし、そんなつもりではなかつたのよ」といかにも鈍感な性愛感受性をほのめかすのだ。

この鈍感な性愛感受性の女が、情人から情婦の域に一歩踏みこんでくると怖しい。怖るべき嫉妬は罪惡を犯してもいゝ女になる。東洋人には、この情人心理と情婦心理との差異が、どうしてものみこめないから、悲劇に終るのだ。

アメリカの現代男は情人心理をつかんでゐる。婚約した男女が、婚約指環をとりかはしてからは、露臺で夕闇につゝまれ相愛の男女の抱擁かくのごとしと、道ゆく隣人にみせつけてゐる。

紐育の街端れで、いましがたドラック・ストーアからでてきた浮氣ぽつい娘。だが、商賣人の街の女ではない。素人娘だ。たしかに忙しげに舗石道を歩いてゐた。それだのに、ふいと、街樹路の側でバッカァードによりかゝつた若いスポーティな男からウインクルされて、忽ちに自動車にのつた。友達でない彼女と彼。すでにドライブしてゐる。驚いた。これが情人心理の享樂への序幕だ。見ず知らずの男でも樣子がよければ、それでいゝのだ。それからのあとが複雜であり難色があるのだ。

愛を囁く日

植民地の新天地。女が男よりも少數だつた新しい國。男女同權の國。傳說と歷史の新しい風俗の現代アメリカは、舊大陸の西歐諸國よりも、いやに傳說を尊ぶ。

デモクラシーだ。四民平等だ。自由だ。いろいろと叫ぶ癖に、シルクハットと肩書とを悅ぶ。ドクタァーとかプロフェサァーとかなんとか肩書をつけて嬉しがる。女はすべてを男からと誇りげに期待してゐる。何が何んだか見當のつかない現代アメリカにゆかしいのは「愛を囁く日」があることだ。

「愛を囁く日」とは二月十四日のヴァレンタイン・デーである。

なんでもこの日は隨分遠く昔羅馬のクロデ゛アス帝の時代に羅馬教に反抗して新しいキリスト教を信奉してクロデ゛アス帝から虐殺された聖ヴァレンタインなる偉い殉教者を記念した日が二月十四日。この二月十四日にはまつたく見ず知らずの若い男女が、思ひきつて甘い密の戀文をかいて切なる情と思ひを告げていゝ日だ。あまり親しからぬ磯の鮑の片思ひを打ちあけてもいゝ。男から女への原則ばかりでなく、女から男へと。いづれにしても、天使の忙しい一日だ。

若い男女はクリスマス・カードみたいに綺麗に刷つたヴァレンタイン・カードを贈つたりする。中流以上の家庭で若い娘があると招待會をひらいてお馳走したりする。夜更けまで假裝舞踏會をする。

都會では、街の四つ角あたりでかくれてゐて、若い女に不意に爆竹をならしたり動物の鳴き聲で惡戯をする。若い娘を擽つても、「ヴァレンタイン」とひと言いへばお道化だとなる。

だが、この「愛を囁く日」にヴァレンタイン・カード一枚で痛馬みたいの現代ヤンキイ娘のなかから好きな女をつかんだのがゐるかどうか知らない。

四月馬鹿

南部のヴァジニア洲とノース・カロライナ洲の境。ごく古典的な、現代アメリカのスピード風俗時代には相應しくないゆるやかさがある。そこの大學で半年ばかり、南部の暖いところで神經痛を加療しながら勉强してゐた。

夥しく咲き亂れた忍冬の蒸しかへすやうな强い匂ひが鼻をつく。四月もいよいよ薄紫のライラックの花盛りとなつた。寒さも消えて些かもない。

大學街をすこしドライブして郊外にでれば、遠く丘から丘へと靄がかゝつて、柔い土にはサフランや水仙がやさしく色づいてゐた。それが春だ春だと自然が鈍感なものに春のおとづれを知らすやうに眼に映る。

空に浮ぶ雲にも、連なる林にも、土の色さへ融けて、目を衝く春の强さがみえた。栗鼠は郊外の到るところにゐた。

春。四月の第一日は「みんなが愚鈍になる日」だ。エープリー・フールだ。異國の風習に物馴れぬものにとつては冗談と眞劍の境目がぼんやりしてゐる。

朝餐のあと大學の食堂から街邑へ買物にゆく。歸つて玄關口にたつと郵便受の函の上にピンで一通の手紙がさされてあつた。

みれば思ひがけもないL教授のお嬢さんの麗しい手蹟だ。午後二時頃下町のウインドシェードの入口で待つてゐて下さい。父と一所に行つて買物をしたいから細々と約束の時間と場所とが指示されてゐた。

ともあれ陽の輝いた暖い日。早速髭剃したり、シャツをとりかへてダッシュンへでかけた。

ウインドシェードといふのはこの市街で一番大きい百貨店だ。入れ代り立ち代り出入する客の數は夥しく目狂しい位。大急ぎで約束の時間には一寸前。

しばらく立つて待つてゐたがL教授もナシサァーの妻もみえない。すこし早かつたかと、飾窓の側で立停つて待つた。やつてこない。街路を横ぎつてドラッグストアで咽喉を潤しながらナシサァーを待つた。かれこれ三四十分も過ぎてしまつた。たうとう二階三階まであちこちと探してもみた。戻つて亦もや入口で、かれこれ小一時間も、織るやうに交錯する人通りの繁いところで待ちあぐんでしまつた。

まさか、お嬢さん約束の時間を忘れたんでもあるまいかと念のために自働電話で訊ねてみると、いつもでてくる黒坊の召使。「今日はエープル・フール・アイ・アム・ソリー・サー」。電話は切れた。

間違ひなく今日は四月の第一日。萬愚節だ。午後の眞盛りを二時間近くも待ち呆けを喰らはせられたのだ。美しいひとの惡戯ではと愚なことを興がるその日に憤慨しても始まらない。早速とつてかへしてL教授の宅へゆけば、先生だけが本を讀んでゐた。間もなく夕餐だ。忙しくなくば話してゆき給へ。娘がそのうち歸宅するだらう。娘などにかつがれては大學生の佶券にかゝはるぜ。と、教授の話に、奥さんも、ニグロの召使まで笑ひ興じてゐた。

まあ晩餐のお馳走にでもなつて、と平素の親しさに馴れてトイレットに往く。戻つてみると客間には教授も奥さんも姿がみえない。臺所の方では黒坊の召使の騷つた聲さへしない。これはと思つて玄關にでてみれば、くる時に玄關の前庭の芝生にあつた教授の自家用の車がない。外出したのか、と扉にかけた自分の帽子をみれば何かと小さい紙片が挾んであつた。赤の色鉛筆での殴りがき。際々お氣毒だが急用のために今晩は夕餐はあげられぬからそのつもりで、エープリー・フールと。またもや一杯喰らはせられた。

いくら四月一日が人を愚にしてもいゝとはいひ乍ら座興もこんなになつてはと腹の蟲が納まらなかつた。アメリカ人て奴はどこかにまだ無邪氣な野性

があるからこんな日があるんだらう。

翌日。大學の研究室にゆくと、大學の創立者トーマス・ジェフ〻アーソンの記念像を白い幕で夜中にひそかに包んでしまつて、そこに只今建造中と貼札をしたのが、その春の四月馬鹿の秀逸だつたときいた。

密醸酒

現代アメリカ人はまつたく矛盾した國民性をもつてゐる。麗しい爽朗な一面が輝いてゐる。その裏には驚くべき暗黒面がまだある。

「市俄古に紳士なし」との諺がある。この反語として「市俄古に淑女なし」も眞理だらうか。紐育につぐ大都會市俄古は女と酒と賭博と犯罪の坩堝である。大産業の中心都市はそこに世界の運命の獵人を蝟集させた。移民は蟻のやうに蠢動した。潑溂たる現代アメリカの赤裸々の姿は市俄古の夜に映出されてゐるのだ。

賣笑婦の禁止。性業の嚴罰。禁酒の勵行。白い性慾奴隷の追放等は現代アメリカがほんとに懸命になつての社會政策的な事業だ。けれど濱の眞砂は盡きはせぬ。人間の性がそれを求めてやまない。極端な警察力の取締と極端な嚴罰とは極端な曲藝を工夫させた。

賭博と殺人と、酒の密賣と、阿片とコカインとモリフ〻ンの常用は、現代アメリカの暗黒面に躍つてゐる。

禁酒法ができてからもう十年になつた。酒の氣は微塵もない國である筈だが、大都市の到るところで、酒がひそかに且つ公然に販賣され、酒がのめる。

黒奴の踊り子ジョセフ〻ン・ベーカーの生れ故郷セントルイスで經驗したが、公園の裏通りの堂々たる邸宅の地下室は白晝でも眩しい灯のもとに、阿片を吸

つて夢の國に遊ぶもの、ポーカーに耽り乍らウ〻スキーにブランデーに醉ひをとつてゐるもの、羅衣ひとつの魔の女群が抱擁に接吻に亂舞してゐた。

早川雪洲の演じた「天晴れウ〻ング」ぢやないが市俄古や紐育桑港等の大都市の支那人街にはアメリカ人の耽溺心理を唆る異國情調な魔窟が群在する。だが、警官の手入れは殆んどできない。馬鹿っ票といふチハー賭博とかシイコの支那賭博が博打好きのアメリカ人の性根を掴んではなさない。

大ホテルの黒奴給仕や急行列車の列車給仕は、まづ公然の秘密の密造酒の取次ぎだ。その昔、南部のテニシ〻ー洲の山間地方で獵師や百姓の手で密醸された玉蜀黍のウ〻スキーはアメリカものよりもカナデ〻ヤンウ〻スキーやスコッチものよりも格段の香氣と舌觸りとをもつてゐた。販賣するために醸造するのではなくして、山間の都塵離れた住民達がひそかに醸造したもの。それを街邑の商人達と衣布や烟草靴などと物々交換するのに月明の宵あの丘の老松の下でといふ譯から密醸酒を月光の酒といはれてゐるんだ。現今のはそんな上等ものぢやない。まごつけば失明するメチールものさへ飲む。

ホテルの廊下の曲り角。黒奴の給仕が、

「お用はありませんか」

と洋袴の背ポケットに忍ばせた角瓶をちらつかせる。水みたいのウ〻スキーで一瓶五六弗から十弗もふんだくられる。飲めないとなれば猶更らのこと飲みたいのが人間の弱味だ。

都市の薄暗い街路の角。カーテンのしまつた空家か廢家みたいの家の地下室はきつと隱れた公然の酒場だ。しかし、ポリスが巨大な體でよくその角で監視してゐる。もつとも、ゆきわたるものさへ掴ませれば……。

富豪の家庭や倶樂部の地下室の酒倉には、うようよと極上ものが貯藏されてゐることはいふ迄もない。

亜洲の大學街コロンビヤに友人Tを訪ねていつたのが、樅や楡に氷柱がイルミネイシ。ンのやうについてゐたクリスマスの前日。Tは酒をすこしたのしむので、早速その宵には急製燗燒と酒落れて、Tのとつとき日本酒もウ。スキーも、二人して平げてしまつた。

日が暮れると、二人は沙市からの酒の空瓶を嗅いでゐた。吹雪の街邑には灯が凍つてゐるのを窓の硝子にみると、Tも耐らなくつて、外套ひつかけると一と駛りにでかけた。

どうせ禁酒と性業禁止の嚴重勵行が保たれてゐる大學街だけにどこに密造酒の穴があるんだか道のTにもわからずで、Tは遠く太平洋岸の沙市の日本人へ頼んで醤油と一所に日本酒を送つてもらつてゐた。沙市の日本人街では麹と酒壺が日本人の藥品として販賣されてゐる。

寢臺の緣に腰かけて新聞と雜誌とを手あたり次第に讀み散してゐた頃に、ははと息切つてTが歸つてきた。外套を脱ぎもせぬうちに角瓶を……焦茶色の液體。ウ。スキー。

ところが、色だけで水だ。艶々しい液體にはウ。スキーの匂ひこそある。だが、その味は、舌に押しつけても、鼻に押しつけても、ウ。スキーには程ど遠い代物。僞物だ。

Tは大學街の町端れの黒人街でムーン・シヤインはないかと、いくらか掴ませて煙草屋の親爺に訊ねた。教はつた通りに一膳めしやの給仕にもいくらか掴ませた。黒奴給仕は調理場の陰で、「これならどうだ」と瓶から口移しにぐびりとやらした。Tは雀躍してポケットから金を掴んで掃つた。「紙につゝまないと」といつて給仕奴思はせぶりたつぷりで料理場に入つてゐた。新聞紙に包まれた瓶がTの手に握られた。Tは、輕い粉雪が吹き嵐むなかを、下宿へと歸つてきたのだ。

新聞紙のなかに包まれた瓶は瓶こそみせられた最初のものだが、中味こそちがつてゐた。

……

……

憤然としたTは、角瓶を燃えあがつてゐる暖爐のなかへたゝきつけた。

圖タク・ガール

警察力が完備して檢擧の手がゆき屆いてくればくる程に、逆に犯罪の魔手はそれよりも深刻になつてくる。

現代アメリカでは醜い性業を嚴禁防遏してからすでに二十年の歳月を閲した。この點では現代アメリカはたしかに世界に誇るものがある。だが、人間の性質を本能を歸いた方向にばかり向けておくことは不可能だ。秘密を好み惑溺を愛し慘忍を讃める人間性はつねに動いてゐる。秘密は公開を好む現代アメリカ人の風俗に決して沒影してはゐない。柳暗花明の巷が公開されてゐない紐育市俄古ではあるが、秘密に暗々に折花攀柳の窖は到る處にある。

紐育の上街百二十丁目位、ハドソン河の堤道をひとりぶらついてゐた。列をなしてドライブされてゆく自動車の列のなかから、ふいと歩道ちかくへそれると急に停つた自動車。

自動車の扉があくと、凄い美人が車のなかから、

「あら、お珍しい、しばらく」

と、話しかけた。運轉手は、奥様のお命令とあつてか、すでに扉のハンドルへ手をかけてゐた。慇懃に男の乘るのを待つてゐた。

こんな場合に、紐育や市俄古のミチガン・アベニュ。ウあたりでぶつかつて

もまごまごしてゐてはいけないのだ。自動車の美人も舊知に久濶ぶりで出遭つた表情よろしく。挨拶された男も、昔馴染の女にでも遭遇した思はせぶりよろしくあつて、挨拶よりも車へとのることだ。

勿論、この車の美形は舊知でもない。男もどこの馬の骨だか。そこはスピード時代の現代アメリカ。

「ホテルにゐらしやる？　それとも車で？」

とくるのが彼女のつぎの挨拶だ。金は勿論前拂だ。「それとも車で？」には誰も驚くだらう。だが、外套の下にはスリップインの簡單な肌着ひとつの彼女。車中での××××××巧妙。運轉手は四邊に氣を配つて、暗い街路を街路をと、ガソリンの臭ひをのこしながら駛つてゆく。

彼女のヴァニティ・ケースには、コンドムとヴセリンとを。クションの下にはタオルがちやんと用意してござるから車中でも飽くまで××××××だ。

自動車のクションはそりや飛び切り上等。廣いホテルの寢臺のスプリングの彈力どころではない。車は概ね六汽筒の高級ものだ。

復活祭ダンス

自活し乍ら學問をするのは現代アメリカの大學生活の時代的特色だ。

稼ぎながら大學を完全無缺に授業も休まず卒へられるのが現代アメリカの大學以外には英獨佛にはみうけられない。時間割から學期から學科選擇と試驗制度までが自活學生にもつてこいにできあがつてゐる。それでゐて富豪の息子や金持の倅が大に贅澤して大に享樂してゐられるのが大學の生活である。

復活祭にはそろそろ春の輕衣になる。ゴルフもテニスもよくなつてくる。復活祭のお馳走はアメリカは英吉利と同じで殆んど玉子料理にきまつてゐる。

復活祭日曜日の前の金曜日の宵から大學ではどこでも三年生主催で復活祭舞踏會を催す。ジュニア・プロムネードと卒業式の大舞踊會と相比敵した大仕掛もの。四日間引續いて華やかなボールで晴れとばかりに戀人を呼び姉妹を招き女友人を招待する。こんな時だ。器量のいゝ容貌自慢とかダンス自慢の愛人をもつてゐる大學生はその入場券から宿泊料から往復のもの花束土產とひとり呼んでも素晴しい入費が嵩む。ジャズに起きてジャズに暮れてゐる苦勞なしの大學生は、夢中になつて、四日間をダンスに接吻に抱擁に耽ける。

その華々しい光景を一年生二年生は白眼んでゐるが、羨しげな表情だ。黄い日本人も餘りに榮えない。

ダンスは宵の九時頃から曉近くまで浮かれぬく。終了つてそれぞれと歸る時には大學生が純白ウェストにタキシードでダンス姿の婦人を揚々とエスコートしてゆく。こんな晩に黑奴の密醸酒賣りが大學の街端で一晩にうんとうり揚げる。フラタニティーの窓から、コンドムがもちこまれたりする。それでも、大學では規律ある大學生の社交生活の訓練として毎年きつと催されてゐるから結構だ。遣雜法の巧妙さはフランスの現代女とアメリカの現代娘が伯仲する。

ダンスは、健全な社交とか清淨な娯樂なんて氣を吐くもの、ひとつ現代アメリカの大學生のダンス享樂ぶりをみてから說教すべきだ。

髮ピンと鍵

陽氣。明朗。輕快。戲謔。機械化。合理化。電化。能率化。スピード化。これらの新しい明い特徵をいかんなく風俗に生活に映出してゐる現代アメリカ人が結構奇妙な迷信に囚れてゐるから世間は理窟ばかりではいけない。新しい科學の力が、風俗習慣を左右し乍ら、舊い迷信の力は否定し難いのだ。

金曜日は凶日だ。キリスト教國だけにこの日はキリスト受難の日として金曜日を忌む。十三も宗教的意味からして嫌惡してゐる。病院にもホテルにも十三號室はない。あつてもそこは物置か何かだ。招待する人數が十三人だとなんとかして十四五人にする。馬の蹄鐵はどんな譯だか縁喜がいゝとされてゐる。馬の蹄鐵を往來で拾ふと壁にかけたりして飾つておく。クローバーの四つ葉と馬の蹄鐵は幸福を齎すものとして好愛する。

女の髮ピンを道で拾ふ。髮ピンの尖つた方が自分の方に向つてゐればなんのことはない。髮ピンの尖きが自分と反對の方向に向つてゐる時には、ピンを上衣の左ポケットにいれると良友をもつ。斷髮が流行してからは髮ピンもさうごろごろとは落ちてはゐなからう。

「あれ！　流星が」

と夏の宵などに若い女が聲だして流星をみおくつたなら、連れの男は交渉も快諾なくても、その女に接吻していゝ。

食卓で、食鹽を零すと凶兆。こぼれた食鹽を左肩にかければ凶事は去る。

「僕はね。このごろひどく丈夫でね。醫者の厄介にもならんよ」

なんて、自分で自分の健康を誇つたりする時に、うつかり卓子なり椅子なりの縁をことことと指先でたゝいてゐないと、健康は逃げるといふ。たゝいてゐれば、健康は自分の體にゐてくれるといふ。

鍵は西洋人になくてはならぬものだ。とくに、アメリカの風俗に鍵のことをかき落してはならない。

男なら鍵のサックにすくなくも五つ六つか多いのは十二三もいれてゐる。

紐育あたりのアパアートメント住ひではまづ鍵がなかつたら自分の部屋にさへ入れない。入口は嚴重なエール・キーでかゝつてゐる。表玄關には住居人の姓名と番號とそこに鍵をあけろといふ告知の鈕がある。郵便配達夫が鈕一つ

警官が二つ、火事ならいくつでも亂鐘ならぬ亂押しだ。訪問人は三つ四つ位押す。その鈕が押されると、何階でも部屋のなかで電氣ベルが鳴つて、上つてこいといへば入口の鍵があく。鍵をあけても、扉の中部には丈夫な鎖や止め金具で半あきになつて顔だけみえて體のはいれない裝置だ。白晝でも、强盜ホルドアップ强姦の流行るところでは、人相をみてから扉をあけるんだ。

鍵のかゝつたアパアート。そこには獨身女が××××××××××。貞操帶に錠前をつけたのは十字軍時代のことだ。

這の紐育人も、女の×××××鍵だけはまだつくつてはゐないらしい。

疲勞した男

大都會の盛り場の寄席や映畫館ボードビルによく「今夜紳士に限る」とか「今夜淑女だけ」の宣傳布をたれた見世物をみた。

紳士に限ると好奇心に訴へておいてさぞかしエロ的に物凄い事と思ふと案外の山師ものがある。淑女限りにもその例だ。紳士に限るでは、いちど南部の旅行の途上ボルチモアで裸體女の××四十八手といふ實演をみたことがあつた。

始めのうちは、男の好色觀客ども哄笑爆笑奇笑嬌笑で、舞臺上の實演を歡んでゐたが、進むにつれてしんとして覺には觀客席から咳ひとつない沈默に陷つた。

黑坊の若いはちきれさうな肉體美の女が、ぶらんこにのつてゐるのを××した中年增が背後からぶらんこにのつた儘で××××××××××。眞劍な男性さが觀客から湧いてゐた。女本位のアメリカにはこうした女と××××××××××の情景もあるんだ。

劇場で、音樂會で、タキシードに身を固めた御亭主や紳士が、いつも女の

片腕を擁してエスコートの姿は堂々としてゐる。だが、その堂々の御亭主も紳士も座席に坐ると、いつのまにか睡魔に襲はれてうとうとと舞臺をそつちのけで桃源郷へ急ぐ。女を知つた男は、二三年すると女に疲勞してくるのが現代アメリカの男風俗だ。

現代アメリカの男は女に對して活動する。女のために働く。女のために激動する。負擔の激しいために疲勞した男が目につく。

臥室では女に頭張れる。食卓では女を歓待しなければ紳士でない。昇降機では女がゐれば脱帽しなければならない。座席も譲らなければいけない。女第一の現代アメリカでは、男は夜睡眠も十分でない。居眠りはジッダスがマギイーとオペラ見物の時ばかりでない。

疲勞した男が婦人を擁して劇場のボックスで音樂會で講演會で居眠る。

疲勞した男が、受難の男が、生々として解放されるのが倶樂部である。

社交倶樂部でもビジネス倶樂部でも、男は男だけ。女は女だけ。男のなかへくる女のゐるのは「夜の倶樂部」だけ。そこへ出入の女はすでに札つきのもの。妻君も奥様も、男が倶樂部で女を中心に惑戯けるナイト倶樂部の内情は、窺ひ知れないことになつてゐる。

擁るべき女から解放された男だけの赤裸々はそこに本能的快樂の充足が生じてくる。ナイト倶樂部は妻君の鋭い監視から解放された天地だ。男が、弗で征服した女群は、人魚にみたてて銀盤のなかに三鞭酒で水浴する。その人魚を擁して三鞭酒をのむ。疲勞の男はかくして蘇生する。

勞働者は、玉突場に、一品料理屋に。紳士は、ナイト倶樂部に、おのおの舞臺を占めてゐる。勞働者は勞働者だけに女に對して疲勞してゐる。女のないのは女を探し乍ら。女のあるのは女の强氣に。疲勞した男の顔をみると、現代アメリカはやはり女の國だ、としみじみと感じた。

疲れた男

中世の風刺畫

伯林情話

1

太陽の顔をみない日が幾日となく續く。

でたか、と思ふと、陽光の淺はすぐとうすらいでしまふ。灰色の空が鼠色に、鼠色の空はどんよりと蔽ひかぶさつて、灰の霧のなかに午後の二時だといふのに街燈の灯が、玭素色に蠢く。

その頃には、リッツエンゼーの白樺の森の初雪は、暮れのこりのかすかのひかりのなかに、迷子のやうに輕やかに舞ひ踊つてくる。伯林の初冬は、かくしてついにきてしまふのだ。

冬の伯林での留學生活は、心も魂も冷えきつてしまふ。

宵やみにつゝまれた、夢のやうな氣持になつて故國の冬を偲んだりする。凍つた鋪石道の靴音がかちかちと堅氷でも踏んであるくやうにきこえてくる。

煉時計が、間のぬけたひゞきで五時を告げた。下女が、靴下もつけない素足をそらせて、カフェと果物菓物を盆にのせて部屋へくる。あとはしづかに暮れてゆく。

しばらくして、扉をノックして這入つてきたのはKだつた。

「今晩は！」

喰べかけの果物を、皿において、まづ眼で挨拶した僕は、ごつくりと果物のかたまりを咽喉に通しておいて始めて、

「やあ！」

と一聲だした。

「相變らずお勉强ですね。休暇になつたんだからハルッへでもお好きのスキーにでもゆかれたかと思つて。でも、おゐでで大助り」

お世辭にかけては百パアーセント大達者なKは早口に饒舌つてくる。

「實はね。同國人に繻襦をだすのも嫌でね。それでも事實ゆき詰つてしまつたんですよ。君んところくるのも、と思つたんだが、家内(フウウ)がいよいよときた」と手つきも困つたらしく妊娠した樣子をしてみせた。それで、墮胎(アボルト)させるに百マルクばかり要るから、その半分……五十マルク融通しろといふのが、Kの口上だつた。

Kの薄ら狡るさうな眼つきを斜すにみながら、果物のあとの菓子を喰べ了つた僕には、いつとなしにKに對するいつもの憎惡感が湧いてゐた。

東京のあるやかましいミッション女學校の學監の甥だといふ彼Kは、中學を了へたばかりに、ある富裕な家庭の娘——學監の伯母の家での見知り合ひから——を不良的に冒してしまつた。その戀人と、同時に、すでに性的に妻であつた娘と、娘の家からの金で追はれるやうに音樂研究を名目に、兩人して伯林に一年ばかり前にやつてきたのだ。

爲替暴落(インフラチオン)の時代に、もつてきた金も使ひ果した。金の切目が娘との緣の切れ目であつた。娘は寂しく倫敦の義兄の許に引きとられた。

Kは娘との別れをよいことに、街の女と同棲した。二三ヶ月の同棲中に最初の街の女の三番目の妹と同棲するといふ急テムポで、女から女へと、鵠鴒のとび翔るやうに、伯林での日をくらしてゐた。

「だが、いづれにしても、君の墮胎のお手傳ひは變だなあ」

と、Kへ對しては日頃からの憎惡感と墮胎といふことで素氣なくいひ放つた。

「變だつて？　そんなこと。ここぢや日本と違つて朝飯(あさめし)前ですよ」

「……」

「金さへあればね。だけれど、今の工合ぢや餓鬼にでられると、その日その日のパンも危いですからね」

歳よりませた不良青年は、安葉卷に火をつけながら、いかにも異國人の女を妻にもつといふ誇示をもつて話してゐた。不幸な、まだ陽の目をみない胎兒を闇から闇へと葬るために、僕は餘儀なく五十マルクわたした。

つめたい握手。Kは目禮しながら部屋をでていつた。カフェの香は、まだ部屋のどことなく匂つてゐた。

二時間のあとで、僕は厚硝子のやうに凍つたアスファルトの往來を、ビスマルク・ストラーゼの地下鐵のUの字が幻のやうに流れるのを凝視し乍ら、歩いてゐた。

突然、ばつたりと出遭つた女。

「おいでなさい！　ドクタァ！」

と挨拶された。街の女であることはいふまでもない。僕は返事もしなかつた。墮胎、墮胎……と考へながら歩いた。

2

伯林の冬の夜は靜だ。

レストランからはモッアルトの小夜曲(セレナーデ)が流れてゐる。パイリッシャプラックの地下鐵の穴から舗石道にでたその瞬間。後向きの毛皮の外套。落葉した裸の菩提樹の宵闇に吸ひこまれてゆのは……たしかにK大學教授のT氏だ。脚つき、歩きつき……下宿の娘の批評じやないが、伯林へくる日本人はO形(オーバイン)の脚つきで、寫眞機を提げて、きよろきよろと歩くと。まさにそれだ。

T教授の專攻が、なんだか、まだきいてもゐない。

いつまで伯林大學に聽講してゐるんだか、それも知らない。けれど、一度日本人倶樂部の鋤燒會で友人に紹介された後に、二三度遭つていろいろと話す

と、T氏は婦人については驚くべきほどに微に入り細を穿つて、殆んど異國の女といふ女は味つてゐるといふ。シベリヤから伯林への旅で、ワルサウの三十分間の停車時間を利用して、街の女をすませてきたのも、T氏武勇談の得意の場面であつた。

地下鐵の穴をでてから、毛皮の外套紳士の奇妙な脚つきを、遠目にみながらあとをつけてゆく。

ランズフータ街の日本料理店花月の入口で、追ひついた僕の跫音に、

「なんだ、君か」

「間諜みたいに……あとなぞつけて。間諜といへば例の映畫みたかね？　腹切りだ。はつはつ」

「それはさうと、君に折入つて話したいんだ。眞面目な話さ。實はね、もう留學年期もあけてもう愈々國へ歸るんだが、四五日プラーグへいつてたんだが矢張り伯林がいゝね」

「伯林がいゝんですつて？　さうぢやないでせう伯林女が戀しいんでせう」

「どつちらもね」

「プラーグでしたか。例のお買ひものでも？」

「いやはやチェックの女は廣いね。でも味がないよ。ぢやビクトリヤでお待ちしてゐるから。ぼんとに來て呉れ給ひよ」

「また後程に……」

T教授は、花月へと消えていつた。

……

……

カフェ・ビクトリア。

こゝは、ベートベンもシューベルも聽かれない。末梢神經をいらだたせるやうな官能的なジャズと酒と、しかして、女。そこの、踊り場は街の女の取引市場だ。

孔子の敎、男女七歳にして同席しない東洋の君子國からのいはゆる優秀な留學生諸君や海外研究員諸君が、學費の何十パーセントかを誰も彼も健康維持費として、人肉市場の姫御前に捧げてゐる。誰いふとなしに、生眞面目な禁慾生活は癒愁とで氣が變になると。A醫學博士が伯林大學の外科病院で、獨逸猶太人の看護婦に白晝廊下で猥褻な擧動があつたのも、A博士のながい禁慾生活から神經が狂つたからだとまことらしく傳へられる。故參面した日本人があとからの新參ものにも、禁慾生活の怖しさを說敎してきかせる。かくして、性慾の合理化が經濟化されてくる。カフェ・ビクトリアはやゝ日本人專門といふ型。街の天使達が日英獨語の片言混りで、そこに網を張り東洋君子國の賢明なる若い紳士達の渴仰の的となつてゐるのだ。

どうせそこに集るのは、標的は酒と女だ。日本人に遭ひたかつたら、飯どきに倶樂部にゆくか、日本人ゆきつけのカフェが、郊外の下宿を訪ねるよりは時間の節約だ。

3

玄關からはいると、程遠らぬ卓に、R氏の燦然たる禿頭が、にこやかな顏の上でひかつてゐた。R氏はS高商の倫理學敎授。すでにいゝお年配だ。

「やあ、先日は有難う。お蔭で、デッサウではみつちり表現派藝術とその敎育制度とを研究しました」

「そりや結構で……」

「パ。ハウスの校長は瑞西人ですてね。和蘭、露西亞の教授迄もゐました。

仲々國際的ですよ。今宵は、大に伯林の夜を倫理的に研究しやうと思つてね……何に、それ以外に別に……」

と言譯がましい會話が續く。これが日本人の國民癖だ。いやに紳士ぶつてゐる。素裸になりきれない。カフェへきてひと目で街の女とわかるのと酒盃を交してゐながら、やれ研究だの、夜の觀察だのと、假面をかぶつてゐる。

やれ獨逸の裏面的研究だとか社會的觀察なんて題目を唱へてゐなければ女も買へないならA博士みたいに禁慾一點張りが立派だ。變態的だが、ピストルつきつけて看護婦を脅迫してスカーツを××××××した方がまだ男らしい。こんなのが故國へ歸ると、やれ歐米の性生活は頽廢せりの性道德はどうのと絶叫するんだ。頽廢そのものが生命の源が花柳界の眞姿だ。日本だつてさうだ。

禿頭のR氏と話をやめて、T教授をさがす。T氏は北寄りの隅で、女二人を擁して大分メートルがあがつてゐたらしい。

「やあ、さつき失敬。約束通りきてくれて」

女達が、坐つたまゝで手をさしのべてくる。

給仕男が黑ビールをもつてくる。

4

どこまでも官能に訴へてくる猥褻な音樂。ダンス。ともすれば太腿まで露出する短いスカーツ。なだらかな兩腕の魅力。ふくよかな乳房のもりあがり。猥雜な彩りみせた流眄。シャンパンの泡。部屋全體のやはらかい觸感。愛慾の大鎔鑛爐だ。

こんなところで、まだ研究だ觀察だと、いやに理性を働す癖に、街の女に

虎の子の信用狀まで召しとられるのだ。あとで泣き面して故參になんとかしてくれと頼んで歩く留學生の群。

ジャッズと乳房の亂舞。靈と肉。理と熱。慾と性の三部曲は、宵ふけての伯林の空に溶けこんでゆくのだつた。T教授は酒やけした顏で、娼婦の方を盗見し乍ら語る。

「突然だが、こいつをつれて歸るよ……アンナだ」

と、いつにない輝きを瞳にうかべて、アンナを凝視した。

T教授に對しては伯林の日本人はいろいろの批評をしてゐた。やれ日本人の面汚しだとか、あれが在外研究員か、と。非難のことばは渦巻いてゐた。だが、僕はTが好きだつた。いやに假面をかぶつての猥褻で、下宿の妻君から告訴されたり、研究だの觀察だのと紳士らしく僞善の奴等よりも卒直だつた。Tは、日本でこそやれないんだ、教育家だ大學の教授だと足枷をはめられてゐるんだから外國でこそうんと人間らしく亂舞しろ、といふのがTの持說だつた。

彼は氷滑の「アドミラル・パラスト」では一流の氷滑り女優と浮名を流した。日本人專門の魔窟ではTは金放れがいゝので大に持て囃された。女に接してゐる時のTの姿はまつたく素裸になつてゐた。ワルサウ停車三十分間での早業はいかにもTらしい。

「アンナはね、二十一ですよ。僕は四十六なんだから、女の商賣柄、齡の差も知つてゐるし××の差もわかつてゐる。今の僕にはこのブロンズの小娘の×××がなければ生きてゆけないんだ。遁れるつもりでプラーグにも避けてみた。ザクセンの雪のなかにもいつてみた。だが、駄目だつた」

娼婦アンナと、その朋輩の女に酒をのむやうにいつた。

「そりや、プラーグで娼婦もかつた。けれどコンドムつかつての手淫に過ぎない。僕にはアンナなしには一日もゐられない」

悶々の情は、アンナの顔をみながら、僕にも炎々としてつたはる。

中年者の爛熟した肉慾。アンナの可憐さと結んでTはまつたく肉慾と戀の俘虜だつた。アンナをつれて歸國すれば、親類眷屬は勿論のことTの家庭からも大波紋がおこることもTは豫期してゐた。妻君は二十年前に死んだ父のきつい命令で戀も愛もなくつれ添うた。さうして三年目には彼女の虚榮心を滿足させ得ないで別れた。二度目は父親の妾の妹が、看護にきたのが緣でづるづると一所になつた。できた子は里子にだしてもう九歳になつてゐる。その後のTにとつては、女はたゞ肉慾の機械にすぎなかつた。內緣の妻は家政婦だつた。折花攀柳の戲はTにとつては生きてゆく道筋であつた。

伯林にきて一年半の異國生活では、選りどりに女を漁つた。ザクセンでは三ヶ月も尼僧さんと嬉戯した。部屋をかりた家の寡婦からは色氣狂のやうに追ひかけられた。ついに、偶然と僕と一夕飲みにいつたダンス場でアンナを知つた。アンナはさして器量よしではなかつたが、一夜の××はTをついに俘虜にしてしまつた。僕はをりをりTから呼び出しをかけられてはアンナの惚氣をきかされた。中年のTは娘みたいのアンナを圍ひものにしてしまつた。

「君は默まつてゐて、なんともいはないのは狡い。アンナをそもそも……」

「判つた。また、さう昂奮せずともいゝ。酒は話を確めてからにして。とにかく人生の重大事件だからね」

「僕あ、僕かあ、酔つちやいないよ。酔つていればそれこそアンナに對するリーベだ」

アンナは、朋輩のミアと艶笑した。ミアは、

「戀愛は盲目！」

口のなかで囁いた。

「淫賣婦は殿方と一所になれないの？　淫賣は罪惡ではないわ」

アンナが沈默を破つてきた。僕が險惡な顔つきから、アンナもミアも言葉を切つてきた。

「なるほどね。アンナもミアも淫賣は罪惡だとは思はないんだね。何んと思つてゐる？　慈善事業で博愛衆に及すとでも？」

「あらつ！　眞面目な話よ。そりや今の社會制度や法律ぢやわたし達のやつてゐることはよくないでせう。だけど、男性が男性の××を抑制しないで……」

音樂はやんでゐた。ダンスもやんでゐた。室內は妙に靜になつた。アンナの聲が癇高くはねかへつてゐた。

「あたしの知つてゐるお嬢さんが、二十歳もちがふ金持と結婚したわ。ありやなんでせう。勿論、そのお爺さん好いちやゐなかつたのにお嬢さんは嫁いだわ。あたしだつて爲替暴落のために、こんなになつたのは、カイゼルが惡いんだわ」

「アンナのいふ通りだ。カイゼルがわるい」

突如として、音樂がはじまつた。『わたしやマダムのお手にキッスして』が演奏されてゐる。娼婦達は、それに和して唄ひ、客はしづかにきいてゐた。

わたしや奥さんのお手に接吻
接吻のあとは夢みるばかり
夢のなかには紅の唇
わたしや甘い男よ、奥さんてば

ミアは、僕に話しにけた。伯林で何をしてゐるんだとか、長い在留か。お母さん妹さんはどうしてゐるんだと、街の女には惜しいくらいに處女性が流出してゐた。その瞳。その唇。やはり職業的に微動してゐたが……。

5

踊り疲れた男女の一群。隣りの卓についたと思ふと、エルゼが脚にも腕にも、×××××にも、情と慾とを湯氣だたせて、僕達の卓にやつてきた。

エルゼはあどけない子供のやうに、僕の膝にどかつと腰おろしながら、Tにもミアにもアンナにも目禮した。

エルゼはライン・ワインに唇を濕した。あとを僕の口にともつてきた。

「まあ、こんなにスカーツをまくりあげて、いけない」

「……」

「……あなたならね」

「あなたぢやなくつて、あなたがたぢやないの？」

「あらつ……」

「そのお強い腕で、抱きしめてよ?!」

「接吻(キツス)してやらうか」

Tは快げにアンナからビールをつがしてゐた。

「T君、それぢや連れて、アンナを、おかへりですね」

「で、いつ頃、伯林出立です？」

「二週間後位に」

……

……

「あなたは、いつお歸り。まだ？」

「まだだよ。エルゼ。だが、歸るときもひとりぼつちだ」

エルゼは默まつてみんなの顔をみた。Tとアンナとミアは立ちあがつた。

カフェ・ビクトリアで別れて二週間後に、アンナがピストルで自殺したと傳へきいた。日本へかへつてきたTはいま猶健在だ。大學の講義に忙しく、あとから歸朝した僕は、日本ではいちども逢つてゐない。傳へきくに、Tは伯林の夢をすつかり忘れてゐるらしい。

カフェと酒場の銀座

徹底味のかけた銀座……女給受難時代……銀座のガルソンがいゝ……女給群よ街の妖婦に代れよ……レストランにみるべきものある銀座街……酒場の移動と暴値……裏通りの酒場はプル階級獨占……時代錯誤の化物横行……カフェ・酒場とプロ階級……（この一篇は昭和五年二月の銀座の横顔を描いたものである。だから、その後、大に變化してゐることはいふまでもないことだ）

徹底味の缺けた銀座

赤い灯。青い灯。黄い灯。イルミネイシヨンの波。ネオン・サインの渦巻き。『ホリイ・ベエルジエル』と宵やみの中空に描きだした巴里のさかり場はさかり場としての徹底さをもつてゐる。

そこに、巴里では、群在するカフェにも酒場にもさかり場の徹底さが滲みこんでゐる。それほどのさかり場の徹底味を缺いてゐる銀座街には、カフエにも、酒場にも、銀座あの邊一體にさかり場としての徹底味をもつてゐない。

玉の肌。ふつくりした乳房の慮鯛。すつきりしたふと股の×××××××。なだらかなもろ腕の魅力。ふくよかな腰の叫び。融けこむやうな流盻。どことなく漂ふ頽廢的情調などは寸毫もない。巴里では、さかり場のカフェにはカフェ情調。酒場には酒場氣分が、どこかで人間の心をうちのめさずにはおかない動きとなつてゐる。

巴里では、カフェにも酒場にもレストランにも、女給群はゐなくても、そこに集散する客そのものの群像が徹底したエロティシズムを展開してくる。

銀座の、どこに、それがあるであらうか。

「……銀座では酒場アホヒがいゝよ。あすこには巴里の匂ひがするよ」と、人からわざわざ傳へられた。早速、でかけてみた。

けれども、酒場アホヒの匂ひ、それは決して巴里のカフェや酒場の匂ひではない。巴里どころか銀座の酒場らしい匂ひさへもなかつた。いつてみただけで、ばかばかしかつた。あれを巴里の酒場なんて、巴里が泣く。

酒場アホヒではいかにも銀座らしくカクテル一杯に法外の値段をふんだくるやうにして暴値る。お洒落連といふのか、お常連といふのか、いやにのさばつ

てゐる。これは酒場アホヒばかりの空氣ぢやない。銀座のカフェとか酒場とかには總體的にみられる忌むべき空氣だ。

酒場アホヒが、その入口に、その室内裝飾に、椅子卓の配置に、相應の苦心のあとをみせてゐることは認められる。だが、あすこの「老いたる牝雞」が、××××的な瞳をきらつかせて酒場の客を呼ぶのは、そのむかし、有樂橋際の笹屋の女將が桃吉として濃艶な女將ぶりをみせてゐたのに比しては、まるで問題にならない。

カフェにしても酒場にしても、笹屋の桃吉とか喫茶店ウロンのお雪さんとかなんとかの美人か妖婦かをおいて、それをおとりにしての營業のゆきかたは古い。カフェでも酒場でも、すでに、英雄主義の時代ではない筈だ。

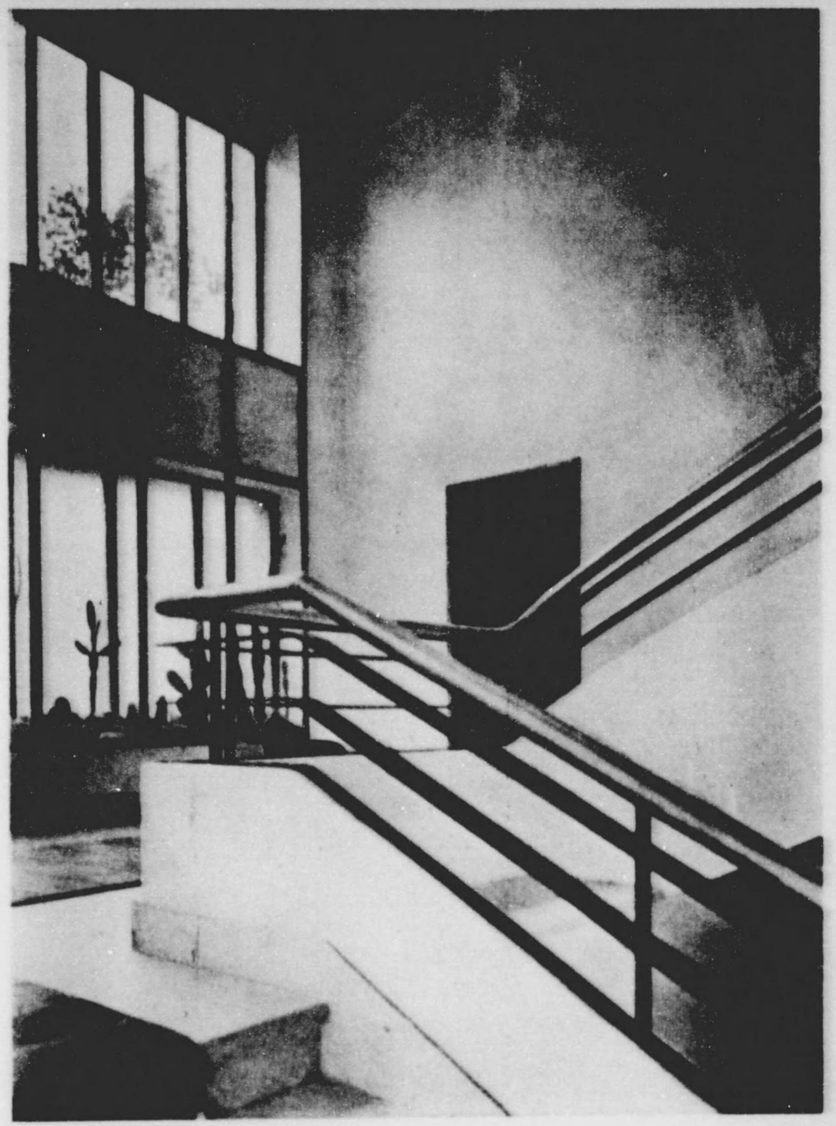
酒場アホヒといへばそこの×××たる「老いたる牝雞」に對してはところこそ銀座街外だが第一相互向うの横町の酒場ガストロの×××がいゝ對象だ。ガストロが、京橋向うでさかり場郊外といつた處で、相當の酒をのませながら客もついてゐるのは「高級」を自稱してゐるからでもあるまい。

わが國カフェ起原期のカフェ・プランタン全盛時代の××姉妹がガストロの酒場を仕切つてゐるのは、銀座にも、その客あしらひでは、比敵すべきものはなからう。だが、高値いことはいふまでもない。

酒場アホヒも酒場ガストロも、ともども、まづ暴値るなよ。

女給受難時代

巴里のカフェに酒場。それらはモンマルトルのタバランにしてもムウラン・ルウジュとかムウラン・ド・ラ・ガレットなぞの踊り場を中心にして群在してゐる。



機械化するカフェ